

もくじ

第1部 SGH 研究開発計画

1.	SGH概要ビジュアル（初年度版）	----1
2.	研究開発の概要（育てたい3つの力）	----2
3.	順天高校 SGH 基準ルーブリック	----3
4.	研究開発完了報告書・目標設定シート（平成29年度）	----4
5.	SGHの対象生徒と年次進行	---15
6.	SGHプロジェクト校務分掌（平成29年度）	---16

第2部 年間活動報告

7.	2017年度SGH活動カレンダー	---17
8.	GLAP 活動報告	
8. 1	1学年のSGH活動	---25
8. 2	2学年SGH海外研修・課題研究ワークショップ	---27
8. 3	コアグループの役割と全校普及	---29
8. 4	コアメンバー活動報告書	---31
8. 5	2017年度SGHフィリピンフィールドワークスケジュール	---36
8. 6	英語圏の学校と共同でのフィリピンフィールドワーク	---38
9.	GLOBAL WEEK	
9. 1	Global Week 概要	---42
9. 2	Global Week プログラム	---43
9. 3	Global Week トピック情報抜粋	---47
9. 4	Global Week アンケート	---49
9. 5	立場や壁を超えるために。－Global Week の意義とその将来	---52
10.	SGH海外研修と課題研究報告書	
10. 1	SGH海外研修と課題研究報告書－ねらい、実践、検証と改善策	---56
11.	ネットワーク	
11. 1	SGH Global Awareness Survey	---84
12.	意識調査とパフォーマンス評価	
12. 1	順天高等学校グローバル意識調査（全校生徒対象）	---89
12. 2	生徒変容調査（3学年SGH生徒対象）	---96
12. 3	基準ルーブリック集計（1学年）	---104
付録	教育課程表☆	---106

1. SGH 概要ビジュアル(初年度版)

グローバル社会で主体的に活躍する人材育成のための研究開発

－ アジア・太平洋地域における教育的支援プロジェクトの実践的研究－

順天高等学校の教育概要

教育目標 「英知をもって国際社会で活躍する人間を育成する」

教育方針

- ① 進学教育 : 個性を生かした類型制による多様で高度な進路
- ② 国際教育 : 多様な国際交流や英語教育による実践的な活動
- ③ 福祉教育 : 多様なフィールドで自主的なボランティア活動

★ グローバル社会に対応する多様な教育実践をしているが、それらを有機的に関連させたグローバルな探究学習を開発することで、より質の高い教育成果を期待できる。



SGHの研究課題

1、ネットワークによる共同的な探究学習の開発

・グローバルな課題に対する英語の資料教材等を、海外連携校の生徒等と共同制作する。

2、スクールワークによる統合的な探究学習の開発

・グローバルな課題に対するワークショップで、英語教材等も用いて統合的に探究する。

3、フィールドワークによる創造的な探究学習の開発

・グローバルな課題の解決に向けたフィールドワークを、海外の生徒と共に実践する。

★ フィールドワーク : 海外生徒と合同で、フィリピンでの英語による教育的支援活動



グローバル社会で主体的に活躍する資質・人材育成

- ①創造的学力 ②国際対話力 ③人間関係力
+ IB教育の学習者像 (IB Learner Profile)

2. 研究開発の概要（育てたい3つの力）

グローバル社会で主体的に活躍する人材育成のための研究開発

～アジア・太平洋地域における教育的支援プロジェクトの実践的研究～

研究開発の概要

グローバル社会で主体的に活躍するために育てたい3つの力

創造的学力（主体性）

国際社会における様々な問題に関して、自ら主体的に課題を発見し、その解決に取り組むために、創造的な課題探究力（課題を発見し、研究し、解決しようとする力）が必要です。

国際対話力（多様性）

国際社会を構成する人々の多様性についての理解を前提として、共感力と英語による対話力を大切に、ともに課題と向き合って、共生する社会を築く力が求められます。

人間関係力（協働性）

国際社会における様々な課題に直面する現場において、自立した個人として多様な人々と関わるとともに、協働して課題解決に向かう力が大切です。

3つの力を育てる3つの場面

Network



SMUS 高校とスカイプで事前学習

海外の連携校：LaSalette 校 (The Philippines) , SMUS 高校 (Canada) , Chitralada 高校 (Thailand) , Oxford Area 校, Rangiora NLS 校 (New Zealand) , St. Ives 高校, Centenary SHS, Cavendish Road SHS 高校 (Australia)

- グローバル課題に関する共通意識調査
- 学校交流による共感力や実践的英語力の育成
- 交流校でのワークショップ（英語によるプレゼンテーション等）

School Work



外語大 小川先生の論文指導

連携・協力大学：APU、杏林大学、明治大学、学習院大学、東京外語大学、麗澤大学、埼玉大学、テンプル大学ジャパン
 連携・協力団体：Caring for the Future Foundation (CFF)、DEAR、JICA

- 大学、NPO 等と連携した課題研究
- 異文化理解・多様性受容のワークショップ
- 外国語4技能強化、プレゼンテーション、ディスカッション、グループ・コミュニケーションの実習、論文作成

Field Work



スラム地区でのインタビュー

フィリピン・ルソン島（第1回派遣 2015年9月28日～10月5日 生徒12名）

- フィールド調査と実践研究（文化人類学的な参与観察）
- 児童養護施設、最貧困地区における交流、Sual 村でのホームステイ、支援活動の実践、LaSalette・Magaldang 校でのインタビューとディスカッション
- SMUS 高校との協働ワークキャンプ（カナダ教員による実地踏査）

課題研究（教育支援に関する実践的研究）

就学意識の
向上

公衆衛生の
改善啓発

海外進出企業と
NPO

グローバル
意識調査

自然災害
環境保全

基準ルーブリック

資質・能力	評価項目	1	2	3	4	5
創造的学力 (主体性)	Skill ①	1 課題の確に発見し、解決する力	解決すべき目の前の問題について、何が自分の課題であるかを考えることができない。	解決すべき目の前の問題について、特定の領域に限定すれば、何が課題であるか自分で気づくことは多いが、それに対する的確な解決策を出せることは少ない。	解決すべき目の前の問題について、特定の領域に限定すれば、何が課題であるか自分で気づくことが多く、それに対する的確な解決策を出せることも多い。	解決すべき目の前の問題について、複数の領域において、何が課題であるか自分で気づくことが多く、それに対する的確な解決策を出せることも多い。
		2 幅広い分野の知識を探究しようとする力	新たな知識に興味関心を喚起されることが少ない。ほとんどの知識を自分から調べようとする。ほとんどない。	時折、新しい知識や情報に興味を持つことはあるが、そのことを自分から調べようと思うことはほとんどない。	新しい知識や情報に興味を持つことはあるが、そのことを自分から調べようと思うことはほとんどない。	新しいことを発見することで喜びが感じられる。興味関心を喚起されることが多い。必要に応じて、積極的に行動している。
		3 自らの課題とその改善策を発見しようとする姿勢	これまでの学校生活において、自分に課題や改善点があるかなど、考えることがない。	これまでの学校生活において、自分に課題や改善点があるかどうか、曖昧だが考えたことはあるが、それ以上のことではできていない。	これまでの学校生活において、特定のテーマや領域の中で、自分の課題や改善点を具体的に気づけようとする努力が、その姿勢が継続的にできている。	これまでの学校生活において、複数のテーマや領域の中で、自分の課題や改善点を具体的に気づけようとする努力が、その姿勢がこれまでに継続できている。
		4 多様な発想を創り出す姿勢	グループの中で自ら新しい提案をすることはほとんどなく、いつも他者の意見に流れている。	グループの中で、自分と異なる考えや提案がある。気づくと、それにとばかりをすることが多い。	グループの中で、自分と異なる考えや提案がある。その内容をヒソヒソと聞き取りながら、自分から提案を創り出すことが多くある。	③ができた上で、グループ活動の場では特に自分の考えを提示し、自分と異なる考えや提案を引き出せるように働きかけることが多くある。
		5 外国の文化や価値観を共有する力	国や文化の異なる人と交流をする際、相手の文化や価値観に関心がなく、ほとんど下調べをしない。	国や文化の異なる人と交流をする際、「よく理解している」は自分から聞いている。	国や文化の異なる人と交流をする際、「よく理解している」は自分から聞いている。	国や文化の異なる人と交流をする際、相手の主張を聞き、かつ丁寧に自分の考え・意見を言うことができる。
国際対話力 (多様性)	Skill ②	6 英語を用いた対話力	相手にゆづり話してもらえば会話の内容を聞き取り、単語をつないで自分の意思を伝えられる。	相手にゆづり話してもらえば会話の内容を聞き取り、短い文章にして自分の意思や気持ちを伝えられる。	自分の知っている内容の話題であれば、ゆづり話したりゆづり話したり、文章によって自分の考え方や意見を、相手に伝えられる。	③ができた上で、相手から出された簡単な質問に対応することができる。
		7 異なる考え方をリスニングする姿勢	自分の考えや重畳を批判されると感情的な表現で反発することが多くある。	自分の考えや重畳を批判されても反発し、意見を述べ、相手の意見や提案を冷静に受け止めることができる。	③ができた上で、自分の考えや意見を、自分と異なる意見や提案を冷静に受け止めることができる。	③ができた上で、相手の意見や提案を冷静に受け止めることができる。
		8 効果的な話し合いを實現する姿勢	話し合いに参加していても、求められない限り自ら発言しないことが多い。	話し合いの場に参加する意欲はあるが、実際に発言する機会は他者より少ない。	話し合いの場では積極的に発言するだけでなく、異なる意見に対して素直に耳を傾けることができる。	③ができた上で、全体の意見をまとめる方向で周囲に対して働きかけることが多く、結果的に中心的な役割を果たすことが多くある。
		9 集団をまとめ、問題解決に向かわせる力	クラスなどで発生した問題に気が付かないことが多く、気が付いたとしても関わりが浅い。	クラスなどで発生した問題に気が付いた場合、身近な仲間を巻き込んで一緒に問題解決の方法を考えて考えることがある。	クラスなどで発生した問題に気が付いた場合、身近な仲間だけで、クラス全体を巻き込んで一緒に問題解決の方法を考えていることがある。	③ができた上で、問題の解決方法について意見が対立した際、冷静に判断できるように話し合いの流れを誘導することができる。
		10 周囲の人のやる気を引き出す力	自分から様々な課題に取り組むことが少なく、他者に対しては効果的な働きかけはほとんどない。	自分から課題に取り組むことはあるが、他者に対しては効果的な働きかけができていない。ことが多くない。	身近な仲間であれば、自ら働きかけることで前向きな行動やポジティブな考え方を引き出すことができる。	④ができた上で、周囲の人間をやる気を引き出すことが得意であり、前向きな気持ちになれない仲間から相談を受けられることが多くある。
人間関係力 (協働性)	Mind ③	11 仲間から信頼される姿勢	グループ活動の際、自己中心的な重畳をしていると仲間から指摘されることが多くある。	グループ活動の際、自己中心的な言葉を指摘されることは少ないが、活動が積極的でないと指摘されることがある。	グループ活動の際、自分の取り組みや言葉を周知し、仲間から批判されることはほとんどない。	グループ活動の際、仲の良いメンバーから相談を受けたり、意見を求められることが多くある。
		12 仲間と貢献する姿勢	責任を負う役割は避けようとする。全員で決定したグループ活動に対しては批判的な言葉をしたり拒否することがある。	責任を負う立場は避けようとする。全員で決定したグループ活動に対しては批判的な言葉をしたり拒否することがある。	責任を負う立場でも役割や内容によっては受けようとしており、グループで決定した活動で受けようとしている。責任を負う立場でも受けようとしており、グループ内で自分から提案を自ら探して提案することができる。	④ができた上で、グループ内のメンバーそれぞれの特徴を踏まえ、最適な役割や活動の進め方を考え、提案することが多くある。

4. 研究開発完了報告書

(別紙様式3)

平成30年 3月30日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都北区王子本町 1-17-13
管理機関名 学校法人 順天学園
代表者名 理事長 渡辺 孝蔵 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 29年 4月 3日 (契約締結日) ~平成 30年 3月30日

2 指定校名

学校名 順天高等学校

学校長名 長塚 篤夫

3 研究開発名

グローバル社会で主体的に活躍する人材育成のための研究開発

-アジア・太平洋地域における教育的支援プロジェクトの実践的研究-

4 研究開発概要

本校のSGH研究開発は、対象生徒を段階的に拡大する計画で実施しており、各年次で実施内容が異なっている。平成29年度より、第1、2学年全員がSGH対象生徒となり、全員が2学年時に海外研修を6方面で実施することになることから、全校教員が研修先別に関わってSGH課題研究やフィールドワーク等を進める体制づくりを実施した。

また平成29年度は、従前からのSGH対象生徒が実施している、フィリピンフィールドワークの課題研究を深化発展させるために、探究部を新たに設置して進めた。その他、国際理解や課題研究に資する高大連携等をさらに充実発展させ、生徒や教員が協働的に探究活動をする場として、54講座のワークショップをグローバルウィークとして拡大実施した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 (平成29年4月3日 ~ 平成30年3月30日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①高大連携等の充実支援 (グローバルウィーク等)		←										→
②海外フィールドワーク の充実に伴う教員派遣				←				→				
③SGH生徒の活動機会の 充実に向けた支援			←									→
④SGH指導の人的体制や 施設環境等の充実支援		←										→
④SGH専用HP・活動報 告会開催等の支援	←											→

(2) 実績の説明

本校のSGH研究開発計画は、SGHの対象生徒を段階的に拡大する計画で実施している。
4年次の平成29年度は、第3学年82名、第2学年245名（全員）、第1学年245名（全員）が対象となり、総計572名（全校の約75%）がSGH対象生徒である。

① 高大連携プログラムの充実推進（グローバルウィーク等）

- ・SGHに関して協定している高大連携大学は、立命館アジア太平洋大学（APU）のほか、杏林大学、学習院大学、麗澤大学、及び明治大学がある。また、課題研究のフィールドワークに関して支援を依頼しているNPO（CFF）との連携経費を管理機関が負担した。
- ・平成29年度はSGH対象生徒が、1・2学年全員に著しく拡大したことから、多様な課題研究に資する高大連携を充実させるために、昨年の34講座にも増して、54講座のワークショップを「グローバルウィーク」と称して実施する支援をした。
- ・外部の大学関係者などによる講師のみならず、本校卒業の大学生や本校の高校生が講師として参加し、各自の研究実践の成果を公開することとし、参加生徒数1132名で、昨年の867名より31%増加した。参加教員数193名を合計すると延1325名となった。

<参考1>グローバルウィークの実施一覧(10月27日～11月8日実施 生徒参加者計1132名)

実施日	トピックスNO	講師	所属	題目	参加生徒数	参加教員数
10/27	101	長畑 誠	明治大学・専門職大学院教授	私たちが暮らす「地域コミュニティ」って何だろう？	17	3
	102	宮首 弘子	杏林大学・教授	あなたの知らない中国の高校生生活	22	3
	103	菱田 雅晴	法政大学・教授	日中相互ヘイトの構造：中国はヤバイ？日本はウザい？	40	4
	104	Ted O'Neill	学習院大学・教授	Studying Globalization and Business in English	14	3
	105	内尾 太一	麗澤大学・講師	「みなしご津波」とは何か？：海の向こうからやってくる災害と地球社会	19	3
	107	藤長千乃	東洋大学・教授	社会保険の国際比較	17	3
	108	田中 雅美	埼玉大学・学生（3年）	フィリピン・インターン体験（セブ島マングローブ植林とマニラアジア開発銀行本部訪問）	11	3
	109	上原 優子	立命館アジア太平洋大学・准教授	NPO/NGO・社会的企業のミッションマネジメントと寄付	20	3
	110	宮崎 蒼生	順天高校（2年生）	動物と人との結びつき	33	3
	111	カバリヤ マホ	順天高校・SGH支援員	～可愛い動物達を救うには～	29	3
	111	斎藤 健一郎	朝日新聞社・記者	5アンペア生活をやってみよう～電気代190円で快適な暮らしはできるのか～	32	5
11/1	201	和泉 伸一	上智大学・教授	世界における英語の役割	22	3
	202	井田 正道	明治大学・教授	ニュースから学ぶ世界の選挙	22	3
	204	一原 克裕	NPO法人スポーツセーフティージャパン	チャンスを掴む行動力とマインドセット～スポーツ大国アメリカでの経験から伝えたい～	31	3
	206	太田 翔歌	認定NPO法人日本ハビタット協会	教科書プロジェクトinラオス～多民族国家ラオスの教育支援～	20	3
	207	Plas+	麗澤大学・学生団体	How to 国際協力 Part 2！～私たちがカンボジアとフィリピンにハマっちゃった理由～	12	3
	208	Paul Snowden	杏林大学・副学長	Lost in Transcription	3	3
	209	清 和成	北里大学・教授	環境問題とサステナビリティ	19	4
	210	山口 哲一	(株)バグ・コーポレーション代表	音楽業界の「今」と「未来」 (仮)	34	4
	211	山本 威一郎	日本科学ジャーナリスト会議	黒い太陽を追って～太陽と月が織りなす天空の奇跡	37	5
	212	神林 納枝	順天高校・特任講師	SDGs (国連の持続可能な開発目標)	5	4
	212	北郷 美由紀	朝日新聞社・デスク	SDGs (国連の持続可能な開発目標)	5	4
11/2	302	Jason Somerville	杏林大学・Special Lecturer	Student interaction in English using smartphone apps	13	5
	303	酒井 邦弥	神田外語大学・学長	グローバル時代・若者たちの時代	22	5
	304	渡部 靖夫	法政大学・教授	世界の食料問題を考えてみよう	23	4
	305	湯本 潤司	東京大学・教授	波は万物の基本 -三角関数の世界	25	4
	306	荘林 幹太郎	学習院女子大学・教授	オリンピックとその『レガシー』	21	3
	306	荒井 啓子	学習院女子大学・教授	オリンピックとその『レガシー』	21	3
	306	清水 敏男	学習院女子大学・教授	オリンピックとその『レガシー』	21	3
	307	佐藤 裕視	国際協力機構 JICA研究所	日本の国際開発協力ー歴史的展開と今後の展望	19	3
	309	福田 隆晃	順天高校（2年生）	An amazing English experience – your summer in England!	22	3
	309	Max Fiedler	Talkative Travel Education, Vice President	An amazing English experience – your summer in England!	22	3
	310	山本 威一郎	日本科学ジャーナリスト会議・理事	人類にとって科学技術とは何か	31	3
11/7	311	齋藤 博之	東京電機大学・教授	機械工学と夢の材料	22	4
	401	山口 和範	立教大学・教授	グローバル世界で求められる統計的思考力	19	3
	402	土屋 隆裕	横浜国立大学・教授	アンケート調査の方法と結果の見方	22	3
	403	植木 安弘	上智大学・教授	国連から見た世界と国際キャリア	23	3
	404	Marat Zhanikeev	東京理科大学・准教授	PBLのプロブレム部分に着目したイノベーション型プロダクト開発の技	2	3
	405	大沼 宏	東京理科大学・准教授	日本企業の評価を上げるにはどうしたら良いだろう～ROEと企業評価の関係～	21	4
	406	柴田 藍	順天高校（3年生）	留学×キャリア ワークショップ	15	3
	406	鈴木 健太郎	Beyond School・副代表	留学×キャリア ワークショップ	15	3
	407	由井 哲治	外務省嘱託、順天高校講師	「世界システム」論と「国際関係論」から見た西洋近代史	26	3
	408	井上 忠男	日本赤十字看護大学・教授	“戦争の中に慈悲を”～殺戮が続く世界における赤十字と国際人道法の役割	20	3
	409	森本 章倫	早稲田大学・教授	次世代交通とコンパクトシティ	26	3
11/8	410	新 江梨佳	順天高校・SGH支援員	“コミュニケーション能力”を問いなおそう	33	4
	411	樂 大雅	拓殖大学・講師	クイズで楽しく知る台湾の言語と文化	22	4
	412	石飛 徳樹	朝日新聞社・編集委員	映画・テレビなどの映像文化 (仮)	25	6
	413	小林 岳彦	東京電機大学・教授	携帯電話・携帯インターネットのつながる仕組み	23	4
	501	Kevin Ryan	昭和女子大学・教授	21st Century Skills ネットリテラシー	6	3
	502	岸本 直樹	法政大学・教授	ビジネスの国際化：証券投資を例にとって	21	3
	503	安東 正樹	東京大学・准教授	重力波で探る宇宙	30	5
	504	宮下 大夢	早稲田大学・助手	大量虐殺から人々を救うにはどうすべきかー正義の武力行使は許されるのか？ー	29	3
	505	眞嶋 麻子	日本大学・助教	身近な問題から考える国際協力ー武力紛争と携帯電話の関係	17	3
	506	萩原 建次郎	駒澤大学・教授	子ども・若者の居場所の喪失と自己形成空間の再生	20	5
	507	尾尻 希和	東京女子大学・教授	発展途上国研究入門	3	3
508	野津 美由紀	難民支援協会・広報部	日本の「難民問題」を考える	8	4	
509	宮地 貴士	秋田大学・医学部学生（順天高校卒）	ザンビア共和国に命の灯を	23	5	
509	星 あゆむ	東邦大学・医学部学生（順天高校卒）	～診療所建設に向けた大学生たちの挑戦～	23	5	
510	脇田 敬	尚美ミュージックカレッジ・講師	アーティストマネジメントとは？	41	4	
511	岡村 郁子	首都大学東京・准教授	異文化理解とコミュニケーション	19	3	
512	Malcolm H Field	杏林大学・教授	Introducing Research Methods (In English)	3	4	
合計					1132	193

② 海外フィールドワークの充実に伴う教員派遣

- ・平成29年度より、2学年全生徒の海外研修先が、SGHの海外研修先（6方面）となった。とくに、昨年度まで1コースのみ国内の北海道方面であったが、SGHとしての課題研究を進める上で、台湾の台北方面にコースを変更して実施した。
- ・これらの各方面での海外研修先は生徒が主体的に選択するとともに、一部のコースでは英語力の到達度や課題研究意識などにより一定の選考をし、より主体的な参加形態にした。結果、生徒計241名が参加し、その実施に合わせて計23名の教員を派遣した。
- ・海外研修先でのフィールドワークは、各方面で内容や方法が異なっており一律的ではないが、交流高校先での英語によるプレゼンワークショップを主体としながら、様々な課題研究に関して、全教員が協力して指導するように促した。
- ・4方面で、現地の大学での英語によるワークショップに参加させた。たとえば、カナダではビクトリア大学での環境論の講義、ロイヤルローズ大学での異文化コミュニケーションの講義、及び現地学生への自己の研究課題の口頭発表などを実施した。
- ・SGHとしての海外フィールドワーク先として、初年度より先行実施してきたフィリピンでは、現地の教育的支援施設を自ら運営しているNPO（CFF）の支援により、フィールドワークや実践的な課題研究を実施しており、同機関との継続的協力関係を協議した。

<参考2>平成29年度 第2学年海外研修・教員派遣状況（SGH派遣フィールドのフィリピンを除く）

国名	オーストラリア	台湾	オーストラリア	タイ	ニュージーランド	カナダ
方面	シドニー	台北	ブリスベン	チェンマイ/バンコク	クライストチャーチ	ビクトリア
交流高校	セント・アイブス ハイスクール	東山高級中学/ 新北高級中学/	キャベンディッシュ・ロ ードハイスクール	チトラダハイスク ール/ピッタヤーコム校	ランギオラニュー ライフスクール他	セント・マイケルズユ ニバーシティスクール
訪問大学	-	淡江大学	グリフィス大学	パヤオ大学	-	ビクトリア大学 他
実施形態	オセアニア研修	アジア研修	科学探究	社会探究	短期留学	語学研修
実施日数	7日間	5日間	17日間	15日間	20日間	18日間
実施期間	8/18 - 8/24	7/25 - 8/11	7/22 - 8/7	7/25 - 8/8	8/3 - 8/22	7/25 - 8/11
参加生徒	93名	35名	23名	20名	35名	35名
派遣教員	7名	5名	3名	3名	4名	2名

③ SGH生徒の活動機会の充実に向けた支援

- ・SGH対象生徒の拡大に伴い、国内外の国際的諸事業や活動機会に、生徒の主体的参加をより幅広く促すことが必要となった。そこでとくに、国外（海外）事業への参加のためのガイダンスを、専門担当者等により内容区分をして2回実施した。また、外務省のカケハシプロジェクトによる米国派遣には2名の教員を引率派遣した。

<参考3>国内外でのSGH関連事業への生徒参加一覧（N01～3は国外、N04～は国内・校外）

NO	事業名	内容	参加者
1	文科省・トビタテ留学 JAPAN	プロフェッショナル部門等で派遣（夏季休業中）	高1,2生、2名
2	外務省・カケハシプロジェクト（米国派遣）	対日理解促進交流プログラム（2/21～8日間）	高1生、23名
3	東京都・私立高校海外留学推進助成事業	1年間のオーストラリア留学（1月～）	高1生、4名
4	ユニカセ学生プロジェクト	NPO創業者と考える国際協力(6/11)	高1,2,3生 GLAP-A
5	NFLJ第3回全国（英語）ディベート大会	2チーム中1チーム米国大会出場権獲得（8/6）	高2,3生、4名

6	日本政策金融公庫「高校生ビジネスプラングランプリ」	ワークショップ参加(10/28)	高1生 GLAP-A
7	東京都・国際教育研究協議会主催の生徒研究会	国際理解及び国際協力に関する研究会(10/28)	高2生 GLAP-A、1名
8	筑波大学付属坂戸高等学校主催の発表会	SDGs+SGH 合同発表会(11/9)	高2生 GLAP-A、2名
10	SGH 全国フォーラム 2017	文科省・筑波大学共催により横浜で開催(11/25)	高2生 GLAP-A、1名
11	関東・甲信越静地区 第2回 SGH 課題研究発表会	東京池袋の立教大学にて開催(12/23)	高2生 GLAP-A、4名
12	日本政策金融公庫第5回高校生ビジネスプラン発表会	申請 3247 プラン中「ベスト100」で受賞(1/19)	高3生 GLAP-A、2名
13	SGH 甲子園 2018 に2部門出場	兵庫県の関西学院大学にて開催(3/24)	高2生 GLAP-A、2名
14	つくばサイエンスエッジに出場	茨城県のつくば市にて開催(3/23, 24)	高2生 Sクラス

④ SGH 指導の人的体制や施設環境等の充実支援

- ・平成29年度より、SGH 対象生徒の中からフィリピンフィールドワークを希望する者を募集し、そのメンバーを GLAP-A として、課外部活「探究部・SGH プロジェクト」のコアメンバーとした。この部活組織は、課題研究や論文作成のモデル作りの役割を果たすため、多くの教員を指導者として配置した。
- ・生徒が協働的に課題研究を進める際に必要となる ICT 環境を整備するために、平成29年8月に、ラーニングcommonsなどを備えた新たな施設「理軒館」を完成させた。これにより、グローバルウィークなどにおいて、同時開催の多くの講座実施が可能になった。

⑤ SGH 専用HP・活動報告会開催等の支援 (SGH 研究開発の普及・成果)

- ・SGH 専用のページを学校ホームページ内に初年度から設置し、日英二言語で継続して発信している。その成果として、とくに海外の交流校等にも広く周知できるようになり、国内外の交流先による、本校やSGH 活動への理解が得られやすくなってきている。
- ・SGH 活動報告会を本年度も2月末に開催し、併せて実施した公開授業はSGH に関連する内容であると共に、次期学習指導要領がめざすアクティブラーニングを校内外で先導的に実践している教師が担当し、また生徒によるポスター発表・英語による口頭発表も実施した。
- ・SGH 活動報告会では、基調報告として関西学院大学の尾木義久氏による「J-eportfolio」についての講演があり、参加者の関心も高く、他の高校関係者53校102名、大学関係者10校11名、その他16団体31名、本校教職員を合わせて200名超の参加となった。
- ・本年度の報告会では、本校のSGH にかかる基準ルーブリックなどの資料を公開し配布した。高校や大学の関係者には、SGH 活動などの探究的学びとその評価方策の必要性についての理解が進む機会となったことと考えられる。

<参考4>平成29年度 SGH 活動報告会参加校等 (79校・団体、144名参加 2/16日実施)

種別	校名	人員	種別	校名	人員	種別	校名	人員	種別	校名・団体名	人員
大学	学習院大学	1	高校	鎌倉学園高等学校	5	高校	創価高校	2	高校	立教池袋中等高等学校	1
大学	青山学院大学	1	高校	金蘭会高等学校・中学校	1	高校	東京女子学園中等高等学校	5	高校	和洋国府台女子中等高等学校	2
大学	北里大学	1	高校	工学院大学付属中学高等学校	2	高校	東京都市大学付属中学校高等学校	2	高校	和洋九段女子中学校高等学校	2
大学	杏林大学	1	高校	国府台女子学院中等高等学校	1	高校	東洋英和女学院中等部高等部	1	団体	NPO法人国際難民支援会 (RIJ)	1
大学	埼玉大学	1	高校	駒場東邦中等高等学校	1	高校	豊島園女子学園高等学校	1	団体	アイ・シー・ネット(株)	3
大学	産業能率大学	1	高校	埼玉県立朝霞高等学校	1	高校	都立桜修館中等教育学校	1	団体	(一財)東京私立中学高等学校協会	4
大学	創価大学	1	高校	埼玉県立浦和高等学校	2	高校	長野県中野立志館高校	1	団体	(一財)日本私学教育研究会	5
大学	東京学芸大学	1	高校	埼玉県立川口北高等学校	1	高校	名古屋経済大学市朝高等学校	1	団体	(一財)国際教育振興会日本会話学院	1
大学	東京女子大学	2	高校	サレジオ学院中学校・高等学校	1	高校	新潟県立新発田高校	1	団体	エデュケーションネットワーク	1
大学	立命館アジア太平洋大学	1	高校	静岡聖光学院中学校・高等学校	1	高校	新潟県立長岡高校	1	団体	(株)アサヒトラベルインターナショナル	2
大学	青山学院高等部	2	高校	渋谷教育学園渋谷中等高等学校	1	高校	新潟県立新潟中央高等学校	1	団体	日出学園中学校・高等学校	2
高校	都立文芸グローバル高校	3	高校	健実高等学校	1	高校	日出国中学校・高等学校	2	団体	株式会社アルク	6
高校	岩倉高等学校	3	高校	聖徳学園中学・高等学校	6	高校	広尾学園	7	団体	株式会社栄光 栄光ゼミナール赤羽校	1
高校	上野学園中等高校	2	高校	城北埼玉中学・高等学校	6	高校	広島県立広島観音高等学校	3	団体	株式会社オーエムシー広報センター	1
高校	浦和実業学園高等学校	3	高校	昭和女子大学付属昭和中等高等学校	1	高校	広島女学院中等高等学校	2	団体	高校生新聞	1
高校	愛媛県立松山東高等学校	1	高校	女子聖学院高等学校	3	高校	広島大学付属中・高等学校	1	団体	スクール株式会社	1
高校	大阪女学院高等学校	1	高校	鎌台学園高等学校	2	高校	北海道札幌藻岩高等学校	2	団体	本間教育研究所	1
高校	大阪府立豊中高等学校	1	高校	聖学院中学校	5	高校	宮城県仙台南高等学校	1	団体	安田教育研究所	1
高校	大森学園高等学校	1	高校	成蹊中学校・高等学校	1	高校	明治大学付属中野中学・高等学校	1	団体	株式会社カンザキメソッド	1
高校	香川県立高松高等学校	1	高校	仙台北百合学園高等学校	1	高校	山梨県立吉田高等学校	1		計	144

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成29年4月1日～平成30年3月30日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①ネットワークによる 共同的な探究学習の 研究開発				←					→			
②スクールワークによる 統合的な探究学習 の研究開発	←											→
③フィールドワークによる 創造的な探究学習 の研究開発		←						→				

(2) 実績の説明

<研究開発単位の実績>

① ネットワークによる共同的な探究学習の開発

- ・ネットワークの活動として、海外研修先の生徒を対象とした、グローバル意識に関する国際調査をする構想を立てている。第1回調査は平成27年度の海外研修の際に生徒が持参した調査用紙に記入する形で行った。調査用紙の形式等が、研修先によって異なり、集計分析に手間取って、平成28年度末にようやく集計結果を報告することができた。
- ・平成29年度には、この結果を受けて次の調査に関して改善した。主な改善項目は次の2点である。1) 派遣先によって、調査方法が異なってしまうことを避けるため、オンラインによる調査とする。2) 自校で多数回の調査をすることが難しいことが判明したため、先行して実施されている調査と比較可能な調査を目指す。
- ・グローバル意識調査結果のフィードバックに関しては、カナダの連携校1校に対して、本校生徒がプレゼンをしている。そのことも功を奏してか、フィリピンのフィールドワークへ同校からの共同参加（9月末、生徒1名及び教員1名）や、同校から初めての来訪交流（3月、生徒8名及び教員3名）も本年度に実現した。

② スクールワークによる統合的な探究学習の開発

- ・各活動の概要は以下の通り（詳細は研究報告書のSGH活動カレンダーに記載の通り）だが、学年や活動ユニットのGLAPで内容は異なっている。なお校内活動については主として総合的学習の時間に実施しているが、グローバルウィークにおいては、54講座のワークショップを同時期に集中実施することができた。
- ・3年次の昨年度までの課題研究においては、一部の活動ユニットの生徒のみが対象であったため、高大連携による継続的且つ個別的な研究指導を実施することができていたが、対象生徒が2つの学年で全員となったことで、また大学等の多くの関係者の協力が得られやすい様に、一定期間に集中的に幅広いテーマでワークショップを開催することとした。
- ・4年次の平成29年度は、学年間の協働的学びとしての発表会（口頭発表やポスターセッション）を、1、2学年全体で行うことが可能になった。一方、それら全体の課題研究のモデルとして、フィリピンのフィールドワークをする生徒（GLAP-A）を対象に、探究部・SGHプロジェクトを部活動の一部として新設して、論文指導などを実施した。

＜参考5＞平成29年度 学年別のスクールワーク（総合的学習）実施概要

【1学年】SGH対象生徒：245名（学年全員）

種別	実施回数	テーマ	ワークショップ（実施期日）
A	5回	国際社会・国際協力に関する基礎知識	① 全体ガイダンス(4/15) ② フィリピン紹介(5/27、6/10) ③ 課題研究計画書説明(6/3) ④ 講演会「EUが学校にやってきた」(11/9)
		フィリピンに関する課題研究基礎講座 ・テーマ設定（課題発見）の学び	
B	5回	各海外研修別に関する研究講座Ⅰ ・研修先別に関する仮テーマで調査研究	① 海外研修ガイダンス(10/14*2コマ) ② 学習成果発表会視聴「高2生による前年度の海外研修・SGH課題研究報告」(11/9) ③ 海外研修コース別の仮研究(11/11、11/25)
C	3回+	グローバルウィーク ・高大連携大学を中心に、国際理解等の54種類のワークショップ講座を開講	① グローバルウィークガイダンス(9/16) ② グローバルウィーク(10/27、11/1、11/2、11/7、11/8)にて、2講座以上を必修選択
D	3回+	各海外研修別に関する研究講座Ⅱ ・研修先別の研究課題を設定して調査研究、研究は共同又は個人別で所定ワークショップ以外にも自由裁量で実施	① 海外研修コース別の本研究(2/3、2/17*2コマ)
E	—	*GLAP-A対象でフィリピンの課題研究	*新設した探究部・SGHプロジェクト、及びCFF Fジャパンによるワークショップ

【2学年】SGH対象生徒：245名（学年全員）

種別	実施回数	テーマ	ワークショップ（実施期日）
F	7回+	各海外研修別に関する研究講座Ⅲ ・前年の課題研究を基に、研修先での調査や発表等の実践的な研究を実施	① 事前研究(4/6、4/15、4/22、4/29、5/27、6/3、6/10)
G	—	*GLAP-A対象でフィリピンの実践研究	*新設した探究部・SGHプロジェクト、及びCFF Fジャパンによるワークショップ
H	2回+	・報告書及び論文制作の講座 *GLAP-A対象のコア研究は、論文（日本語及び英語）の個別指導を別途実施	① 事後研究(9/2、9/16) *コア研究は、新設した探究部・SGHプロジェクト、及びCFF Fジャパンによる指導
I	3回+	グローバルウィーク（1学年と同様）、他 ・高大連携大学を中心に、国際理解等の54種類のワークショップ講座を開講	① グローバルウィーク(10/27、11/1、11/2、11/7、11/8)にて、2講座以上を必修選択 ② 国際理解総括講演（岩田・学習院大教授）
J	4回+	・各研修先の代表による日英二言語による口頭発表・ポスター発表、1学年生徒との研究の協働化 *GLAP-Aコア研究の校外での発表（参考3資料の通り、計8回に渡り多方面で実施）	① 文化祭での展示、発表の実施(9/23、24) ② 2学年の生徒による、1学年への課題研究ガイダンス(10/14) ③ 学習成果発表会(11/9)、SGH活動報告会(2/16)での1学年への成果報告

【3 学年】SGH 対象生徒：8 2 名（英語系クラス＋理数系クラス＋希望者）

* GLAP-A（前年のフィリピン派遣者）の希望者を対象として、2 年次からの論文を継続して発展させる指導を、探究部・SGH プロジェクトが担当したが、その希望者は数名にとどまった。

③ フィールドワークによる創造的な探究学習の開発

- ・生徒全員が参加する6 方面の海外研修において、課題研究に合わせたフィールドワークも実施するが、それに先行してフィリピンでのフィールドワークを、初年次以降、毎年実施している。平成2 9 年度は、探究部・SGH プロジェクトのGLAP-A コアメンバーから、フィリピンでのフィールドワークを希望する者を選抜して実施した。
- ・海外フィールドワークでの懸案となっていた、海外連携校との共同実施は、ネットワークの開発事項でもあるが、カナダのセントマイケルズユニバーシティスクール（SUMS）からの参加（生徒1 名、教師1 名）により、平成2 9 年度に初めて実現した。さらに現地のラサレットスクールも加えて、3 ヶ国3 校の協働的学びの機会にすることができた。

<参考6>平成2 9 年度 フィリピン・フィールドワーク実施概要

- 実施時期：平成2 9 年 9 月2 5 日（月）～ 1 0 月2 日（月）の7 泊8 日
- 参加人員：生徒1 0 名（2 学年7 名、1 学年3 名）＋1 名（カナダの連携校からの参加）
- 引率教員：4 名（2 名は管理機関負担）＋1 名（カナダの連携校からの参加）
- * 他に管理機関負担でフィールドワーク全般を支援するNPO の現地スタッフ等も同行参加

7 目標の進捗状況、成果、評価

（1）研究開発単位における状況等

① ネットワークによる共同的な探究学習

- ・中間評価において、グローバル意識調査に関して「今後、連携校に対して調査結果をフィードバックすることが望まれる。」との指摘を受けた。現在のところ、カナダの連携校1 校にフィードバックできており、同校との連携協力が向上している。今後さらに、他の連携校に対してもオンライン上での「SGH Global Awareness Survey」の活用改善を図りたい。

② スクールワークによる統合的な探究学習

- ・SGH 対象生徒の拡大にともない、グローバルウィークの効果測定ツールとしてのルーブリックを改善すると共に、課題研究報告書の作成支援のルーブリックを開発した。また発展的な課題研究や日英論文制作にも対応できる探究部・SGH プロジェクトも新設した。それらの全般的な成果は、SGH 目標達成シートにおける英語4 技能の向上（高校卒業時におけるSGH 対象生徒のCEFR・B1～B2 レベルの割合は9 4 %）などにも見ることができる。

③ フィールドワークによる創造的な探究学習

- ・SGH 課題研究の対象生徒、及び課題研究をする海外研修先が拡大するにあたって、フィリピンフィールドにおけるGLAP-A によるコア研究が、良い先行的モデルになっている。とくにコア研究の成果は、校外の様々な発表会などへの主体的参加や実績にも表れている。

(2) 研究開発全体の目標に見る状況

- ・ 4年次の平成29年度は、1、2学年生徒全員がSGH対象となったことで、学年を越えた生徒間の協働的学習の展開が可能になった。一方で、高度な課題研究や日英二言語での論文制作には、教員による日常的な指導が必要となり、新たに探究部を設置して対応した。
- ・ SGH研究開発全体を通じて、グローバル社会で活躍する資質能力を育成することが、SGHや本校の教育目標における中心課題である。そこで、SGH活動による資質能力育成の評価測定ツールとして、初年度より様々なアンケート形式の調査ツールを開発してきた。
- ・ 開発してきた主な評価測定ツールは、グローバル意識調査（全校生徒対象）、生徒変容調査（高3SGH生徒対象）、基準ルーブリック（現高1生対象に試行実施）、及びグローバルウィークや課題研究報告書に対応する個別のルーブリック評価などである。

<添付資料>目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

- SGH研究開発の最終年度は、主に成果普及の観点から以下の5点について取り組む。
 - 1) 海外の連携校とのネットワークを構築していくことは今後も必要であるが、国内の他の高等学校との連携ネットワークを構築することも、SGHの成果普及の観点から有益であると考え、本校としてはグローバルウィークへの他校の連携参加を働きかける。
 - 2) SGH成果の一つとして、生徒の海外大学進学が進展するようにガイダンスを強化する。また、在学中からの国際的な企業と連携した課題研究プロジェクトを通して、大学進学後の国際的な活動につなげていくように、SGH対象となる全校生徒に働きかける。
 - 3) 初年度より設置している本校のSGH専用ホームページにおいて、英語版を含め、SGHによる研究開発の成果を再構成して発信する。また、諸教育研究機関が開催する研修会（東京私学教育研究所主催の国際理解教育研修会や21世紀型教育機構セミナーなど）での発表や、生徒による校外での発表機会をさらに充実させる。
 - 4) 生徒のSGH課題研究における評価や、グローバルリーダーとしての資質・能力に関するルーブリック評価について、Web上でのポートフォリオに集約し、高大接続にかかる調査書の改編や、次期学習指導要領に対応する試行成果を公表する。
 - 5) SGHの課題研究に関連して、教科（授業）やグループコミュニケーション（LHR）、及び学校行事との一層の連携を図る。またICT活用の充実を図り、生徒の主体性や協働性、創造性などの育成を推進する。

【担当者】

担当課	国際部	TEL	03(3908)2966(代)
氏名	中原晴彦	FAX	03(3908)2979
職名	国際部長	e-mail	juntennakahara@yahoo.co.jp

ふりがな	がっこうほうじん	じゅんてんがくえん	じゅんてんこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	学校法人順天学園 順天高等学校				

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）									
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)	
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:		28人	64人	128人	131人		100人	
	SGH対象生徒以外:		45人	51人	140人	74人	13人	0人	
目標設定の考え方: 現在、全員が年1回以上の社会貢献活動をしており、とくに多数回の自主活動をする者とした。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:		2人	9人	18人	39人		12人	
	SGH対象生徒以外:		5人	8人	6人	6人	1人	0人	
目標設定の考え方: 現在すでに、生徒の75%以上が自主選択で海外研修に参加するので、留学する者のみとした。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:		64%	61%	52%	54%		20%	
	SGH対象生徒以外:		10%	10%	37%	26%	51%	0%	
目標設定の考え方: 現在は英語系クラスの生徒に多いが、30年度で全員がSGH対象生徒となる効果を見込む。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:		0人	2人	3人	7人		10人	
	SGH対象生徒以外:		5人	5人	3人	5人	0人	0人	
目標設定の考え方: SGHでの活動波及効果と共に、入賞者の増加見込み。30年度で全員がSGHの対象になる。グループ(複数人)で受賞の場合でも1人とカウントする。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:		-	-	89%	94%		70%	
	SGH対象生徒以外:		39%	36%	34%	42%	37%	51%	0%
目標設定の考え方: 現在、卒業生の約35%が英検2級以上を取得。初期のSGH生は入学時に2級取得者が多い。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

1' 指定4年目以降に検証する成果目標									
		24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(33年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合									
a	SGH対象生徒:			57%					30%
	SGH対象生徒以外:	5%	45%	28%					0%
目標設定の考え方: 30年度以降、全員がSGH対象者であり、国際系学部や学科への進学する割合とした。									
海外大学へ進学する生徒の人数									
b	SGH対象生徒:			0人					12人
	SGH対象生徒以外:	2人	2人	1人					0人
目標設定の考え方: 30年度以降、全員がSGH対象者であるが、SGH以外の生徒で台湾に進学する者も含む。									
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合									
c	SGH対象生徒:			53%					30%
	SGH対象生徒以外:	-	-	対象外					0%
目標設定の考え方: 30年度以降、全員がSGH対象者であり、課題研究の影響は定常的になる見込み。									
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数									
d	SGH対象生徒:			調査中					40人
	SGH対象生徒以外:	-	-	調査中					0人
目標設定の考え方: 30年度以降、全員がSGH対象者。殆どの者が海外研修はすると思われるので、留学者の見込み。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	28人	30人	23人	30人	30人	31人		50人
目標設定の考え方: 課題研究に関わる五か国以上のフィールド視察や国際研修会議などの参加者数。(教員)								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	30人	30人	37人	49人	45人	69人		100人
目標設定の考え方: 双方向授業の研修会やICTの活用に関する研修、国際研修などの参加人員を見込む。(教員)								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	5校	5校	8校	8校	8校	14校		10校
目標設定の考え方: 海外の連携大学を3校程度に、海外の連携高校を7校程度に増加させる。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	8人	16人	29人	35人	70人	91人		45人
目標設定の考え方: 現在は校内ワークショップに参画している延べ回数。26年度以降はワークショップの開催が急増する。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	6人	10人	18人	42人	42人	56人		35人
目標設定の考え方: 現在は国際関係NPOが多いが、海外の公的機関や国際的企業の支援も増加させる見込み。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	10人	13人	12人	9人	8人	8人		20人
目標設定の考え方: 現在は10名程度であるが、より多くの機会をとらえて、人員を倍増させる見込み。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	59人	61人	74人	74人	68人	75人		85人
目標設定の考え方: 帰国生徒は現在の50名程度から75名以上、留学生の受入・派遣は現在の5名から10名程度にする。								
先進校としての研究発表回数								
h	1回	3回	5回	8回	13回	26回		10回
目標設定の考え方: 校内外での発表の機会企画型を含めて、10回程度の発表をめざすことになる。								
外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	×	×	○	○	○	○		○
目標設定の考え方: 平成26年度前半に、英語によるHPを開設する。								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方:								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	841	825	788	794	783	768	
SGH対象生徒数			40	126	351	572	
SGH対象外生徒数			748	668	432	196	

5. SGHの対象生徒と年次進行

SGH 対象生徒と年次進行

対象生徒はGLAP (Global Leaders' Action Project) と称する。

- H26年度1年～ GLAP-1 英語選抜類型+希望者
- H29年度3年 GLAP-2 特進選抜類型サイエンスクラス
- H28年度1年～ GLAP-E ニュージーランド研修選択者
- GLAP-S オーストラリア・ブリスベン研修選択者
- GLAP-I① タイ研修選択者
- GLAP-I② カナダ研修選択者
- GLAP-I③ オーストラリア・シドニー研修選択者
- GLAP-I④ 台湾研修選択者
- GLAP-A コアメンバー・フィリピンフィールドワーク候補 希望者

<GLAPの年次推移 (SGH対象生徒は年次進行で拡充: 2016年度改編)>

			1年次	2年次	3年次	4年次	5年次
			H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度
1学年	GLAP-1	E+					
	GLAP-2	S					
	GLAP-E, S, I	必修					
	GLAP-A	希望者					
2学年	GLAP-1	E+					
	GLAP-2	S					
	GLAP-E, S, I	必修					
	GLAP-A	希望者					
3学年	GLAP-1	E+					
	GLAP-2	S					
	GLAP-E, S, I	必修					
	GLAP-A	希望者					
SGH生徒の割合			7%	16%	49%	77%	100%

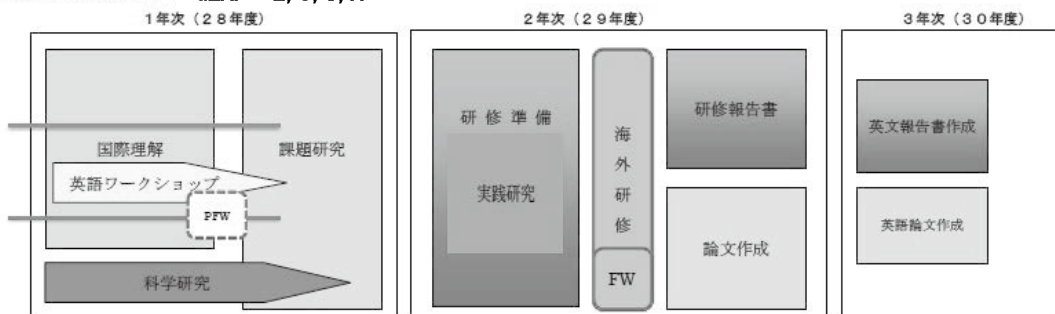
黄色: H27年度までの入学者のSGH対象者 青色: H28年度以降の入学者のSGH対象者(全員)

E+: 英語選抜類型の生徒+希望者

S: 特進選抜類型Sクラスの生徒

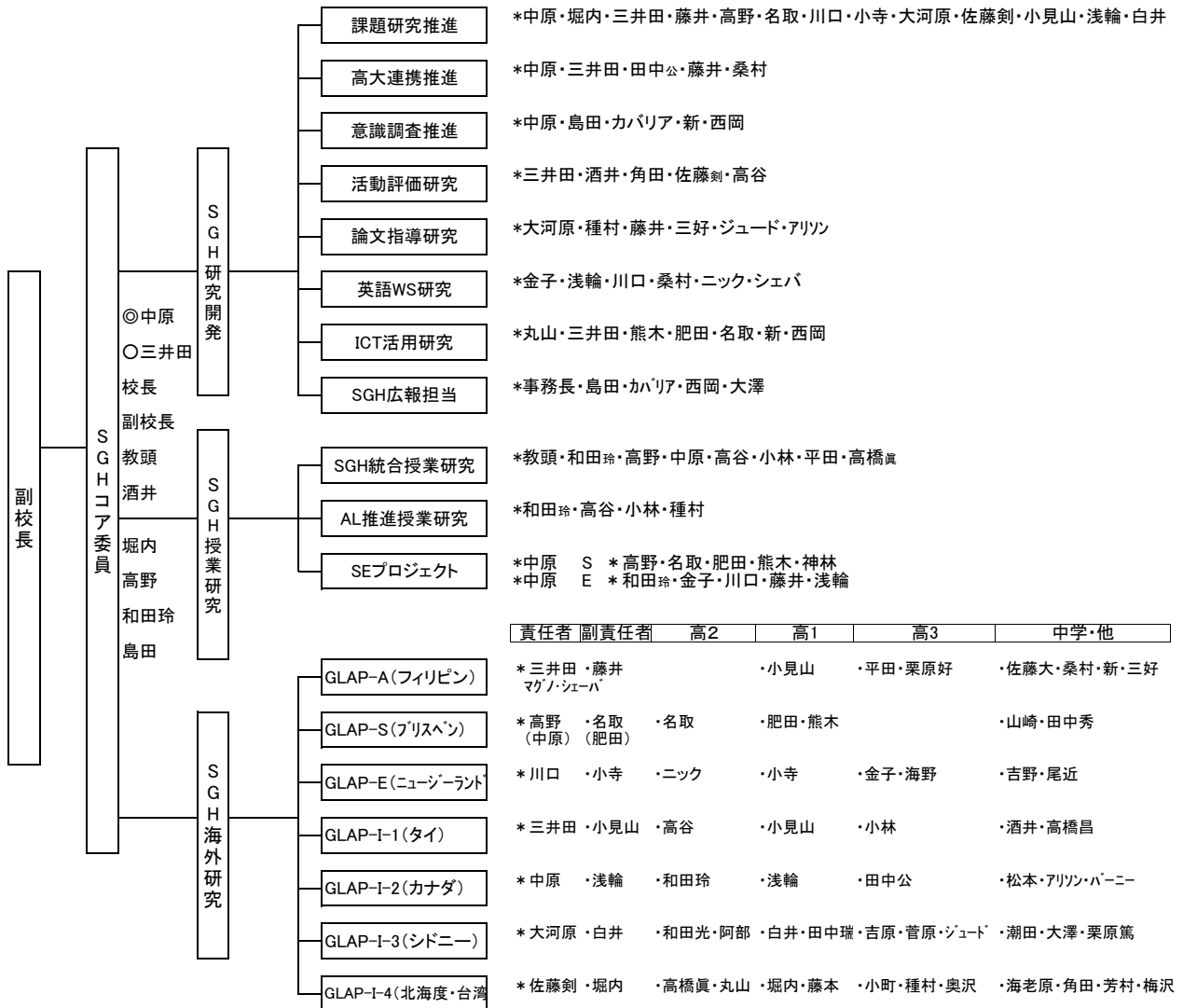
課題研究のスケジュール(28年度以降の入学生)

平成28年度入学生 **GLAP E, S, I, A**



6. SGHプロジェクト校務分掌（平成29年度）

平成29年度 SGHプロジェクト（校務分掌）



7. SGH カレンダー（2017年度）

2017/04/07 モリಂಗクッキー商品化のプレゼンテーション

フィリピンフィールドワークでモリंगाを研究しているグループが、本格的な商品化を目指し、伊藤忠商事の食品担当の福本さんにプレゼンを行いました。

2017/04/15 新入生、初めてのSGH

3月29日（水）SGH フィリピンフィールドワークで、「コウノトリ学級（性教育）」を研究テーマにしている4名の生徒が、杏林大学 井の頭キャンパスを訪れ、保健学部の佐々木裕子先生にアドバイスをいただきました。

2017/05/23 2017年度第1回SGH運営指導委員会

5月23日（火）に本校のSGH活動についてご指導を頂く『SGH運営指導委員会』を行いました。28年度のSGH活動の報告と29年度の活動計画について委員の先生方から多くの活動のヒントや助言を頂きました。和やかな会の中、生徒一人一人がどのような資質・能力を育ていかねばならぬか熱のこもった議論になりました。

2017/05/27 高1生SGH シェバ先生によるワークショップ 「フィリピン文化を垣間見る」

クラス単位でフィリピン出身のシェバ先生による「フィリピン文化を垣間見る」ワークショップををきっかけに、生徒達は個別研究テーマを決めていきます。

2017/05/27 高1生SGH APU 近藤教授によるワークショップ 「価値観と多様性」

2名のAPU卒業生と共に、異なる文化や価値観を有する人たちとの共存、共生、自分とは違う意見や考え方を否定せず、認めて受け入れるとはどういうことなのかを体験するいい機会になったと思います。

2017/06/03 高1SGH クラス別課題研究発表会実施

SGH プログラムのフィールドであるフィリピンに地域を限定し、各自の疑問や問題意識を基に研究計画書を作成してきたものをクラス内で発表し、互いに興味や成果を共有し、活発な質疑応答が行われました。

2017/06/10 高1SGH APU 近藤教授の英語によるワークショップ

高校1年3組（英語選抜）は、先週、今週と他のクラスが受講したAPUの講義の英語バージョンを受講し、「英語で考える」練習になりました。

2017/06/10 高2SGH コース別海外研修準備

海外研修の出発を控え、海外旅行をする際の注意点や病気の予防、活動内容などの確認をしました。

- 2017/06/11** SGH モリングチームがユニカセ・パネルディスカッションに参加
高校1年生と高校2年生のGLAP-Aメンバーの一部と、高校3年生のモリング研究チームが、「～ユニカセ学生プロジェクト～NPO 創立者と考える！みんなで広げる国際協力のはじめの一歩」というイベントに参加しました。
- 2017/05/13・06/10** 学内生徒保護者向け海外留学説明会実施
「英知を持って世界で活躍できる人間を育てる」という教育目標に基づき、順天中高では、かねてから長期留学を始めとした海外での学びを応援してきました。数年前から留学のいろいろな形を在校生・保護者の希望者に説明する「海外留学説明会」を開催しています。
年度は既に2回実施しており、第1回目は5月13日（土）に「高校在学中の留学」について、第2回目は6月10日（土）に高校卒業後の進学「海外大学等グローバルなキャリアを目指す進学について」を国内外から講師をお招きし、国際部と進路部の共催で行いました。
- 2017/07/20** フィリピンフィールドワーク事前研修
今年のフィリピンフィールドワークの参加者10名が、CFFの理事の石井さんを招いて事前研修を行いました。
- 2017/07/22～08/06** 高校2年生 オーストラリア(ブリスベン)研修
16日間、ブリスベン研修旅行にて、現地の高校での授業、ホームステイ、大学での実験などを経験しました。キャベンディッシュロードステート高校で現地の生徒と共に授業を受け、グリフィス大学では、3日間かけてアスピリンの合成実験と犯罪科学に関する実験を行い、英語の授業は大変でも、楽しみながら学べ、高校にはない実験装置などを使用するなど、贅沢な経験が出来ました。毎日英語と授業漬けの中、ドリームワールドなど観光もあり、ホストファミリーとも素晴らしい時間を過ごしたりと、日本とは全く違う貴重な体験を日々積みました。
- 2017/07/24～08/05** 高校2年生 タイ研修
高校2年生20名の生徒が、16日間のタイ研修旅行へ行ってきました。
施設訪問で様々なバックグラウンドの子供に出会い、山岳民族について学び、パヤオの学校交流での相互の異文化体験、首都バンコクでのホームステイ、世界遺産で歴史に触れるなど、様々な体験をしてきました。
- 2017/07/25～07/29** 高校2年生 台湾研修
本年度から台湾の研修旅行が加わり、高等部2学年は全生徒が海外の研修旅行に行くことになりました。台湾コースを選択した生徒たちは、昨年度の秋から研修の準備を始め、台湾在住の文筆家である、片倉 佳史先生をお招きして台湾事情を詳しく講義していただき、各自が研修旅行を通して探究するテーマを考えました。
故宮博物院、中正記念堂・228記念館・龍山寺見学、東山高級中学校との交流会、村上春樹の研究で有名な曾秋桂教授の講義を拝聴するなど、観光以外でも貴重な体験をし、英語を学んでいて良かった、言葉が通じなくても親切な現地の人々に助けられたなど、有意義な経験が出来たようです。

2017/07/25~08/11 高校2年生カナダ研修

7月25日から8月11日までの計16日間、カナダのブリティッシュコロンビア州、ビクトリアに滞在し、セント・マイケルズ・ハイスクールが主催するサマープログラムに参加しました。英語による国際対話能力の向上と、異文化への関心の向上を目指し、相互理解と相互扶助の精神を養い、国際社会で活躍できる真の学力を身につける目的の研修において、生徒は全員、一人一家庭にホームステイで英語力と国際対話力を磨きます。「言葉の壁」を恐れず積極的に他者を知り、自分の想いを伝えようとする大切さを知り、カナダという異文化への関心、出会った人々との友情、そして気づき合い、支え合い、高め合う共生の心を得られた、と事後、多くの生徒からの感想が聞かれました。

2017/08/03~08/22 高校2年生ニュージーランド研修

35名の生徒がニュージーランド研究旅行に参加しました。ホームステイをしながら現地の高校に通い、数学や英語の他にも演劇などの順天高校にはない授業を体験することが出来ました。英語のみで学ぶ日々の中、難しさを感じる一方、伝わる喜びを実感することも多く、ニュージーランドの高大な自然やマオリ文化に触れる機会もあり、現地の人たちとの交流も、充実した時間を過ごしました。

2017/08/06 NFLJ 全国ディベート大会ベスト16. NSDA アメリカ大会への出場権獲得

山梨学院大学で「National Forensic League of Japan[NFLJ]第3回全国ディベート大会」が行われ、順天高校からは2チーム4名の生徒が出場しました。そのうち1チーム(Bチーム)が12位となり、2018年6月にアメリカで行われる米国NSDA大会への出場権を獲得しました。

2017/09/02 高2 海外研修文化祭発表準備

海外研修を終えた高校2年生は、海外研修の報告書作りや文化祭での発表準備をしました。修了証書授与があったり、思い出と共に計画書を振り返り、チームワークでの活動が再開されました。

2017/09/02 SGH フィリピン派遣者認証書授与式

SGHフィリピン・フィールドワークは8日間、ルソン島、パンガシナン州を中心に実施されます。高等部1年生3名、高等部2年生7名、合計10名の派遣予定生徒とその保護者が集まり、学校長から派遣員認証書が授与されました。

2017/09/02 SGH フィリピン派遣参加者を対象とした危機管理セミナー

CFFの高梨さんが来校し、フィリピンに派遣される10名の高校1,2年生の生徒に対して、危機管理セミナーが開かれ、普段の日本の生活ではあまり想定することのない様々な注意点を学びました。

2017/09/02 元JICA 青年海外協力隊フィリピン派遣者真壁氏の講演会

東武トップツアーズの真壁さんが、ご自身の経験をもとに「JICA 青年海外協力隊」について話され、国際協力の魅力や難しさについても知ることができ、協力隊についての深い理解が得られた貴重な講演でした。

2017/09/07 SGH フィリピンフィールドワークに向けたフィリピン語講座

SGH フィリピンフィールドワーク派遣を前に、フィリピン出身・英語科のシェバ先生によるフィリピン語講座がスタートしました。お昼休みや放課後等を利用し、フィリピン派遣生徒を中心に全体で 10 回程度実施していきます。

2017/09/25~10/02 2017 SGH 第 3 回フィリピンフィールドワーク

高校 2 年生 7 名・高校 1 年生 3 名 計 10 名の生徒がフィリピンフィールドワークに参加し、今年はカナダの St. Michaels University School の生徒と一緒に活動出来ました。

世界遺産見学や、第 2 次世界大戦中の史跡見学、ゴミ集積場やスラムを訪問し、就労について様々な労働者にインタビューするなど、課題研究も深められました。

学校訪問やホームステイ、現地の人々の協力を得てのアクティビティもあり、2 年生は、フィールドワークを通して新たな課題を発見し、多くの宿題を持ち帰ることとなり、1 年生は、カナダからの参加者と信頼関係を築くことができました。

2017/10/14 SGH 高 1 生向け海外研修ガイダンスと高 2 による報告会

旅行が主では無く、各々が探究目的を持って望む研修が主となった海外研修。去年から SGH 活動で様々な課題を研究し準備を重ね、海外で体験やチャレンジをしてきた高校 2 年生が、来年に体験を控えた高校 1 年生に対し、行き先を決める参考や活動のイメージを膨らませるための報告会が行われました。

2017/10/28 平成 29 年 「国際理解及び国際協力に関する生徒研究会」

高校 2 年の荒谷萌さんが、多摩大学付属聖ヶ丘高校にて、中学生や高校生による国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告、または研究発表の場を設けることを目的として開催される、東京都国際教育研究協議会主催の「国際理解及び国際協力に関する生徒研究会」に参加しました。

2017/10/28 高 1 SGH 日本政策金融公庫・ビジネスプランワークショップ

高 1 SGH GLAP-A の生徒を対象としたワークショップが開かれ、これまで各自が進めてきた研究テーマについて調査で分かってきたことや、他メンバーの現状・研究の進捗状況などの共有しました。

2017/11/06 神田外語大学「第 1 回 高校生東南アジア小論文コンテスト」 入選

神田外語大学創立 30 周年を記念した「第 1 回高校生東南アジア小論文コンテスト」の入賞者の発表が行われ、1,065 作品の応募の中から、2 年生の前川結香さんと北坂理楽さんがタイ部門で入選しました。

2017/11/09 「Global Week 2017」

順天高等学校の SGH 活動の一部として、10 月 27 日（金）～11 月 8 日（火）までのうちの 5 日間（27 日、1 日、2 日、7 日、8 日）を開催しました。この期間、国内外の大学の研究者や大学院生、大学生、企業や団体の職員、順天高校の卒業生や在校生が、順天高校生徒や（一部中 3 生）教職員と共有したい話題を持ち寄り、これらの話題提供者と生徒教職員が、ともに正解のないグローバルな問題について学びあう機会を持ちました。全部で 54 トピックから、参加する

トピックは生徒が主体的に選び、学校側では人数調整を行わなかったため、一部のトピックは少人数になりましたが、その分、本来の目的である「話題提供者との個人的つながりを作る」贅沢な時間となりました。

2017/11/09 ” EU が順天高校にやって来た！” ハンガリー大使館職員講演会

駐日ハンガリー大使館から、大使館で文化・教育に関するお仕事をされていて、ハンガリー一の文化を伝えるイベントを数多く運営されている、ナジ・アニタ氏をお招きし、高校1年生を対象に、EUや日本との関係について講演会を行いました。

2017/11/09 高2 学習成果発表会で海外研修報告

高校2年生は各コースごとに海外研修の報告を行いました。各コースともに特色のある発表で、自分たちが撮影した写真もたくさん使い、現地での活動を報告してくれました。

ブリスベンコースは、ただ反応を見たり結果を求めたりするだけの実験ではない、犯罪科学実験が最も印象に残ったということで、犯罪の捜査を想定し、シナリオをもとに実験を行って犯人を見つける、ストーリー仕立ての大学での実験を紹介してくれました。

タイコースは、代表者2名がそれぞれの研究テーマを踏まえて、海外研修を通して学んだことを発表しました。2組の潟中さんは、「支援」によるミスマッチをなくすにはどうすればいいのかということについて、1組の荒谷さんは、デング熱対策について、それぞれ事前に準備した問いに対して非常に詳しく調査し、現地調査の結果、今後さらに研究しなければならないこともあるようで、今後論文を作成に取り組みます。

台湾コースは、海外研修全体の流れを紹介してから、代表者が課題研究についての発表をしました。台湾研修旅行では、「民族」「文化」「歴史」について、現地の高校生や大学生との文化交流を通して深い学びが得られたようです。また、課題研究では「台湾の朝食」について調査し、台湾では朝食を外食で済ませるのが一般的だという事実を知り、文化の違いが浮き彫りになったようでした。

シドニーコースは、非常にエンターテインメント性の高い発表をしてくれました。冒頭でコントを交えた演出をしたり、現地で見知ったことをクイズ形式で問いかけたり、上手に盛り上げて、言葉の壁を超えられる表現力が伝わりました。現地では、学校交流の際によさこいやけん玉、あやとりといった日本の文化を伝えることもできたそうです。

カナダコースは、カナダのビクトリアでの生活を報告してくれました。都会で暮らす生徒たちにとって、壮大な自然の中での暮らしは新鮮だったようで、毎日現地校に通い、語学研修を有意義なものにするためにはどうすればいいのか、自分たちで調査や考察をしてまとめてくれました。家族以外の人と、それも英語を使って生活するのは大変なことも多々あったようで、語学力だけではなく、積極的にコミュニケーションを取ろうとする力が不可欠であるという結論を出し、これから海外研修に参加する後輩たちにとって貴重な内容だったことでしょう。

ニュージーランドコースも、毎日現地校で授業を受け、体育や家庭科など実技の授業も体験し、ニュージーランド独自の文化であるマオリの文化を学んだり、ファーム体験で羊の世話をしたり、たくさんのアクティビティを経験しました。また、現地の方々に日本の料理をふるまったグループもあり、異文化を学ぶだけでなく伝えることもできたようです。「日本とニュージーランドの食事マナー」という研究テーマで調査したグループは、「食事マナー」における違いや文化を超えて共通する不快なふるまいや、日本は自分のマナーを気にする傾向があり、逆にニュージーランドでは他人のマナーを気にする傾向があるなどの違いについても伝えてくれました。

高校2年生ともなると、プレゼンテーションの技術も上達し、スライド作りも皆工夫を凝らして上手でした。学んできたことをただ伝えるだけではなく、次年度以降の海外研修に後輩たちにとって参考になる発表でした。

2017/11/09 SGH 上半期の活動及びフィリピン・フィールドワークの報告 (学習成果発表会)

高校1、2年生が取り組んできた活動及びフィリピンフィールドワークについて、高校1年3組の岡田さんが、高1のSGH活動と、自身が行った「ハンガーフリーワークショップ」の報告をしました。高校1年生は学年全体がSGH活動の対象なので、各クラスで様々なワークショップや講演会参加などの活動を通して、個々人が独自の問題意識を育み、社会のため、世界のために出来ることを考えています。

高校1年生によるフィリピンフィールドワークの報告では、貧困や衛生環境、スラムなどの問題と同時に、価値観や文化の違いを痛感し、自分たちの提案が必ずしもニーズに合っていないというジレンマなどから、世界の問題の難しさを身をもって知ったとのことでした。

高校2年生からは、本校のSGH活動、初年度から継続している「手洗いの普及活動」について、従来からの歌を、今年度はショートドラマと組み合わせ、その1部も動画で紹介してくれました。

今後は、改善しながらの継続だけにとどまらず、「ワークショップなどを通じた活動の指導方法」についても後輩に受け継いでいって欲しいと伝えました。

高校1年3組の取口さんによる「トビタテ！留学JAPAN」の報告では、「国ごとの価値観や文化の違いを学ぶ」という目的に対し、価値観や文化の違いは、人種や国籍だけではなく「個人」によると知り、「個人」を尊重し、数多くのカルチャーショック経験によって違いに寛容になることができるのだと結論づけしていました。

2017/11/09 筑波大付属坂戸高校主催 SDGs と SGH の合同発表会ポスター参加

筑波大学坂戸高校主催のSDGsとSGHの合同発表会に順天高校代表として2年生の生徒2名が参加し、ポスター発表をしました。この催しは国内24校、海外4校の高校が集まって、SDGsとSGHに関する様々なプレゼンテーションやディスカッションを行うもので、筑波大付属坂戸高等学校の先生と生徒が共同して運営をしています。全体会では、外国人の生徒が日本語で、日本人の生徒が英語で司会をします。ポスターセッションや英語発表を通し、フィリピン大学より、今後の協力のお話をいただきました。今年初めて実施された生徒分科会では、5つのテーマに分かれて、筑波大付属坂戸高校の生徒がファシリテータになってワークショップを行い、SGH後の取り組みの提案を作るというテーマにおいて「文科省様、今後のSGHの進め方は私たちに決めさせて」というメッセージをまとめとして発表しました。

2017/11/11 SGH 高1 海外研修に向けた事前研修

2017/11/15 高1 SGH コアメンバーがハンガーフリーワールドのワークショップのファシリテータを務める

HFWは、飢餓のない世界をつくるために活動する国際協力NGOで、飢餓や世界の食料問題について発信できる青少年を増やすために、学生を対象にした研修を実施しています。コアメンバ

一の岡田さんはファシリテーション研修に参加し、同じくコアメンバーの青木さんと学内でワークショップを実施しました。

- 2017/11/21** **カナダ SMUS から Dawn Wilson 先生が久しぶりに来校**
カナダ・ヴィクトリア市の SMUS (セントマイケルズ・ユニバーシティ高校) とは 2017 年 9 月から 10 月のフィリピンフィールドワークで共同研修を行いました。異なる文化背景を持つ多国籍の高校生グループが、第 3 国で共同活動した成果を検証しました。
- 2017/11/22** **トビタテ留学 JAPAN の OG による校内説明会**
文部科学省が企画するトビタテ留学 JAPAN、第 4 期生の募集が始まり、今年は 10 名の合格を目指します。応募しようとする生徒に向けた説明会を国際部で開催しようとしたところ、昨年までにトビタテ留学 JAPAN で留学した 3 人から申し出があり、宮崎蒼生さん、柴田藍さん、取口七晴さんは良く連携し、実感を伝えてくれました。
- 2017/11/25** **SGH 高 2 学習院大学・岩田先生による総括講演**
- 2017/11/18** **高 1 SGH コアメンバー、第二回 国際協力・ソーシャルビジネスアジアカンファレンス 2017 に参加**
- 2017/11/25** **2017 年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 全国高校生フォーラム(横浜パシフィコ)に出場**
文部科学省と SGH 幹事校が初めて全国大会を主催。全国の SGH 校が横浜に集まりました。高 2 コアメンバーの佐藤優芽さんがポスター発表しました。
- 2017/11/29** **フィールドワーク参加者フィリピン大使館訪問**
フィリピンフィールドワークを終えた生徒達は、二等秘書官兼領事のクリスティン・マーグレット・マラン氏に、フィリピン訪問時の印象や、各自の研究テーマの調査結果などについて報告しました。
- 2017/12/08** **2017 年度第 2 回 SGH 運営指導委員会**
- 2017/12/14** **高 1 SGH コアメンバー CFF ワークショップ**
CFF の石井さんと田代さんにお越しいただき、SGH コアメンバーの課題研究に関するワークショップを行い、現状報告と今後の活動に関する話を聞きました。
- 2017/12/16** **郁文館グローバル高校エコロジーゼミで生徒講演(高 2)**
- 2017/12/16** **教職員研修会「大学入試プレテスト・ICT 教育の動向等について」**
『2017 年度第 2 回 SGH 運営指導委員会』で話し合われた内容についての共有、『大学入試プレテスト』の内容及び今後の対策について、『新学習指導要領における ICT 教育の動向』について、21 世紀型教育機構(第 3 者機関)による本校の教育に対する『アクレディテーション(外部機関による教育機関の品質認証)調査』の結果報告、本校が長年調査を続けている『平成 29 年度エゴグラム調査』の結果報告等。

- 2017/12/21 外務省カケハシプロジェクト派遣生徒の初ミーティング
- 2017/12/23 第2回関東・甲信越静地区スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会
(英語プレゼンテーション銀賞受賞・日本語ポスター参加)
第2回関東・甲信越静地区スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会が、立教大学池袋キャンパスにおいて開催され、プレゼンテーション部門(英語)に佐藤優芽さん、ポスター部門に鈴木万理華さん、荒谷萌さん、湯永絵美さん(いずれも高校2年生)の4名が参加し、佐藤さんのプレゼンテーション「Future of children in Philippines from the view of their education」が銀賞を受賞しました。
- 2018/01/16 郁文館グローバル高校の先生方が来校
来年度からグローバルウィーク共催することについて協議を行い、共催に向けて調整を進めることで合意しました。
- 2018/01/17 カケハシプロジェクト 事前準備(第2回)
- 2018/01/19 SGH コアメンバー「高校生ビジネスプラン・ベスト100」選出
高校3年生のSGH コアメンバーのチーム「モリಂಗールズ」がベスト100に選出され、チームのうち2名が、日本政策金融公庫主催の「第五回高校生ビジネスプラン発表会 in TOKYO」でプレゼンテーションを行ってきました。
- 2018/01/20 カケハシプロジェクト 事前準備(第3回)
- 2018/01/25 カケハシプロジェクト 事前準備(第4回)・保護者説明会
- 2018/02/06 カケハシプロジェクト 事前準備(第6回)
- 2018/02/21~02/28 カケハシ・プロジェクト米国派遣
外務省の交流企画、対日理解促進交流プログラム「カケハシ・プロジェクト」の日本代表に順天高校が選ばれ、高1生23名が親善大使としてニューヨーク市に派遣されます。現地で日本文化の紹介をし、日本ファンを増やす活動をするとともに、帰国後には成果普及に取り組みます。
- 2018/03/24 関西学院大学全国SGH発表会・SGH甲子園出場
昨年度から全国大会になった関西学院大学主催の発表会です。全国SGH校の中から予選を通過して出場する25の口頭発表の中に、高2佐藤優芽さんの英語発表が選ばれました。また、ポスターでもチーム発表します。
- 2018/03/23~03/24 つくばサイエンスエッジ出場
サイエンスクラスの1年全員がポスター発表に出場します。2年の2つのグループは口頭発表の予選にエントリーしています。また、本校の交流校香港 PakKau 高から8人の生徒が合流し、順天の生徒とチームを組んで活動・発表します。

8. 1 1学年のSGH活動

活動概要

①高等部1学年全員で取り組むSGH活動

⇒ 海外研修を通じた教育支援活動をメインとする、講義、ワークショップ、ディスカッション、プレゼン、交流イベントなど

<1学期>

- ・フィリピンを題材として社会課題を探求する（1）
- ・フィールド研究計画書作成（2）
- ・コアメンバーの選定
- ・Sクラスは独自の科学基礎実験開始

<2学期以降>

- ・海外研修先の決定
- ・海外研修先の事前学習（3）
- ・海外研修先での教育支援活動の考察



②コアメンバー（GLAP-A）で取り組むSGH活動

⇒ フィリピンフィールドワーク派遣を通じた探究活動を、約2年間を通じて行い、論文作成や外部での発表活動などより高度な研究結果を目指していく。

<1学期>

- ・コアメンバーの選定
- ・夏休み事前研究

<2学期以降>

- ・定期的にコアメンバーでの研究指導
- ・9月末のプレフィールドワーク実施
- ・プレフィールドワーク活動報告
- ・本フィールド調査に向けた研究計画の作成 * 並行して海外研修の事前学習も行う

活動内容

（1）フィリピンについての課題設定 指導者：シェバ マグノ先生（ALT、フィリピン出身）

フィリピンを知るワークショップ。クイズなども取り入れながら、フィリピンの文化・生活、そして宗教などの基礎的情報を確認。フィリピンの格差社会について、フィリピンの写真などを提示しながら説明。

（2）「研究計画ガイダンス」 指導者：藤井健太教諭

研究とは、客観的な根拠に基づいて何かを解明することと同時に、学問的・社会的に意味のあるものであることが重要である。研究目的を発見すること、先行研究をしっかりと読むことが大切であるということ 강조했다。

(3) 海外研修コース選択

9月23日(土) 24日(日) 文化祭(2年海外研修各コース展示、口頭発表を見学)

10月7日(土) 第2回父母の集い全体会。コース概要説明

10月14日(土) 生徒へのコース概要説明会・高等部2年による説明会

高等部2年の生徒が今年度の海外研修の様子と、事前、現地、事後の3段階を踏んで課題研究を続けて得られた成果を1年の生徒に向けて発表した。上級生の経験を、1年に伝えることにより、1年のコース選択の助けとするとともに、上級生が始めた課題研究を1年の生徒が継続するためのきっかけづくりとした。課題研究の学年を超えた連携のための枠組み作りが進んだ。

10月16日(月) コース希望調査、志望理由書×切

コースを志望する理由をつけて、コース希望を提出させた。志望理由書をもとに、適性を審査。第1希望のコースにならない場合もあるので、第2、第3希望も記入させた。第3希望までに、人数制限のない先行(シドニー、台湾)を入れることを義務付けた。

10月21日(土) 選考終了

10月27日～11月8日 Global Week

(3) コース別研修内容

	11月11日	11月25日	2月3日	2月17日
NZ	プログラム全体の流れを把握する	テーマの決め方の指導	海外研修旅程の説明	研究テーマ発表会 日本紹介のプレゼン
カナダ	英語で自己紹介	英語タスクの説明 テーマ検索の解説	課題研究の進め方 KWL法(PBLの基本)	課題研究ペアワーク Google Classroom 登録
シドニー	昨年度のテーマ紹介	留学生 Alana の シドニー紹介	事前レポート 作成準備	テーマ調査 Google Classroom 登録
タイ	行程、交流内容確認	仮テーマ設定タイ 語で名前を書く	リサーチクエスチョン 作り	ワークシートに沿って リサーチクエスチョン を作成
ブリスベン	実験、実習の説明 研修・探究テーマを 考える	研修に必要な 英語フレーズ	杏林大学での研修準備 実験に即した問題演習	杏林大学訪問 英語で実験指導 プラスミド切断実験 アガロースゲル電気 泳動
台湾	研修概要説明 研修テーマ決め	研修計画作成	量と質の二つの観点を 設定する	樂先生の台湾語講座

8. 2 2 学年 SGH 海外研修・課題研究ワークショップ

高等部2年は、学年全員が SGH 対象となった初めての学年である。昨年の2学期から始まった行先別のワークショップを引き続き実施し、夏季休業中の海外研修に備えた。帰国後は口頭発表、ポスター発表および報告書の作成に備えて研修活動を行った。

この項では、今年度実施したコース別ワークショップの概要を記す。本校の SGH 課題研究は、総合的学習の時間として、土曜日にほかの行事に混ぜて配置している。基本的に一コマ50分で実施している。

行先別ワークショップ一覧(特記ないものは土曜日)

行先	台湾	シドニー	NZ	カナダ	タイ	ブリスベン
4月6日	実地踏査報告・グループ分け B&S プログラムの説明	現地研究 テーマ調査 (PC 教室)	仮説の設定・ 研究計画立案	プログラム 参加申請書・旅行会社からの説明	現地行程 確認	実験器具 調査
4月15日	事前研究報告書	学校交流時の「学習支援」計画	行程説明 心構え	英語 CanDo リストの確認	チトラダ校 生徒と交流 (12日も)	ホームステイ アプリケーション
4月22日	B&S プログラムの作成	学校交流時の「学習支援」計画	アプリケーションフォームの記入	課題研究テーマの設定	報告書の「序論」執筆	事前研究調査
4月29日	B&S プログラムの作成	学習支援企画班別プレゼンテーション	事前研究報告書の下書き	事前課題報告書の作成	持ち物確認、 タイ料理について	英語で書いた数学の問題演習
5月27日	東山高校との交流会計画	学習支援企画班別プレゼンテーション	事前研究報告書の清書	事前課題報告書の発表会	報告書作成 指導	場面ごとの 英会話練習
6月3日	班ごとの B&S 計画	自由散策時の計画	プレゼン日本語版最終演習、業者のオリエンテーション	Fairwell Party の企画	孤児院・養護施設での交流準備	イオン同定 実験(英語)
6月10日	旅行者による最終ガイダンス	旅行者による最終ガイダンス	事前研修最終発表	旅行者による最終ガイダンス	活動の最終 チェック	旅行者による最終ガイダンス

夏季休業	海外研修
9月2日	振り返りと、文化祭発表について
9月16日	文化祭発表準備
9月23日 ～24日	文化祭発表 ポスター・口頭発表等 理軒館を会場に、各コースの展示、動画、口頭発表等を行った。
10月14日	1年生の行先選択のためのガイダンス。各コース別に場所を分けて現地活動と課題研究の紹介をした。行先選択とともに、課題研究の学年を超えた連携のきっかけとした。
11月9日	学習成果発表会 全校生徒を対象に、海外研修・課題研究の成果を口頭発表した。
11月25日	学習院大学岩田公雄教授講演会
2月16日	SGH 活動報告会 1年生、来場者を対象に SGH 海外研修・課題研究の成果をポスター・口頭で発表した。

研修後は、文化祭、学習成果発表会、SGH 活動報告会を舞台に1年余りにわたって継続してきた研究を発表する機会を多く設けた。特に、今年度の成果を来年海外研修する1年生に向けて発表し、研究課題の引き継ぎを促して、多年度にわたる継続研究が生まれやすい枠組みを作った。また、現地調査、事後研究の成果を報告書の形でまとめた。(報告書については、SGH 海外研修と課題研究報告書の章を参照。)

8. 3 コアグループの役割と全校普及

・コアグループの流れ

本校のSGHは英語選抜類型と希望者を対象としたプログラムで2014年度にスタートした。英語選抜類型は独自のカリキュラムを持つ各学年1クラスの類型であったので、新たなプログラムのパイロットケースとして小さな規模で始めることが理由のひとつでもある。初年度の他クラスからの希望者は、SGHの取り組みがなんであるかよくわからないということもあり、わずか3名であった。この3名に参加理由は、中学校時代の先生が国際問題に興味があり授業中の話題になっていたので興味があったということだった。このうち2名がフィリピンフィールドワークに参加することになる。

2年目には、英語選抜類型に加え理系の特進選抜類型サイエンスクラスのプログラムを追加した。サイエンスクラスの取り組みも、もともと独自に展開していた理数探究プログラムをもとにしており、英語選抜類型とは別々の内容や日程で進んでいる。この年、英語選抜類型のプログラムには他クラスから希望者10名の参加があり、ほとんどが本校からの内部進学者であった。前年同様このうち2名がフィールドワークに参加した。人数に大きな変化がなかったのは、英語選抜類型がSGHの対象であることが受験生に周知され、生徒の多くがSGHの対象であることを理由に英語選抜類型を受験していた。つまり、入学時から興味関心のある生徒は英語選抜類型に集中していた可能性があげられる。

3年目から学年全体がSGH対象となり、ワークショップや講演などは学年やクラスごとに行うようになった。本校はすべての生徒が2年生で6コースに分かれて海外研修に参加するので、海外研修を課題研究のフィールドと位置付け、研究課題に関する活動は土曜日に配置されている、総合的な学習の時間に海外研修のコースごとに行うこととした。したがって、フィリピンフィールドワークに参加を希望する生徒は通常の課題研究に加えて放課後で活動することとなり、担当教員の指導のもと月1～2回のゼミ活動の形で進められた。これに所属する生徒をコアメンバーと呼ぶことにした。15名程度でスタートし、現在のコアメンバーは7名である。この中で英語選抜類型の生徒は2名で、大半の生徒が他のクラブ活動にも所属している。

4年目には、3年目の形を発展させ、課外クラブ活動としてSGH探求部を設立した。探究部はフィールドワークに参加することを前提とした学年単位のコアグループと論文部からなり、それぞれの顧問が日頃は別々に活動しているが、必要に応じて緩やかな結合をして活動することとしてスタートした。探究部は1年生47名の部員でスタートしたが現在は23名で、この中で2年次フィリピンフィールドワークの参加希望者は今のところ13名であり、うち3名は本年度1年次のプレ派遣としてフィリピンフィールドワークに参加している。本校の1学年は250～260名なので、その中で常に10名程度は常にフィリピンフィールドワークの参加を希望し活動していることになる。コアメンバーはワークショップを中心に、フィリピンの社会課題の研究、社会課題解決のためのビジネスプランなどに取り組んでいる。

・リーダーとリーダーシップとコアメンバーの役割

平成28年度入学生から全員がSGH対象となる中で、コアメンバー・探究部を設けたのは、本校のSGH活動にリーダーシップを持つリーダーを育てるためである。コアメンバーに求められるリーダーシップについて以下に述べる。

本校は東京都青少年赤十字（以下、JRC）の全校加盟校である。JRCでは、JRCの活動を理解し主体的に推進していく児童・生徒のリーダーの育成を目的としたリーダーシップ・トレーニング・センターを毎年実施しており、本校の生徒も数名が参加している。ここでいうリーダーシップとは目的や成果のために様々な場面でそれぞれが考え動く力であり、みんなが持つべき「気づき、考え、実行する力」のことをいい、いわゆるカリスマ的なリーダーを育てるという意味ではない。誰もが持っているリーダーシップを最大限発揮させるために必要なことを学

ぶプログラムとなっている。

本校のコアメンバーに求められるリーダーシップもこれに近いと考えている。いわゆる権限のないリーダーシップといわれるもので、早稲田大学のグローバルエデュケーションセンターの日向野幹也氏や立教大学の経営学部で松岡洋佑氏がカリキュラム化して取り組まれているリーダーシップ教育が目指すべき形ではないかと考えている。

この形のリーダーに、まず求められることは、生徒たちの生活から遠くに位置する他人ごとに見える社会課題を身近にひきつけて、生徒たちのリーダーシップを覚醒させることである。次に求められることは、社会課題の解決のために行動プランを策定し、ほかの生徒をも巻き込んでいくことである。

本校の場合、コアメンバーの取り組みの姿勢がリーダーシップとして重要だと考えている。コアメンバーは、学校で定めたフィリピンフィールドワークだけでなく、外部のワークショップにも自主的かつ積極的に参加している。参加した生徒は必ず他のコアメンバーと情報共有を行っている。こうした場面では、参加しなかった生徒から質問攻めに合うことが多い。他の生徒による参加者から情報の取得とともに、コアメンバー全員は個々の意見を交換し、多くの社会課題は自分たちの生活と深くかかわっていることを再認識している。全員が主体的に意見交換を行うこの過程で、参加者一人一人に自然とリーダーシップが身についていると考えられる。

コアメンバーは、通常の高校生活で日常の話題に上がりにくい、解決しなければならないグローバル社会課題として学んでおく必要がある問題について、外部ワークショップや文献購読を通して多くの専門的な知見を得ている。メンバーは自分たちが得たものを他の生徒に知ってもらいたいという気持ちが非常に強い。これは、課題発表会の発表原稿やスライドショーの作成過程で、「ここは知ってもらいたい」「どうしたらみんな(他の生徒)にわかってもらえるか」という言葉を繰り返し使っていることからもうかがえる。

こうしたことがきっかけとなり、コアメンバーはクラスの授業で行われるグループ学習の場面で、グループ内のほかのメンバーとは違った角度からの質問を投げかける存在となり得ている。ここで彼らの果たす重要な役割は、他の生徒のマインドを「自分とは遠い存在の課題でどこかの偉い人が取り組むもの」から、「自分たちの問題で自分たちも考えなければならない」というマインドに引き込んでいくことである。「自分には関係ない」から「自分のこと」としてとらえることは、自分の中にあるリーダーシップにきづくことでもあり、これに関してコアメンバーは十分にリーダーとしての役割を果たし、ほかの生徒のリーダーシップを育てていると言える。

次に求められるのは、実際の行動プランを考え実行し、そこに他の生徒も巻き込んでいくことである。残念ながらこの部分については現段階では十分とは言えない。その理由としては、プログラムの最終目標をどこに置くかが明確でない事にもあると考えられる。高校生という限られた期間にすべてのことを経験することは難しく、また、大学で行われているプログラムのように、専門家の指導による、問題解決プロジェクトや起業といったことも現実的には難しい。どのような方向性をもって取り組んでいくのか、今後の検討課題のひとつである。

最後に、現在のコアメンバーは探究部として活動しているので、われわれ教員は、今後カリキュラムの中で他の生徒とかかわる場面を増やし、他の生徒が自然と巻き込まれていくような環境を作ることが求められていると考えている。

参考文献

日向野幹也 (2011) GP 報告書「ビジネスリーダーシッププログラム」立教大学経営学部

日向野幹也・松岡洋佑 (2017)「大学教育アントレプレナーシップ いかにしてリーダーシップ教育を導入したか」ブックウェイ

日本赤十字社 HP http://www.jrc.or.jp/activity/youth/news/170824_004918.html

(2018年2月28日閲覧)

8. 4 SGH コアメンバー活動報告書

2018年3月6日

英語科：藤井健太

1. 目的

- ①フィリピンでの現地フィールドワークを通して、現地でなければ知り得ない社会問題を発見し、それに対する解決策を模索する。
- ②論文の提出を最終報告と位置づけ、その作成のため論文作成の様式と技術を学び、論理的な思考を養う。
- ③発表会、報告会等に参加し、プレゼンテーション技術を向上させる。

2. 活動内容

●概要

対象	2016年入学生徒 7名
期間	2016年6月～
活動	・月1回のゼミ活動 ・論文指導 ・フィールドワーク参加 ・発表会等の参加

高校1年時での学年全体参加の研究計画書作成を経て、フィールドワーク参加希望者を募集。プレフィールドワーク参加者を含めて11名がコアメンバーとしての活動を始めた。部活動等の諸事情により増減を繰り返し、現在は7名がコアメンバーとして最終的な論文提出に向けて活動している。

参加者には夏休みの課題として「ストーリーで学ぶ開発経済学」(黒崎卓・栗田匡相 有斐閣 2016)を課題図書として読ませ、開発経済学と途上国の社会問題の基本について学ばせた。その中で自分の興味関心を発見させ、第1回のゼミで研究計画を発表させた。(詳細な内容については次章の個別の論文指導例で説明)その後、行事等により多少ずれることは有るが、月に1度のゼミでの研究計画書の発表を行わせ、2017年10月のフィールドワークに向けて指導を行った。

フィールドワーク事前指導においては、フィールドワークの期間、規模などを鑑みて実行可能な研究計画の作成を徹底することを指導のポイントとした。また、論文作成を最終目標としているため、先行研究にしっかりと依拠することも重視した。

フィールドワークにおいてはインタビュー、アンケートの質問項目の妥当性を評価し、再考させ、論文作成に資する活動を目指した。フィールド活動後は発表、報告会参加に向けて発表資料や論文作成の指導を、ゼミ活動ではなく個別に行っている最中である。

3. 論文指導例（モデル生徒：高2－3 佐藤優芽）

●第一回ゼミ（2016年9月3日）

生徒レポート概要
研究テーマは「日本とフィリピンの自殺率の差」。日本に比べてフィリピンは自殺率が低いことの理由として、キリスト教の影響をあげている。フィリピン人はほとんどがキリスト教徒であるので、その教えがあるので自殺率が低いのではないかと考えた。また、日曜日の教会への礼拝において命の尊さなどをフィリピン人は再確認できるが、日本人にはその機会がないためではないかと仮説を立てた。この仮説をもとにフィールド調査を行うことにしている。
指導内容
キリスト教の割合が多い国は他にもたくさんあるが、それらの国では特に先進国においては日本と変わらない自殺率であることもある。宗教ではなく、産業構造などの社会構造が主要因である可能性があるため、それらも考慮に入れてフィールド調査を行うように指導した。またキリスト教以外の宗教との比較も必要であると指摘した。

●第二回ゼミ（10月10日）

生徒レポート概要
フィールドワーク報告を行った。自殺に関する質問はなかなか聞きだしにくく、思ったような調査ができなかったようだ。「貧しくとも幸せである」という答えが多く得られたため、なぜそう感じることができるのかを疑問に思ったようである。
指導内容
フィールド調査に同行しなかったため、インタビューの細かい状況が把握できなかったが、自殺という話題を短時間の調査の中で聴きだすことはかなり難しいことは確かである。デリケートな話題を限られた時間の中で、信頼関係を形成していない状況では聞き出すことはおそらくできない。キリスト教徒と「幸せ」というテーマへの変更を考え始めていた。しかし「幸せ」という指標をどう扱うかということも難しい課題であるということは指摘した。

●第三回ゼミ（11月22日）

生徒レポート概要
キリスト教徒が多い国ということでアメリカについて調べた。1986年から1999年にかけて減っていた自殺が一気に増えて、2014年までの15年間で24%も増加した。中でも45～64歳の男性の自殺が増えていて、43%も増加した、などの自殺率の変化があったことがわかった。このようなことからキリスト教が自殺率に影響を与える主要因ではないのかもしれないという結論に至った。
指導内容
時代による自殺率の変化が見られるので、以前に指摘したように産業構造や、社会構造の変化が人々の心理に大きな影響を与えている可能性が高いと考えられる。フィリピンの産業構造、社会構造の変化を

調べることが必要ではないかと指摘した。ただ、フィールドワークでどのような調査を行うべきかという難しい課題が残った。

● 第四回ゼミ（2017年1月10日）

生徒レポート概要

課題として与えていた E・デュルケムの自殺論をまとめた。その中で、プロテスタントのほうがカトリックより強く自殺を厳しく禁止している。しかし、自殺率は大きい。デュルケムはこの要因を教会という集団がもつ凝集力にあるという。プロテスタントは教会という信仰上のよりどころを失い、孤立することにもなる。他の要因においても「集団凝集性」が本質的な要因である、ということがわかった。

指導内容

宗教も自殺率低減に一定の効果があるようであるが、社会における「集団凝縮性」は数多くあり、どの要因がフィリピンの自殺率に影響を与える主要因であるのかを見つけることが課題であると指摘した。

● 第五回ゼミ（2月14日）

生徒レポート概要

フィリピンの自殺率というテーマに行き詰まりを感じていたため、フィールドワークの経験から「貧困」をテーマに据えることにした。特に児童労働や退学率の高さに大きな興味を持っているようだ。インタビューにおいて「学校行ってもしたいことが見つからない」という答えに疑問を持ち、フィリピンの学校の問題点は何であり、どのように解決すればよいのかを模索していく方向性となった。

指導内容

フィールド調査では現地校を訪問できるなど、多くの調査が実現可能であると考えこの方向性で進めることにした。

● 第六回ゼミ（3月16日）

生徒レポート概要

フィリピンの教育状況、特に退学率の高さについて概観。フィールド調査でのごみ山のスカベンジャーの子ども達に対する調査を報告。自ら学校に行かないという選択をする子供たちもいたことに最も興味を持った。金銭的な事情で望まない退学をする子供たちがいる一方で、自ら進んで退学をする理由を考察することを以後の課題とした。

指導内容

国勢調査や先行研究などを用いて、職業訓練を含む詳細な教育状況、就職状況を調べるのが不可欠であると指摘した。特にフィリピン全体で何が退学率の高さになっているかを知らなければ、フィールド調査において特定の地域の問題点を明らかにすることができないと考えた。

●第七回ゼミ（5月1日）

生徒レポート概要
教育無償化に伴って、就学率が高くなったものの近年では下がりつつある傾向があるようだ。その原因として学校や教師の不足が挙げられている。これら教育の質の低さが留年率、退学率の高さの原因であると指摘する報告がある。フィリピンではそのような状況の中で就職率の向上のために職業訓練にも力を入れているようである。
指導内容
職業訓練教育といっても、レベルの差があるようである。国際競争力の強化と、経済発展のために必要かつ適切な中堅レベル(middle-level)の人材を迅速に育成すること、人材育成にあたっては、産業界のニーズに十分対応したものというフィリピンの目標がある。ある程度の教育を受けたものだけがこの対象であると推測できる。つまり就職率や退学率を語る時、平均化した数値や報告だけでは、特定の地域や社会階層を置き去りにしてしまうと考えられる。この点を考慮してフィールド調査を計画するように指導した。

●第八回ゼミ（9月18日）

生徒レポート概要
研究計画書の提出。研究テーマは「フィリピンの子供たちの教育から考える彼らの将来」、フィリピンの子供たちの学ぶ意味、なぜ退学してしまうのかを中心に調査することになった。
指導内容
アンケート・インタビュー内容の精査。調査票の作成を指導。

●フィールド調査事後指導（10月3日～）

指導内容
アンケート結果、インタビュー結果で多くのデータがあった中で結論が大きく変遷した。当初は夢を持って諦めずに勉強することが一番大切である、という心情的な問題に結論付けていた。しかしながら心情的な問題に帰結させることは主観に依拠しすぎており、妥当性があまりにも低いと考えた。そのためデータを詳細に再分析し、インタビュー内容を再考した。その結果、公立学校に通う貧しい生徒たちは就職するために学校に行っているのだが、就職経路がその生徒たちの社会資本に依存しており、そのような社会資本を持たないより貧しい家庭の子供たちは具体的にどうすれば就職することができるのかわからず、学校に意味を見出せず退学しているのではないかと考えた。つまり貧しい子供たちにとって学校は就職するために必要不可欠な存在になり得ていない、ということが退学率の高さの原因であると推測した。そして学校が地元企業などと連携し、就職の斡旋や地元企業の求める職業訓練を与えるなどの、職業訓練校としての支援が解決策ではないかと結論付けた。

4. 今後の課題

●論文作成における課題

論文形式での最終報告という性質上、先行研究での論理補強が不可欠であるが、生徒たちの時間的な余裕がないこと、そしてそもそも論文を読むと言う行為に馴染みがないということから容易ではない。フィリピンの限定された地域における研究であるので、テーマによっては先行研究を見つけることが困難な場合もある。日本語での論文でないことも多いので、英語で読まなければいけないことも多々あるのだが、生徒の現状から考えるとそこまで要求できないという面もある。高校生のレベルで、限られた地域という制約の中で論文を作成ということになると、質や妥当性という点において限界があるのではないかと思われる。

●学年間の関係性における課題

限られた地域、短い期間であるため研究内容のテーマと規模は限られてくる。生徒はオリジナリティーということに拘泥するあまり、先輩が行っている研究課題以外のテーマでなければやりたくないという思いを持つようである。しかしながらこれでは研究の精度も高まらず、教員の負担も大きい。もちろん自分たちの興味関心に従って研究することも大切であるが、学校として1つの研究テーマを持ち数年間にわたって研究をすることによって、通時的な研究が可能である。今後は個別の研究だけにこだわらず、順天としてメインとなるテーマを持つことが必要であると考えられる。

上記のようなことから今後はより一層学年間の協力が必要である。今年に限って言えば、フィールドワーク以外での学年間の協働がほとんどなかった。また、先輩からのテーマを引き継ごうと考えた生徒がいたのであるが、それをあまり快く思わないよう引き継ぐことができなかった。このようなことがないように、学年間が協働できる時間を作り、先輩の研究を引き継いでいく流れを作ることも必要である。

8. 5 2017 年度 SGH フィリピンフィールドワークスケジュール

<旅行日程>

	日次	地名	スケジュール	食事		
				朝	昼	夜
1	9/25 (月)	マニラ	※出発の2時間前チェックインをお願いします。 NH869 便 東京発 09:45 マニラ着 13:30 専用車にて空港までお迎え ホテルにてオリエンテーション 18:30 近くの食堂で夕食 【宿泊先: Pension Natividad】	×	機 内	○
2	9/26 (火)	カパス ダグーパン	7:00 ホテルにて朝食 8:00 出発 <マニラ> ・マニラ大聖堂視察 マニラ→カパス移動 (約2時間) <タルラック州カパス> ・バターン死の行進モニュメント 12:00 レストランにて昼食 ・オドネル収容所跡地 カパス→ダグーパン移動 (約3時間) <パンガシナン州ダグーパン> 17:00 宿泊先チェックイン 宿泊先にて夕食 夜: 振返り 【宿泊先: Lay Formation Center】	○	○	○
3	9/27 (水)	ダグーパン	<パンガシナン州ダグーパン> 7:00 宿泊先にて朝食 8:00 出発 ・ゴミ集積場訪問 12:00 レストランにて昼食 宿泊先にて休憩 ・カリカアン (都市スラムコミュニティ) 訪問 ・会社経営者及び役員へのインタビュー 19:00 レストランにて夕食 夜: 振返り 【宿泊先: Lay Formation Center】	○	○	○
4	9/28 (木)	マガルダン ダグーパン	7:30 宿泊先にて朝食 8:30 出発 <マガルダン> Mangaldang high school (公立) 訪問 12:00 レストランにて昼食 <ダグーパン> 宿泊先に戻ってホームステイ準備 La Salette School (私立) 訪問 17:30 ホームステイ先へ出発 (ホームステイ先で夕食)	○	○	○

			【宿泊先：ホームステイ ダグーパン】			
5	9/29 (金)	リングエン スアル	(ホームステイ先で朝食) 7:00 La Salette School 集合 8:00 出発 <リングエン> ・サントニーニョホスピタル(病院)訪問 <スアル> ・職業訓練所(溶接)及び縫製女性組合訪問 12:00 CFF 到着-昼食 ・CFFにて村人へのインタビュー 17:00 ホームステイ先へ出発(ホームステイ先で夕食) 【宿泊先：ホームステイ スアル】	○	○	○
6	9/30 (土)	スアル	(ホームステイ先で朝食) <スアル> 7:30 朝食 8:30 村でのアクティビティ準備 12:00 昼食 13:30 バキワン村でのアクティビティ実施 18:30 夕食 【宿泊先：CFF 子どもの家】	○	○	○
7	10/1 (日)	スアル マニラ	7:30 朝食 8:30 出発：スアル→マニラ移動 12:00 高速道路サービスエリアで昼食 <マニラ> ・スモーキーマウンテン跡地訪問 ・ショッピングモール 18:00 ユニカセレストラン 20:30 ホテルチェックイン 【宿泊先：アトリウムホテル】	○	○	○
8	10/2 (月)	マニラ	各自朝食 振返り 11:00 空港に向けて出発 12:30 空港にて昼食 NH870 便 マニラ発 14:40 東京着 20:00	○	×	機内

<参加者>

- 順天高校生徒 10名 2年女子7名、1年男子1名、女子2名
- カナダ・セントマイケルズ・ユニバーシティー高校(SMUS)生徒女子1名
- 引率：三井田真由美、藤井健太、桑村和孝、シェバ・マグノ(順天高校)、アヤ・ロビンソン(SMUS)

<宿泊先>

- マニラ(1日目)：Pension Natividadを予定しています。予約の状況によりBP International Hotelとなる場合があります。
- パンガシナン州ダグーパン(2-3日目)：Lay Formation Centerを予定しています。予約の状況によりStar Value Innとなる場合があります。
- ダグーパン(4日目)：ホームステイ(教員はホームステイ時Star Plaza Hotelを予定しています。)
- パンガシナン州スアル：CFF「子どもの家」及びホームステイ(教員はホームステイ時CFF「子どもの家」滞在)

8. 6 英語圏の学校と共同でのフィリピンフィールドワーク

「Canada St. Michaels University School 生徒との共同フィールドワークの意義」

本校において、フィリピンにおけるフィールドワークを英語圏の学校と共同で実施するという事は、申請当初の構想調書に記載していたところである。本校が海外研修を行っていたカナダヴィクトリア市のセントマイケルズ・ユニバーシティ高校（SMUS）を協力先に選定し、実施に向けて交渉を進めてきた。まず、その経緯を簡単に振り返る。

2014年（申請書年度）8月、順天高校 SGH 委員長が SMUS を訪れて、SGH の意義と、共同フィールドワークの重要性を職員会議においてプレゼンテーションした。その後の SMUS 高等部の幹部会議において、SMUS リーダーシッププログラムの一部として、順天高等学校のフィリピンフィールドワークへの参加を検討することが決定した。SMUS においては、リーダーシッププログラムの詳細は実施 5 年前に決定すべき事項だということで、SGH 期間内での実施が危ぶまれたが、特に予定を前倒しして調査をすることになった。

2015年9月順天高校第1回フィリピンフィールドワークに、SMUS のアヤ・ロビンソン先生が実地踏査として参加した。順天高校の生徒教員とすべての行程を共にし、研修内容と、安全性を検証した。アヤ先生の帰国後の報告を受けて、SMUS では2016年に生徒を派遣するための準備に入った。

2016年には順天高校生のメッセージが入った募集チラシ（第3年次報告書 p73）を作成したが、期日までに応募者を確定できなかった。

2017年に再び募集をした結果、2016年度応募を検討したものの断念していた11年生のリリー（YINI LI）さんが応募。アヤ先生とともに参加することが決定した。リリーさんは SMUS に中国から留学して2年目の生徒で、英語は第2言語である。英語が使えるフィリピンをフィールドに、英語を第2言語とする中国人と日本人が協力して探究活動を実施することとなった。

以下、フィールドワークの報告である。

0. 背景

本年度は初の試みとしてフィリピンフィールドワークに本学とも交流が深い、Canada St. Michaels University School からの生徒が1名加わる形でのフィールドワークとなった。本フィールドワークでは高校2年生の研究課題調査が中心となる。参加が決まったのが9月と一ヶ月を切っていたタイミングもあり、現地フィリピンの人々や高校生も交えての振り返りやディスカッションを本学からの高1生徒3名と中心に持ち、また交流することになった。本報告では今回の一事例の意義を振り返り考察したい。

1. 生徒背景

1-a: 参加学生の背景

順天生徒：本学の高校1年生、3名の内訳は女子2名。男子1名。いずれも帰国子女ではない。

1-b: St. Michaels University School からは高校1年生 Lily（中国出身）が参加した。

2. 本事例の意義

純粋な日本人生徒と、母国語、母国文化は中国であるが現在カナダで勉強している中国人生徒。その両者が各々にとって母語ではない第二言語である英語を媒体にして、互いにとって初めての体験となるフィリピンという

異文化のコンテキストと出会うという、非常に複雑な要素が絡み合った環境であった。こういった環境で行われた本事例の意義を考え報告したい。

2-a: 英語での communication

両生徒に取って第二言語である英語を使用し、初対面で、尚且つ環境はフィリピンという過酷なスタートラインの中研修は始まった。初日から本校生徒は試行錯誤をしつつも英語を駆使してしっかりと Lily との関係構築を始めていた。引き続き、研修中、本校生徒は積極的にコミュニケーションを続け、人種や文化背景を超えた関係を構築していった。1週間弱の日程の最後には良好な関係性が完成しており、本校生徒が来年の夏にカナダに留学することがあれば、Lily は中国には戻らずにボランティアとして本校生徒の世話をしたいので残る、と約束していた。これは生徒が達成した大きな成果であり彼らの自信につながったはずである。

英語の運用力に関して Lily と本校3人の生徒の間に圧倒的な差があった事も本校生徒に取っては大きな刺激になった。自分達と同じ第二言語である英語を遥かに高いレベルで自由に使いこなす Lily の存在は、良い意味での悔しさに繋がった。

文化背景の違いによる Discussion 時の姿勢の違いも刺激になった。いつも臆する事なく自分の意見をはっきりと言う Lily の立ち振る舞い、また明確な分析的思考に基づき自分の意見を言うスタイルも、本校生徒にとっては新しい発見であった。逆に Lily にとっては日本人生徒の現地の村人達の背景にある個別の状況や感情にまで思いを馳せるタイプの発言は、印象的であったようである。このように、異なった文化背景による姿勢の違いを、それぞれ新しい刺激として受け取ったことは意義深いことである。

2-b: “Englishes ” との出会い

本研修において特に共通言語、「英語」に対する先入観が大きく壊されたことは両国の生徒にとって驚きであったろう。フィリピン人が臆することなく独自の訛りも入りながら意気揚々と語る英語。同じフィリピンでも地域や身分によって、異なるアクセント。日本でもカナダでもお目に書かれないタイプの「英語」である。

カナダで身に付けたネイティブ張りの英語を流暢に速いスピードで話すと逆に理解されない体験をする Lily。美しく流暢にアメリカ英語、イギリス英語が聞けて話せば問題ない、分かりにくい発音が悪い英語を話す方が悪い、という認識はともすれば身勝手に高慢な考え方であるという気づきを本校生徒、Lily は得ることとなった。彼らからすればアメリカ英語、イギリス英語をモデルに理想としている自分達の話す英語がそれ故に「わかりにくい」と捉えられるという気づき。自国や英語母語話者のみの国内においては体験できない、英語の多様性を痛感したに違いない。

2-c: フィリピンという異文化、コンテキストとの出会い

両国生徒に取って、フィリピンという異文化は未知のものであるという点においては共通していた。これはいずれかの生徒の母国内で、2カ国の生徒が国内の問題を議論するというケースとは話が異なる。異文化の中で行動するという点において両生徒は対等である。どちらかが、どちらかを補助的に補い教えるという関係性ではない。多くの場面ではフィリピンで共に発見し、気づき、ショックを受け（あるいは片方は受けずに）、自分達の持っていた前提が壊される体験を共有できた。また別の場面では、両国生徒のうち一方だけがショックを受けたり、あるいは同じ体験から全く異なった印象を持ったりすることで、自分たちの文化背景の違いにより捉え方が異なることを発見できた。それはフィリピンという異文化を互いに知り、それと同時に日本と、中国（またはカナダ）の教育、感受性、自分達の物の見方、捉え方の同じ点や違う点をお互いに知るという営み

を含んでいたという点で意味が大きかったと言える。

3. まとめ

まず、異文化体験という側面での意義を述べる。今回のケースは Canada St. Michaels University School から中国人留学生 Lily と本校高校 1 年生との交流という 1 事例に過ぎない。しかしながら、第二言語として英語を使う他国の生徒同士が、フィリピンという異なった教育、歴史、文化、経済背景を持つ第三国で共に異文化に出会い、また生々しいフィリピンの実態の一部を直視するフィールドワークによってもたらされる効果には意義があった。本校生徒はフィリピンと出会い、フィリピンに出会う中国人生徒、Lily の考え方と捉え方に出会い、それら両者の視点から自分達日本人の捉え方、視点、見つめ直す機会を得た。これは Lily にとっても同様である。

次に本校生徒の言語体験としての意義を述べる。英語が共通語であるなか、その運用能力に限界のある本校生徒は Lily にもっと的確に自分達の考え、感じたことを詳細に自由に表現したかったという悔しさの副産物も得ることができた。Lily も、英語で話しさえすれば自分の思いはすべて伝わるはずだという先入観を否定する経験になった。

順天高校のフィールドワークにカナダからの参加者を迎えることについて、共通言語が英語になることによって活動の質が低下するという危惧が語られていた。しかし、今回の Lily の参加には共通仕様言語が英語となることがデメリットである、と言っているのは決して得られることのできない大きな意義があったと思われる。

4. 本校生徒の感想、気づき

最後に実際の生徒の気づき、リアクションを下記に記す。生徒には下記の問いに答えてもらった。(下線部は編集者による)

Q: 今回、中国人という異なる文化的背景を持った同年代の Lily と、自分達にとっても「初めてのフィリピン」という地で「英語で」フィールドワークを行うという特殊な体験をしました。フィリピンで Lily と英語でコミュニケーションをして過ごす中で、また現地を訪問をして様々な新しい刺激を得て、彼女と discussion をして過ごす中で、新たな視点や、気づきを得ることができたと思います。Lily と英語でフィリピンでフィールドワークをしたからこそ、得られたと思う、学んだことを自分の正直な言葉で自由に、振り返り書いてください。

●江川幸之祐 (高1): シリアスな場面とか、まじめに話し合っている時にわかったのが自分は 自分の英語に自信がない ということだ。少しぐらい文法が違ってたって通じるのはわかっているけど、自分の考えたこととか感じたことをできるだけそのまま伝えたいから、言葉を選び過ぎてなかなか言い出せない時がある。そのままにも言わずに終わることも。

世界中で完璧な英語を喋る人は多くないと思う。多分リリーもその 1 人だけど、身振り手振りやリフレーズしたりして伝えていたし、こっちもよく理解したつもりだ。リリーの瞬時にリフレーズする語彙力は高いし、英語以前のコミュニケーション力は見習うべき だと思った。自分の英語はそういう方法でもより正確に人に伝わるものになるんだと思った。フィールドワークを終えてからは、積極的に思ったことを口に出してみよう と思うようになった。

長期留学もしないし、英語を使う機会はリリーよりかは少ないと思うけど、自分は英語選抜クラスにいるから、負けてられない。もっと英語を話す時間を大切にしようとおもった。

●**岸本美鈴（高1）**：私が Lily と 8 日間フィールドワークを共にして一番に感じたことは、Lily の勇敢さです。母国の中国を離れ、カナダに留学し、そこから日本人ばかりのフィールドワークワークに参加する。そんな、自分の意思や欲に真っ直ぐな Lilyは、ディスカッションでも、積極的に発言し、目立っていました。たとえ相手が専門家であっても、自分の考えをきちんと伝え、時には反対意見も臆せずという。

また、疑問に思ったことは何度でも聞いて理解しようとする姿勢はとても輝いて見えて、私の目標でした。逆に、Lily と違うグループで日本人だけのディスカッションになった時は、日本人ならではのシャイさというのか、ただ 相手に賛同して話が終わってしまい、ただの意見共有になってしまいました。

私たちが方が語学的にも意見を言いやすい環境にあるというのに、アウェイな環境で頑張っている Lily に劣っている悔しさも感じました。それと同時に、自分をしっかりと持っている Lily がどれだけ凄いか、気付かされました。

ただ、Lily の意見には彼女の生活を基準として考えているようなものもあり、私たちにとって当たり前の事は、必ずしも世界共通ではないので、フィールドワークワークでは、自分の暮らしや立場と比較するのではなく、現地の人の環境に寄り添ってと話さなければならないな、と再確認するきっかけになりました。

また、Lily は いつも笑顔で、いるだけでぱっと雰囲気が和むような女の子でした。インタビューの時、私がかまく英語で伝えられず、困っていると、「You mean ~?」という風に私に確認して助け舟を出してくれました。本当は Lily こそ心細いはずなのに、周りに気配りまでしてくれて、癒しを与えてくれる Lily に感謝しかありません。フィールドワークを Lily と共に出来て、本当に良かったです。機会があれば彼女に是非、会いたいです。

5. SMUS との振り返りと事業の継続

11 月 21 日、SMUS のエクステンションプログラム統括責任者の Dawn Wilson 先生が順天高校を訪問し、今年度のフィールドワークの振り返りを行った。SMUS ではリリーさんの聞き取り調査を行って、異なる文化背景を持った 2 つのグループが第 3 国で活動したことが、本人の学びにどのような影響を与えたかを調査している。Dawn 先生の来日の目的は、リリーさんと行動を共にした順天高校の生徒からも聞き取りを行って 2 つのグループ双方の変化を比較しようとするものである。3 名の 1 年生徒を呼んで、昼食をとりながら聞き取り調査をしていただいた。SMUS からの報告は来年度の最終報告書に掲載予定である。

また Dawn 先生は、2018 年もフィリピンツアーの募集を行い、できれば複数の生徒をフィールドワークに参加させたいという希望を述べられた。

9. 1 Global Week 概要

2017 年度入学生より、SGH 対象生徒が全員に広がった。様々な興味を持った生徒が課題研究のテーマを考え、学問領域ごとに異なる探究手法を学び、研究結果をまとめて表現する力をつけることが求められる。とりわけ、自らの関心に従って、情報を集め、見解をまとめ、自立した研究者として意見を交換しようとする意欲を育てる機会が必要である。また、将来にわたって社会課題に関して高い問題意識を保ち、国際社会で活躍するためのキャリア追求を始める端緒を高校段階で与えることも SGH の取り組みの重要な部分である。その実現に向け、大学教員をはじめとする多数の研究者、専門家等を校外から招き、本校卒業生を含む大学生、さらに本校現役生徒も話題提供者として加わり、「Global Week：立場を超えて、ともに学びあう 1 週間」として、10 月終わりから 11 月初めにかけての 5 日間にわたり、54 種類のトピック（話題）を企画実施した。

A 目的： 関心のあるグローバルな社会課題等について、事前学習、調査を通じて自らの見解をまとめ、まとめた見解をもとに校外から招いた講師と意見を交換し、さらに今後の研究のための助言者として講師とのつながりを構築する。また、同じ問題を探求する研究者として、立場を超えて話し合える積極的な態度を養う。

B 対象： (1) 必修：高等部 1、2 年全員、専任教員、2 トピック以上の参加

(2) 希望者：高等部 3 年、非常勤教員、職員、中等部 3 年

C 実施期間： 2017 年 10 月 27 日(金)、11 月 1 日(水)、2 日(木)、7 日(火) および 8 日(水) の 5 日

D 実施時間帯： 14 時 30 分～16 時(6 時限 40 分短縮授業。ただし 11 月 3 日を除く)

E 話題提供者：

1. 連携大学・機関からの派遣
2. 本校教員（希望者）
3. 本校高等部生徒 2, 3 年生（トピックを企画した希望者）
4. 本校生徒が招聘した大学生団体等
5. 本校卒業生

F 内容：

カテゴリー1：世界の成り立ちとグローバルイシュー

カテゴリー2：テーマ設定、調査の手法、アカデミックリテラシー

カテゴリー3：課題研究設定テーマごとの各論

カテゴリー4：研修旅行先に関する各論

カテゴリー5：発信技術、キャリア教育

(カテゴリー間で講座の数の差が出たので、プログラムにカテゴリーは明示しなかった)

G 備考： 1、教員向けのトピックも設定する

2、登録者に事前課題を課す

事前課題例：あらかじめ調べておくべきキーワード数個、見ておくべきサイト、読んでおくべき文献(10 ページ以内)等、「高校生が 2 時間以内に無理なくこなせる程度の量」を話題提供者に依頼した。

9. 2 Global Week プログラム

2017年10月27日（金）～11月8日（水）14時30分～16時

日本全国、国外から来て下さった話題提供者と、正解のない問題について立場に関係なく語り合うための1週間です。ぜひ、有効に時を過ごしてください。話題提供者の方も含めて、参加者全員が楽しめる催しになることを願っています。

グローバルウィーク実行委員会

参加者へのお知らせ

1. 登録したトピックには必ず参加してください。
2. 指定された事前課題を終えて参加してください。事前にメール送付や、ウェブ登録が必要なトピックもあります。前日までに終わるようにしてください。
3. 開始時間までに会場で着席しててください。
4. 配布されたワークシート（ノート代わりに使えます）に記入して帰りに提出してください。（出席票の代わりにします）
5. 会場 PBL 1 と 2・Mini Labo・Learning Commons は理軒館 3 階、Labo1 と L2 は地下 1 階にあります。

●1日目：10月27日（金）14：30～16：00

トピック	実施	話題提供者名	所属	トピック名	会場
101	27日	長畑 誠	明治大学専門職大学院ガバナンス研究科専任教授	私たちが暮らす「地域コミュニティ」って何だろう？	Labo2
102	27日	宮首 弘子	杏林大学外国語学部中国語学科 教授	あなたの知らない中国の高校生生活	51
103	27日	菱田 雅晴	法政大学法学部 国際政治学科、教授	日中相互ヘイトの構造：中国はヤバい？日本はウザい？	講堂
104	27日	Ted O' Neill	学習院大学国際社会科学部 教授	Studying Globalization and Business in English	PBL 1
105	27日	内尾 太一	麗澤大学講師	「みなしご津波」とは何か？：海の向こうからやってくる災害と地球社会	5 2
107	27日	藪長千乃	東洋大学 国際学部 国際地域学科・教授	社会保障の国際比較	Mini Labo
108	27日	田中 雅美	埼玉大学工学部 3 年 Global Youth	フィリピンにおけるインターン体験（セブ島マングローブ植林とマニラアジア開発銀行本部訪問）	5 0
109	27日	上原 優子	立命館アジア太平洋大学国際経営学部 准教授	NPO/NGO・社会的企業のミッションマネジメントと寄付	Labo 1
110	27日	宮崎 蒼生 カバリヤ マホ	順天高校 2 年 SGH 支援員	“動物と人との結びつき～可愛い動物達を救うには～”	5 3
111	27日	斎藤 健一郎	朝日新聞社文化くらし報道部記者	5 アンペア生活をしてみた	PBL2

●2日目：11月1日（水）14：30～16：00

トピック	実施	話題提供者名	所属	トピック名	会場
201	1日	和泉 伸一	上智大学外国語学部 英語学科、教授、英語学科長	世界における英語の役割	PBL 1
202	1日	井田 正道	明治大学政治経済学部 専任教授	ニュースから学ぶ世界の選挙	Labo 1
204	1日	一原 克裕	NPO 法人スポーツセーフティージャパン・早稲田大学アメリカンフットボール部アスレティックトレーナー	チャンスを掴む行動力と マインドセット ～スポーツ大国アメリカでの経験から伝えたいこと～	PBL 2
206	1日	太田 祥歌	認定 NPO 法人日本ハビタット協会プロジェクトマネージャー	教科書プロジェクト in ラオス ～多民族国家ラオスの教育支援～	6 1
207	1日	Plas+	麗澤大学学生団体	How to 国際協力 Part 2! ～私たちがカンボジアとフィリピンにハマっちゃった理由～	6 2
208	1日	Paul Snowden	杏林大学副学長	Lost in Transcription	6 0
209	1日	清 和成	北里大学医療衛生学部健康科学科・教授	環境問題とサステナビリティ	Labo 2
210	1日	山口 哲一	(株)バグ・コーポレーション 代表取締役、一般社団法人日本音楽制作者連盟理事、社団法人日本芸能表演家団体協議会理事	音楽ビジネスの「今」と「未来」 (-「グローバル化するJポップと日本のポップカルチャー」-)	Mini Labo
211	1日	山本 威一郎 神林 絹枝	日本ジャーナリスト会議理事 順天高校特任講師	黒い太陽を追って ～太陽と月が織りなす天空の奇跡	講堂
212	1日	北郷 美由紀	朝日新聞社報道局デスク	SDGsでつくる自分たちの未来	6 3

●3日目：11月2日（木）14：30～16：00

トピック	実施	話題提供者名	所属	トピック名	会場
302	2日	Jason Somerville	杏林大学 Writing Center, 特任講師	Student interaction in English using smartphone apps	PBL 1
303	2日	酒井 邦弥	神田外語大学学長	グローバル時代・若者たちの時代	PBL 2

304	2日	渡部 靖夫	法政大学生命科学部 応用植物学科、教授	世界の食料問題を考えてみよう	59
305	2日	湯本 潤司	東京大学理学系専攻科物理学専攻教授	波は万物の基本-三角関数の世界	Learning Commons
306	2日	莊林 幹太郎 荒井 啓子 清水 敏男	学習院女子大学 国際コミュニケーション学科 教授 日本文化学科 教授 日本文化学科 教授	オリンピックとその『レガシー』	Labo 2
307	2日	佐藤 裕視	国際協力機構 JICA 研究所研究助手	日本の国際開発協力 - 歴史的展開と今後の展望	50
309	2日	福田 隆晃 Max Fiedler	順天高校2年 TalkativeTravelEducation Vice President	An amazing English experience - your summer in England!	55
310	2日	山本 威一郎	日本科学ジャーナリスト会議理事	人類にとって科学技術とは何か	Mini Labo
311	2日	齋藤 博之	東京電機大学工学部 機械工学科 教授	機械工学と夢の材料	Labo 1

●4日目：11月7日（火）14：30～16：00

トピック	実施	話題提供者名	所属	トピック名	会場
401	7日	山口 和範	立教大学経営学部 経営学科教授 副総長	グローバル世界で求められる 統計的思考力	PBL 1
402	7日	土屋 隆裕	横浜市立大学学術院 (国際総合科学群) 教授	アンケート調査の方法と 結果の見方	PBL2
403	7日	植木 安弘	上智大学 総合グローバル学部教授	国連から見た世界と 国際キャリア	41
404	7日	Marat Zhanikeev	東京理科大学経営学部 経営学科准教授	PBL のプロブレム部分に着目した イノベーション型プロダクト 開発の技	40
405	7日	佐々木 隆文	東京理科大学経営学部 経営学科教授	企業の目的と コーポレートガバナンス	Labo 1
406	7日	柴田 藍 勝山 航陽	順天高校3年 Beyond School 副代表	留学×キャリアワークショップ	44
407	7日	由井 哲治	外務省嘱託 順天高校講師	「世界システム」論と「国際関係論」 から見た西洋近代史	42
408	7日	井上 忠男	日本赤十字看護大学教授	“戦争の中に慈悲を”～殺戮が 続く世界における赤十字と 国際人道法の役割	48
409	7日	森本 章倫	早稲田大学創造理工学部 社会環境工学科教授	次世代交通とコンパクトシティ	45

410	7日	新 江梨佳	順天高等学校 SGH 支援員・東京大学教育学研究科修士課程	“コミュニケーション能力”を問いなおそう	43
411	7日	樂 大維	拓殖大学外国語学部中国語学科講師	クイズで楽しく知る台湾の言語と文化	講堂
412	7日	石飛 徳樹	朝日新聞社編集委員	より面白く映画を見るために	Labo 2
413	7日	小林 岳彦	東京電機大学工学部情報通信工学科教授	携帯電話・携帯インターネットの繋がる仕組み	Mini Labo

●5日目：11月8日（水）14：30～16：00

トピック	実施	話題提供者名	所属	トピック名	会場
501	8日	Kevin Ryan	昭和女子大学英语コミュニケーション学科教授	21st Century Skills ネットリテラシー	PBL 1
502	8日	岸本 直樹	法政大学経営学部市場経営学科、教授	ビジネスの国際化：証券投資を例にとって	Labo 1
503	8日	安東 正樹	東京大学理学部物理学科准教授	重力波で探る宇宙	6 1
504	8日	宮下 大夢	早稲田大学社会科学総合学術院 助手	大量虐殺から人々を救うにはどうすべきか—正義の武力行使は許されるのか?—	6 2
505	8日	眞嶋 麻子	日本大学国際関係学部国際総合政策学科 助教	身近な問題から考える国際協力—武力紛争と携帯電話の関係	PBL2
506	8日	萩原 建次郎	駒澤大学総合教育研究部教授	子ども・若者の居場所の変容と自己形成空間の再生	6 3
507	8日	尾尻 希和	東京女子大学現代教養学部国際社会学科国際関係専攻教授	発展途上国研究入門	Learning Commons
508	8日	野津 美由紀	難民支援協会広報部	日本の「難民問題」を考える	6 0
509	8日	宮地 貴士 星 あゆむ	IFMSA-Japan (国際医学生連盟 日本) 秋田大学医学部3年 東邦大学医学部2年 (順天高校卒業生)	ザンビア共和国に命の灯を ～診療所建設に向けた 大学生たちの挑戦～	6 4
510	8日	脇田 敬	(有)FLYMUSIC 代表取締役 尚美ミュージックカレッジ ミュージックビジネス科講師	アーティストマネージメントとは？(仮)	講堂
511	8日	岡村 郁子	首都大学東京国際センター 准教授	異文化理解とコミュニケーション	Labo 2
512	8日	Malcolm Field	杏林大学総合政策学部教授	Introducing Research Methods (in English)	Mini Labo

以上

9. 3 Global Week トピック情報抜粋

トピックコード 110 動物と人との結びつき

～可愛い動物達を救うには～

所属機関名	The Human League Japan／順天高等学校
所属部署、役職	Corporate Relation Manager／2年・トビタテ留学ジャパン3期生
話者のお名前	カバリヤ まほ /宮崎 蒼生
実施日	10月27日(金)
Topic の内容 (30字から300字程度)	<p>《馬と言えれば何を思い浮かべる?》</p> <p>馬は古くから私たちの生活と結びついてきました。農耕や軍事などがその例に当たります。そして現在で最も身近な結びつきは競馬と言えるでしょう。多くの競馬ファンがいる中、主役である競走馬達が引退後どうなっているのか。知らない人も多いです。今回のレクチャーではトビタテ留学ジャパンでの経験も踏まえ、競争馬の現状について、海外と日本を比較してお話します。</p> <p>また日本における動物愛護関連法と海外の動物愛護関連法についても比較し、これから日本の動物愛護をどう変えていったらいいのか話し合しましょう。</p>
事前課題	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な動物(ペット、畜産動物など)を一種選び、それに関する愛護問題を少し調べて、紙に書いてみてください。(キーワード) 殺処分、安楽死、バタリーゲージ、動物実験、ペットカフェ、フォアグラ、 ・動物愛護法について少し調べてみてください

トピックコード 302

Student interaction in English using smartphone apps

所属機関名	Kyorin University
所属部署、役職	Writing Center, Special Lecturer
話者のお名前	Jason Somerville
実施日	11月2日(木)
Lecture/Workshop の内容 (30字から300字程度)	<p>Research shows that mobile device applications (apps) are now valuable tools which are used for education and language learning, in particular for promoting learner collaboration and social interaction. This workshop will demonstrate an English lesson utilizing smartphones in a classroom environment. Students will participate in a lesson using mobile device apps to communicate and interact. The workshop will show how smartphones can be incorporated successfully into the classroom.</p>
事前課題	To be confirmed(追加情報誌に記載)
備考: 実施形態、準備するものなどのご要望	<ol style="list-style-type: none"> 1. Smartphone with an internet connection 3/4G 2. The following apps installed on the smartphone: <ol style="list-style-type: none"> ① Internet Browser (Google) ② LINE ③ QR Scanner ④ Voice Recorder ⑤ Timer

トピックコード 303 グローバル時代・若者たちの時代

所属機関名	神田外語大学
所属部署、役職	学長
話者のお名前	酒井邦弥
実施日	11月2日(木)
Lecture/Workshop の内容(30字から 300字程度)	「グローバル化」から「超情報化」という若者たちが活躍する近未来の社会についてお話しします。 将来に向かって今から何をすべきか、考えるきっかけになればと思います。
事前課題	少子高齢化と人口減少を迎える日本について、どのような問題が起こるか。起こると思われることを考えてみてください。

トピックコード 509 ザンビア共和国に命の灯を ～診療所建設に向けた大学生たちの挑戦～

所属機関名	①秋田大学・IFMSA-Japan(国際医学生連盟 日本) ②東邦大学・同上
所属部署、役職	①医学部医学科3年・ザンビアブリッジ企画代表 ②医学部医学科2年
話者のお名前	①宮地貴士 ②星あゆむ
実施日	11月8日(水)
Topicの内容(30 字から300字程度)	<p>私たちは、順天学園の卒業生であり、IFMSA-Japan(国際医学生連盟 日本)に所属する医学生です。</p> <p>この組織のメンバーとともに、アフリカのザンビア共和国に診療所を建設する取り組み、「ザンビアブリッジ企画」をスタートさせました。</p> <p>ほとんどの国々が“途上国”と呼ばれるアフリカ大陸。この地域に診療所を建てる行為は、一見すると素晴らしいことのように思われます。しかしながら実は、私たちの活動が本当に正しいのか、たくさんの葛藤を抱えながら、このプロジェクトを前に進めてきました。</p> <p>1つの村に診療所を建設することはどういった影響を及ぼすのか、「途上国＝貧困＝貧しくて苦しんでいる人々」という構図は正しいのか、ザンビアブリッジ(Zambia Bridge)という企画名に込められた意味は何なのか、皆さんと一緒に考えます。</p> <p>このトピックでは、下記の4点を目指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際協力について具体的なイメージをつかむ。 ・広い世界に目を向けるきっかけとする ・今の自分がすべきこと、できることを考える機会とする
事前課題	①「途上国」、「貧困」というワードを調べ、自分なりの解釈を持ってきてください。 ②こちらは私たちの活動の詳細になりますので、あらかじめご一読下さい。 http://nantokashinakya.jp/sekatopix/article0163/

9. 4 Global Week アンケート

Global Week のねらいがどのように達成されているか測定するために、参加者を対象とするアンケートを実施した。

昨年度は、Global Week を通じて生徒が変容する様子を測定するために、事前事後ループリックを策定し、参加者を対象に実施した（29 年版報告書 pp46–58）。その後 SGH 運営指導委員会において、数日の取り組みで生徒が変容する様子を測定することに無理があるという指摘を受け、今年度は当日アンケート形式による調査に切り替えた。

トピックに参加した生徒に記入を依頼し、当日回収した。延べ 1123 名の回答を得た。

アンケートの質問は次の 16 項目である。

A：今日の講座は SGH をはじめとする課題研究のテーマを発見するのに役立った

B：今日の講座は SGH をはじめとする課題研究を進めるのに役立った

C：今日の講座は自分の将来を設計するのに役立った

D：積極的に参加し、発言できた

E：事前準備を十分にできた

F：事前準備が当日に役立った

G：内容が難しすぎて理解できなかった

H：話題に興味がなかった

I：話題提供者に自分の連絡先を渡した

J：話題提供者の連絡先をもらった

K：他の参加者や話題提供者とうまくコミュニケーションできなかった

L：参加して楽しかった

M：また参加したい

N：話題提供者と連絡を取ろうと思う

O：同じ話題に関心を持って研究をする仲間ができた

P：次回は話題提供者として参加したい

選択肢

5. 大変そう思う

4. ややそう思う

3. どちらかというと思わない

2. 全く思わない

1. わからない

内容を精査せずに解答する生徒を減らすために、設問の一部は否定的な質問にしてある。(GHK) これらの設問は肯定的問いに書き換え、5 から 2 までを反転した。その上で、関連する項目を近くに配置して集計したものが次の表である。

	5	4	3	2	1
A: 今日の講座は SGH をはじめとする課題研究のテーマを発見するのに役立った	31%	47%	11%	4%	7%
B: 今日の講座は SGH をはじめとする課題研究を進めるのに役立った	27%	44%	14%	5%	9%
C: 今日の講座は自分の将来を設計するのに役立った	35%	43%	13%	3%	5%
G: 内容の難易度は適切でよく理解できた	51%	33%	14%	2%	1%
H: 話題に興味がなかった	65%	26%	5%	2%	2%
L: 参加して楽しかった	51%	39%	7%	2%	1%
M: また参加したい	45%	35%	10%	4%	6%
E: 事前準備を十分にできた	13%	31%	30%	18%	7%
F: 事前準備が当日に役立った	14%	28%	28%	16%	14%
D: 積極的に参加し、発言できた	12%	25%	32%	25%	6%
K: 他の参加者や話題提供者とうまくコミュニケーションできた	31%	32%	21%	8%	8%
O: 同じ話題に関心を持って研究をする仲間ができた	8%	20%	23%	32%	17%
I: 話題提供者に自分の連絡先を渡した	2%	1%	5%	85%	8%
J: 話題提供者の連絡先をもらった	6%	3%	4%	79%	8%
N: 話題提供者と連絡を取ろうと思う	6%	16%	26%	34%	19%
P: 次回は話題提供者として参加したい	3%	8%	17%	57%	16%

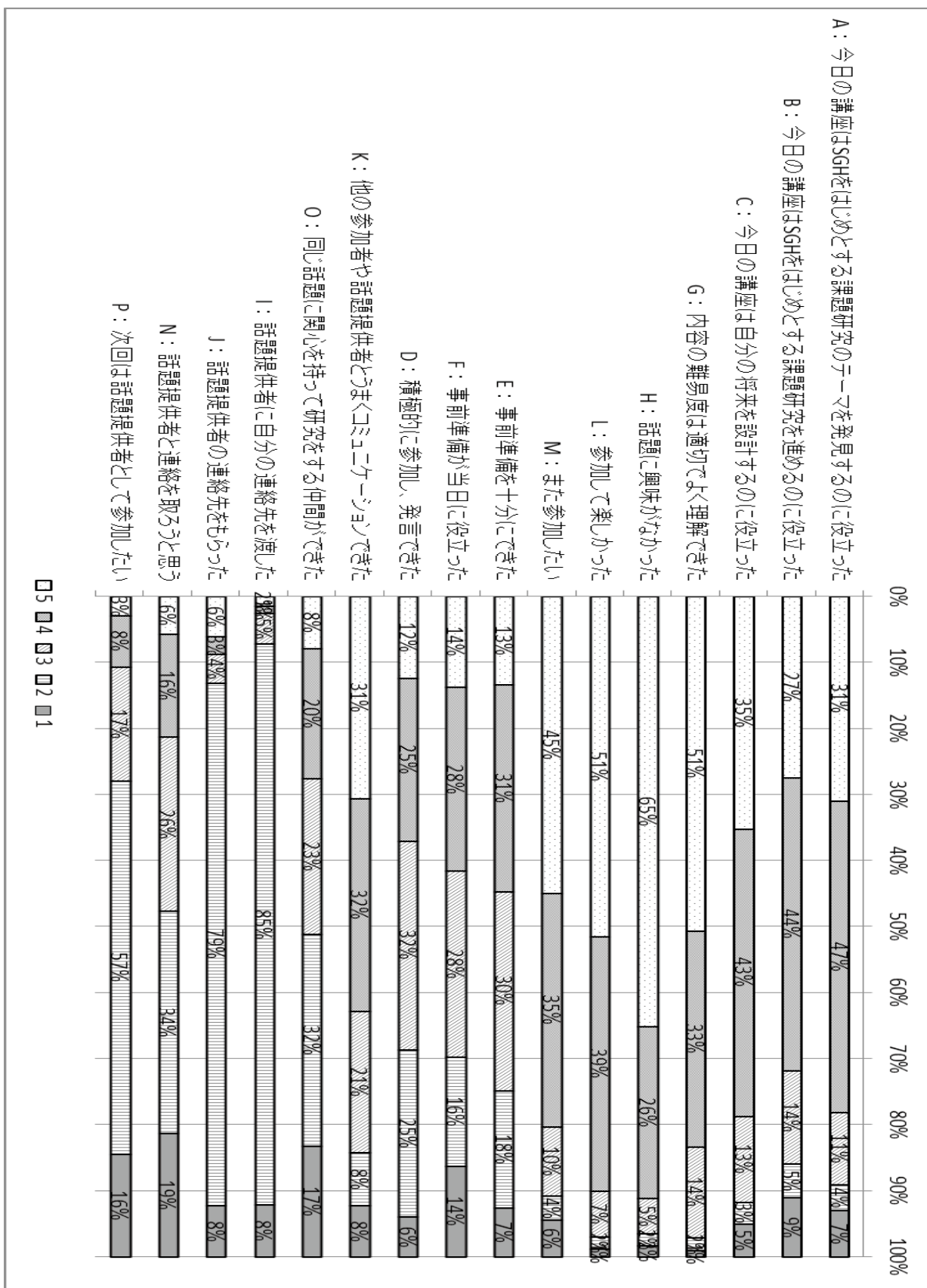
アンケートは「どちらともいえない」という中立評価を含まない代わりに、「わからない」という選択肢がある。表とグラフから、次のようなことが読み取れる。

ABCGHLM の7項目は、「授業」としてのトピックの満足度を聞いたものである。この項目群については、肯定的評価（5と4の和）が非常に多い（最低でも71%）。「授業を受ける」という従来型の受け身の立場では大変満足度が高い。

EF の2項目は、事前に課した課題についての質問である。肯定的評価は4割台で、多いとは言えない。事前に「宿題」をやらなかったため、その効果が感じられなかった生徒がかなりいることが分かる。意識を持って事前課題に取り組ませることが今後求められる。

DKOIJNP の7項目は、主体的参加度を問う設問である。受け身ではなく主体的で話題提供者と対等な参加者として、トピックの運営に寄与できたか、また、将来の自律的な研究に向けて、話題提供者やほかの参加者とつながりを作ることができたかということを知っている。他の参加者とよくコミュニケーションが取れた参加者は半数を超えたものの、発言できた生徒は3割台、仲間をふやせたという参加者は3割に満たない。特に、話題提供者に連絡先を渡したものの、連絡先をもらったものはそれぞれ3パーセント、9パーセントである。自立した研究者としての行動を期待しているのだが、そのハードルは当然高

い。高校生への調査であることを考えると、自分から大学教授等にメールアドレス等を渡す生徒が30人程度いるという結果は、大いに評価されるべきだと思う。言うまでもないことであるが、来年以降この比率を上げることが目標となる。



□5 □4 □3 □2 □1

9. 5 立場や壁を超えるために—Global Week の意義とその将来

本校の基準ルーブリックに示された資質、なかでも創造的学力を伸ばすために、生徒は探究活動に取り組んでいる。従来の学校教育の「調べ学習」であれば、指導する教員が用意した範囲の学習資源（課題図書等）の中で調査を進めればよかった。教員が指定した資源から抜き出すべき情報には限りがあり、予定された正解が存在した。しかし、正解のないグローバル課題の取り組む生徒は、探究者、すなわち、研究者として、必要な物的・人的資源を自分で調達する能力が求められる。数百人に上る探究者（生徒）を抱える順天高校が、自校の教職員だけで研究の資源を調達するのは不可能だからである。

本来は、自立した研究者として、生徒が必要な資源情報を持つ学校外の機関にアクセスして探究を進めるべきものであるし、それを実行している生徒もいる。しかし、生徒にとって、学校は閉鎖された世界であり、外の世界にアクセスを求めるのには困難が伴う。

Global Week は、この壁を超えるための道具として開発された。

設定した目的と、その達成状況

Global Week ガイドブックの冒頭には、Global Week の「目的」が3つ記されている。

1. 探究活動の情報源として
 2. 話題提供者と参加者が対等な立場で情報交換をする場として
 3. 生涯にわたる探究活動のパートナーづくりの場として
- まず、ガイドブックの記述を転載する。

A 目的：

1. この行事は文部科学省のSGH委託金を利用して実施しています。SGHをはじめとする課題研究にぜひ役立ててください。

課題研究のテーマがまだ決まっていない人は、Global Week のトピックをテーマとすることができます。トピックをそのままテーマにしないとしても、話題提供者にテーマの選び方について助言を求めてみましょう。

テーマが決まっても、研究の進め方が分からない人は、各分野の専門家が開発した研究手法をこの機会に身に付けましょう。

ある程度研究を進めたものの、適切な研究かどうか自信のない人は、ぜひこの機会に研究の経験が豊富な話題提供者に助言を求めてみましょう。

2. 普段の授業では皆さんは教わる人、先生は教える人、という役割分担が固定されてきました。この行事では、参加する人は話題提供者と対等な立場であるというのが原則です。もちろん話題提供者から教わることは多いでしょうが、一つでもいいので自分が事前学習で準備したことなどをもとに発言して話題提供者に聞いてもらう機会を作りましょう。話題提供者には、本校生徒や大学生もいます。話題提供者があなたたちからも学べるように、頑張って発信してください。

3. Global Week は人と人のつながりを作る場です。同じ話題に興味を持った人たちが集まります。お互いに連絡先を交換して、この行事の後も一緒に同じ話題を考えるきっかけにしてください。その話題が、あなたの進学先を決める理由になるかもしれません。課題を持ち、探究を続けることは、人生を豊かにします。話題提供者はこのトピックを皆さんと共有したくて順天に来てくださっています。ここでの出

会いが、一生続く関係の始まりになるかもしれませんよ。

1. では探究のための情報源として Global Week を位置付けている。

学校の外部から 50 組以上の話題提供者を招くことによって、自校の教職員だけでは不可能な多様な情報を提供することができる。少数の話題提供者が大人数の聴衆を相手にする場合、とかく情報が一方通行になりがちである。聴衆は受け身で刺激が少ない。50 余りのトピックを用意する理由は、少人数の交流機会を増やすためである。2017 年度も、1 トピックの最大参加者数を 50 名以内に抑えることができた。

2. では探究者として、主体的で対等な情報交換を呼びかけている。

生徒は、学校教育で情報の受け取り手という立場に固定され続けているため、双方向の情報のやり取りに抵抗が強い。それは、話題提供者（＝先生）は「教える人」で、参加生徒は「教わる人」という固定観念が強いためだ。その役割を流動化するために「立場を超えて」というスローガンを用意した。この流動化が、主体的学びを広げるためにぜひ必要である。

流動化を促進するために取り入れたことが二つある。一つ目は「事前課題」である。模擬授業や講演会の場合、受け身が当然と思う聴衆は、当日まで、あるいは、話者が話し始めるまで、話題について無関心である。会場に到着する前に話題に関心を持たせるために課題を用意した。単発の出張講義等では、講義開始前に担当教員がコンピュータ教室などで、事前にネット検索をさせたりするが、大量の話題が提供される Global Week では、あらかじめ課題を出題しておく形式にした。話題提供者には「高校生が 2 時間程度でこなせる量の事前課題」をお願いした。Global Week 期間中の 5 日間は通常の 50 分授業を 40 分 6 限に短縮した。短縮された時間は 10 分×6 時限×5 日＝300 分と、授業カットされた 7 時限目 2 コマ×50 分で合計約 400 分である。生徒が最低要求される負担はトピック一コマあたり、参加時間 90 分と事前課題に要する 120 分を加えて 210 分である。必修生徒は二コマ以上の選択を求められるので、420 分の負担になる。授業が削減されている寮とおおむね釣り合うように設計した。事前課題で調査した知見をもとに、参加者が少しでも双方向の取り組みができるようになることを期待した。

二つ目は話題提供者の多様化である。話題提供者が大学教授や権威ある研究者ばかりであると、「教える」話題提供者と「教わる」参加者の立場が固定されやすい。そこで、話題提供者の中に、大学生グループや、本校の卒業生、そして、意欲ある本校の在學生を混ぜることを試みた。Global Week 初年度の 2016 年は大学生の話題提供はあったものの、卒業生や在學生の話題提供者は確保できなかった。本年度は本校現役生徒 3 名（トピックコード 110, 309, 406）と、卒業生のグループ一つ（トピックコード 509）が、それぞれトピックを主催した。仲間内から話題提供者が出現することで、話題提供者とその他の参加者の間には境目がないのだということを実感してもらうことがねらいである。

前節のアンケート集計結果を見ると、ねらいはまだ十分には達成されていないことが分かる。まず、事前課題の有用性に同意する参加者は半数以下であった（項目 E, F）。事前課題＝宿題という観念が、事前課題の魅力を奪っているのが現状である。また、トピック中に話題提供者や他の参加者と良好なコミュニケーションが取れたものは 6 割を超えたものの（K）、双方向の情報交換ができたものは 3 割台であった（D）。

3. では自立した研究者としてのコネクション作りを呼びかけている。

探究への支援は定まった時間（たとえば Global Week のトピック開催時）に得られれば良いものではなく、探究に行き詰るなど支援が必要な時に随時求められるものでなくてはならない。そのためには、同じ話題を探求する相談相手が確保できることが望ましい。文頭で記したように、自立した研究者なら

ば自分でネット等を検索して相談相手を探し、連絡を入れて相談に乗ってもらうのが当然である。そのハードルを少しでも下げる機会として Global Week をとらえてもらいたい。この機会がありがたいと感じるためには、生徒が自分で研究活動を始め、少なくとも 1 回は壁に当たって苦しんでいることが必要である。自分の連絡先を渡した 3 パーセントの生徒はすでに研究の楽しみと苦しみを体験していると考えられる。3 パーセントという割合はいかにも少ないが、中等教育の現状を考えると決して過小評価すべきものではない。回を重ね、多様な話題提供者を迎えるなど、刺激を繰り返す中で徐々に上昇させたい。

2017 年 8 月に落成した新施設「理軒館」には、ICT 環境を完備した PBL ルーム、LABO およびラーニングコモンズがあり、Global Week のトピック会場および話題提供者ラウンジとして活用した。教室の境目をガラス張りで透明にした壁のない新しい環境は「立場を超える」雰囲気、物理的に作り出す効果があり、参加者の積極性を引き出したと考えられる。

より立場を超えるために解決すべき課題と方策

話題提供者側の問題

生徒が自立した研究者として話題提供者と対等に情報交換をするということは、とてつもなく高い達成目標である。捉え方によっては高校生にはそもそも無理な要求である。高校生の本分は、研究することではなくて、学ぶことだという見方はいまだ一般的である。しかし時代は、知識を学ぶことから、自ら学び続ける主体的な態度を求めように変化しつつある。

理想の世界では、生徒が自発的に探究を進めていて、話題提供者に対して、生徒が実力で対等性を認めさせてしまうべきである。当然ながら、本校でこれを達成できる生徒は、いたとしてもごく少数である。自然のままでは、話題提供者が教える人、生徒は教わる人、という役割分担が自動的に出来上がってしまう。この状態を打破するためには、生徒への意識づけももちろん重要であるが、話題提供者にも目的を理解し協力していただくことが必要である。

直接お会いして、話題提供を依頼する場合や、メールで提供者ご本人に依頼をする場合には、趣旨を説明している。たいていの場合、趣旨には大いに賛同していただける。しかしながら、Global Week はまだ生まれたばかりで実績がなく、話題提供者の質および量と多様性を確保するために、高大連携の枠組みを利用した。進学説明会等の高大接続関連の行事の際に、募集担当者から話題提供者を紹介していただくことも多かった。

多くの大学では、大学での学びの周知のため、高校で模擬授業を展開している実態があり、その一環として Global Week の話題提供者を派遣してもらった。その場合、派遣された話題提供者に、Global Week の趣旨が十分伝わらず、通常の模擬授業や講演会だと誤解して、ほぼ 90 分間一方的に話し続ける例があった。また、多数のトピックを同時展開し、生徒が主体的に話題を選んでいく仕組み上、参加者が非常に少数になる例があり、派遣された話題提供者にとってそれが不都合とを感じる場合もあった。このような不整合は、派遣側が独自の理念に基づいた派遣システムを持っており、Global Week 側が、そのシステムを利用した場合に多く見受けられた。

来年度は、「Global Week 話題提供者ガイドブック」を作成し、話題提供を申し出られた方々にあらかじめ送付しようと考えている。そのことにより、本校の趣旨を十分理解していただいたうえで、お引き受けいただくこととしたい。2 年を過ぎて、トピックの多様性と数がある程度確保できるめどがついたことを受けての変更である。

高校同士の壁の打破

高等学校は、大学や実社会に対して閉ざされがちなのであるが、それと同じように、あるいはそれにもまして、ほかの高等学校に対して閉鎖されている。クラブ活動等の交流はあるものの、特に近隣の私立学校等は、募集上の競合校という可能性もあり、探究活動や教科活動の様な分野での交流は稀である。これらは主に、学校組織上の都合であるが、生徒の世界観に大きな影響を与えている。他校の生徒と共同で研究するという考えは、生徒の意識に浮かびにくい。SSH や SGH の発表会は生徒の世界を広げるために大きな力があるが、それらに参加するのは学校代表という立場の生徒に限られるので、波及効果には限界がある。一般の生徒が、他校との壁が取り払われたのだと実感する機会が必要である。

また、SGH 指定校は、国家予算を使って研究開発を行っているが、その目的は、単に指定校の教育の質を向上させるのでは全く不十分で、他校への波及効果がなくてはならない。普及活動は、ホームページでの発信や、教員研修会での事例報告などが一般的で、本校でも積極的に取り組んできたものではあるが、普及のチャンネルとして十分機能しているとは言い難い。

Global Week は本校にとどまらず、どの高校でも実施可能な行事である。実施の目的が誤解（大学や企業に講演や出張授業を依頼する行事と誤解）されやすいものでもあるが、正しく活用すれば、主体的な学びへの変化の突破口になりうる。実際、昨年度の SGH 活動報告会において、Global Week の紹介をしたところ、出席されていた私立聖徳学園高校（東京都・武蔵野市）が、本年度 Global Day という名前で類似の行事を実施した。

Global Week を同時に複数の高校で実施することは、また更に違った意味での効果がある。同じトピックに別の高校の生徒と一緒に参加していることは、高校の壁が取り払われたという実感を生徒に与え、学校を超えた生徒同士のつながりを作る契機になりうる。異なる高校に通う、同じテーマを持った研究者が、共同研究をしたり、他校の教員や大学教員にアプローチしたりといった、活動のさらなる広がりが期待できる。今年度の普及活動の効果で、Global Week の同時開催に関心を持つ高校が出てきた。私立郁文館グローバル高校（東京都・文京区）は、来年度の Global Week の際に、生徒を順天高校に通わせる方向で調整中であり、私立聖学院高校（東京都・北区）も、共催に向けて調整を始めることで合意している。

Global Week は、高校生、大学生、大学院生、社会人、研究者、教員といった立場を超えて、共通の話題を探求する仲間を作る装置である。同時に、高校と大学、高校と隣の高校、高校と地域の壁を打破して、つながりを作る装置でもある。より開かれた主体的な学びの場を用意するために、また来年度取り組みを続ける予定である。

10. 1 SGH 海外研修と課題研究報告書—ねらい、実践、検証と改善策

本校では、法人の海外自由渡航が解禁となった1964年から生徒の海外派遣を始め、1987年より海外修学旅行を実施している。海外修学旅行は高等部2年夏季休業中の必修選択制で、複数の行先から希望と選考で決定している。行先の複数化に伴い、従来学年すべての生徒が親睦を深めることを目的としていた修学旅行は、行先ごとに独自の目的を持つ研修旅行へと変質していった。2015年に修学旅行という名称を研修旅行と改め、目的を持った旅行であることをより明確にした。

2014年のSGH指定時点では行先は6か所であった。6か所のうちの2か所は人数制限がなく、従来の修学旅行の色合いを残したものであった。北海道は、修学旅行積立金の範囲内で追加負担がないことを念頭に設計した旅行で、オーストラリア・シドニーは短期で比較的負担の低い観光とファームステイを中心とした旅行であった。その他の4か所はそれぞれ独自の目的を持っていた。ニュージーランド・クライストチャーチ周辺は、農村部の学校に3週間にわたり滞在し授業に参加することで、英語でのコミュニケーション能力を高め、現地の学校文化を吸収することを目的としていた。カナダ・ヴィクトリア市の旅行は現地高校SMUSが主催するサマーキャンプの企画に参加し、SMUSの卒業生がヘルプに入る昼間の授業とホームステイで語学研修するものであった。タイのチェンマイ・チェンライ・バンコク等を巡る旅行は、タイの少数民族山岳民族、社会的弱者(エイズ感染者、ストリートチルドレン等)との交流と王宮内にあるエリート校(Chitralada)における交流とホームステイを通じて中進国の社会階層の両極端を知るものであった。オーストラリア・ブリスベンの旅行は理系の先進的授業をする高校に滞在し授業に参加するとともに、周辺の大学や州立研究所で犯罪科学や分子生物学の実験研修を英語だけで行うものであった。

2014年時点で、SGHの対象生徒は、英語選抜類型を中心とする40名に限られていたので、SGH課題研究のフィールドを英語が活用できるフィリピンに定めた。2015年入学者では英語選抜類型のほか、特選選抜類型サイエンスクラスが加わり、科学研究をオンラインで普及する活動をSGH活動として付け加えた。2016年入学者から、全生徒がSGH対象になることから、このままでは研究のフィールドを海外にとった場合、実地踏査に出かけられる生徒がごく少数になることが懸念された。一方、2016年時点で研修旅行先としてただ一つ残っていた国内の行先が、交通費の高騰で積立金で賄えないことが確実になったことから、台湾に変更することとし、研修旅行の行先はすべて国外のアジア太平洋地域となった。

そこで、2016年入学生から、従来の研修旅行を、SGH課題研究のフィールドワークと位置付けることですべての生徒がフィールドワークを経験することとし、学年全員に対して、総合的学習の時間を用いて研修を行ってきた。生徒は行き先とともに研究課題を設定し、1年次と2年次1学期に文献検索を含む事前調査に取り組んだ。仮説、リサーチクエスチョン作り、調査手法、検証過程などのガイドラインとしてルーブリック形式の報告書式を作成し、生徒はそれを利用して事前、現地、事後の3回に分けて報告書を作成した。3篇の報告書は課題研究のポートフォリオとして機能し、後半の部分が課題研究の成果として提示できるものになることをねらいとした。それに伴い、研修旅行という名をSGH海外研修に変更した。

以下は学年全員の課題研究に際して策定した書式に関して、その狙いと実施方法、結果の検証と改善についての報告である。

①仕組み作り

まず、報告書にどのような形式を採用すれば、生徒が自ら課題を発見し、それを常に意識しながら研修に取り組めるかを考えた。その結果としてPDCAサイクルをモデルとして採用することとした。

具体的に記すと、事前に日本において現地における課題をリサーチし研究することで、自ら仮説を立て

ること（Plan）に始まる。そして現地において調査を実際に行い、その仮説を検証する（Do）。その後、帰国してから仮説検証の過程を振り返り、そこから得られた考察をまとめる（Check）。残念ながら海外研修の性格上、同学年で回すことのできるサイクルはPDCまでだが、次学年が海外研修で前学年の調査結果（報告書）をふまえて調査する（Action）までを含めて1サイクルとして構想した。これらをふまえて作成したのが海外研修「報告書フォーム」（※資料1）である。このフォームは三つのパートで構成してある。「事前研究」「現地研究」「事後研究」である。これらは順に先述した「Plan」「Do」「Check」に相当する。

つぎに、これらの3つのパートをいかにして充実させるかを考えた。つまり、各パートでどのようなことを中心に研究し、その結果をいかにして報告書に反映させるかを生徒に理解させる仕組みを考案する必要がある。本校では、ルーブリック評価を活用することとした。ルーブリックを用いた理由は次の2点である。1点目は、ルーブリックは（教員等の指導者に向けての）評価指針であると同時に、（生徒に向けての）研究指針ともなる性格をもったものであることだ。つまり、生徒はルーブリックを研究指針と捉え、高い評価を受けるために研究の方向性をより具体化し、現地でどのように研究すべきか、研究の達成度目標をどの程度に設定すべきかを考えることができる。そして、それらは教員が指導・評価を行う際の評価指針ともなるため、共通理解のもとに報告書作成指導が行いやすくなると考えた。2つ目の理由はルーブリックが評価文によって構成された評価法である点にある。文章を考えることの苦手な生徒にとって、一から報告書を書き上げるのはハードルが高い。しかし、ルーブリックには評価文があるため、その評価文を自分の研究の内容にあわせて具体化することや、評価文の評価が高くなるように文章化するという方向性が与えられることによって報告書の記事を書き上げやすくする効果が期待できる。これらの目的を達成するために作ったルーブリックが「海外研修ルーブリック」（※資料2）である。また、上記の意図を生徒に伝えるために用意したのが「ルーブリック活用の仕方」（※資料3-a）である。

学年全員の報告書を管理する便宜を考え、DropBox を利用した出題および提出とした。報告書書式は順天高校のウェブサイトの中からダウンロードできるようにした。また、生徒は共通のアカウントを使ってDropBox に接続し、報告書をアップロードする。「海外研修事前報告書提出ガイド」（※資料3-b）

②実施

以下は①を実際に実施した時期と方法である。

1 平成29年5月24日 事前研究ガイダンス

「報告書フォーム」（※資料1）、「研修旅行ルーブリック」（※資料2）、「ルーブリック活用の仕方」（※資料3-a）、「海外研修事前報告書提出ガイド」（※資料3-b）を用いたガイダンスを行う。内容はルーブリックの意義とルーブリックを用いた文章化の方法を具体例をあげて説明した。事前研究報告書の提出は6月3日に設定。

2 平成29年7月18日 事前研究自己評価

「海外研修事前研修報告書の自己評価について」（※資料4）を用いた事前研究の自己評価を行う。結果は「事前研修自己評価結果」（※資料5）に記載。

3 平成29年度 各研修旅行現地調査実施

- ・台湾 7月25日～29日
- ・タイ 7月25日～8月8日

- ・カナダ 7月25日～8月11日
- ・ニュージーランド 8月3日～8月22日
- ・オーストラリア（シドニー）8月18日～8月24日
- ・オーストラリア（ブリスベン）7月22日～8月7日

4 平成29年10月26日 現地研究・事後研究ガイダンス

「海外研修現地調査および事後研究報告書の提出について」（※資料6）を用いた提出ガイダンスを行う。現地・事後研究報告書の提出は11月25日に設定。

5 平成29年12月15日 現地研究自己評価

「海外研修旅行：現地調査の達成度（自己評価）」（※資料7）を用いた現地調査の自己評価を行う。結果は「現地研究自己評価結果」（※資料8）に記載。

6 平成29年11月25日 事後研究評価

「研修旅行ルーブリック」（※資料2）を用いた教員による生徒報告書評価を行う予定であった。後述する問題が生じたため、次の活動を追加した。

7 平成30年2月17日 研修報告書加筆ガイダンス

「海外研修報告書の加筆期間の設定について」（※資料9）を用いたガイダンスを行う。内容は4の現地研究・事後研究において説明しきれなかったルーブリック評価の活用について具体的な例を用いて説明した。詳細は次の③でふれることとする。

③ 実施の中で生じた反省事項

【研修旅行以前の活動1・2について】

事前研究への自己評価をもとに考えると、85%以上の生徒が各項目で評価3以上の評価を自らに与えており、事前研究への取り組みは概ね良好であったと捉えている。これは「ルーブリック活用の仕方」（※資料3）を提示できたことが大きく関係しているのではないかと考える。この資料ではCiNiiより実際の研究テーマを提示し、それぞれがルーブリックに照らし合わせるとどのような評価となるかを例示した。これにより、生徒はより具体的に個人研究テーマを設定することができ、調査方法まで考えることができたのではないかと考えられる。※資料10「台湾研修報告書・事前研究」を参照のこと。

【研修旅行以降の活動4・5・6について】

まず、現地調査への自己評価をもとに考えると、こちらも85%以上の生徒が各項目で評価3以上の評価を自らに与えており、現地調査の達成度は高いという結果になった。しかしながら、6において教員が生徒から提出された報告書を評価しようとした際に、自己評価とはほど遠い内容の報告書が提出されているという問題が発見された。具体的には「海外研修報告書の加筆期間の設定について」（※資料9）の加筆前報告書のような内容の報告書が多く見られたのである。まず、この問題について考えるために、以下はこの生徒の自己評価と報告書内容を比較しながら、両者の乖離を各項目において確認していきたい。

〈E 調査における目的の達成度〉

自己評価5：「設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それも探究することができた」
報告書内容：インタビュー形式で行った質問項目は記述されているが、その結果となるデータがまった

く記載されておらず、どのように目的が十分に達成されたかがわからない状態である。

〈F 調査における手法の達成度〉

自己評価3：「目的の達成のために行った調査方法により必要な検証結果を得ることができたが、まだ調査の余地が残されている」

報告書内容：調査がどのような対象に、どのような方法で、どのような意図のもと行ったものなのかが明記されておらず、調査がどのように行われたのかが不明な状態である。また、どのように調査の余地が残されているかについても言及されていない。

〈G 調査を通した仮説の検証〉

自己評価5：「仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができ、加えて新たな発見を得ることに成功した。」

報告書内容：「どのように仮説を検証して、どの程度の裏付けを得たか」が示されていない状態にあるため、どのように仮説が裏付けられたのかが不明な状態である。

以上が自己評価と実際の報告書内容との乖離である。

では、なぜこのような問題が生じたのか。

この問題を検証するために、まず内容がともなわない不当な自己評価が行われた可能性について確かめた。実際に当該生徒に実際に現地でどのような調査を行い、どのような結果を得られたのかを聴取した。その結果として実際に現地ではしっかりと調査を行い、結果も得られていたことが分かった。

次に、なぜそれらの具体的な調査や結果およびデータを書かなかったのかを聴取したところ、第一の原因として「研修旅行ルーブリック」(※資料2)の生徒認識に問題があること(活用方法の周知徹底ができなかったこと)、第二の原因として「報告書フォーム」(※資料1)に形式上の問題があることがわかった。この二点について以下に詳しく記していきたい。

【ルーブリックの生徒認識の問題について】

繰り返しにはなるが「海外研修報告書の加筆期間の設定について」(※資料9)の中にある加筆前報告書を見ると調査過程や調査結果が書かれておらず、その達成度のみが書かれている。これはルーブリックを単なる達成度調査として認識しているということである。本来、「ルーブリック活用の仕方」(※資料3)において触れているようにルーブリックとは単なる達成度調査ではなく、①到達指針として用いるものである。つまり、ルーブリックの「5」の評価文を到達指針として、その評価を得るためには必要な内容を報告書に記載し、内容の充実を図るために活用されるべきものであった。しかしながら、我々は日常的にアンケート調査や達成度調査を受ける機会が多くあり、生徒もその形式に慣れている。そのため、ルーブリックを到達指針と捉えるのではなく、アンケート調査に答えるのにも似た感覚で利用してしまっている可能性がある。同生徒にルーブリックの意義を説明しなおし、再度提出された報告書が(※資料9)における加筆後報告書である。この報告書において加筆前には不足していた調査方法やデータが記載され、より詳細な報告書に書き直されている。よって、ルーブリックの活用についてより詳細かつ丁寧な指導が必要となることがわかった。

【報告書フォームの形式上の問題について】

上記の問題をふまえた上で「報告書フォーム」(※資料1)を見返してみると、左側にある項目ラベルが簡略であり、その項目に何を書くべきかがわかりにくい状態であることがわかる。もちろん、各項目ラ

ベルはルーブリックに対応させて作成しており、ルーブリックの評価文に到達すべく内容を書くことを意図して作っている。そのため、各項目ラベルは単なるラベルとして簡略化したわけであるが、生徒が上記のような形でルーブリックを認識しているとすれば、各項目ラベルをラベルと認識せずに指示文と解釈した恐れがある。そこで各項目ラベルの指示する達成度のみを記述する例が発生したと考えられる。

上記の2点が原因だとすれば「現地調査」および「事後研究」のみならず、自己評価結果の高かった「事前研究」においても同様のことが起こっているかと危惧したが、事前研究においてはこのような問題は起こっていない。その理由を考えるに、1つには「ルーブリック活用の仕方」（※資料3-a）において事前研究についてはサンプルを用いながら説明していたことにより、生徒にとって理解がしやすかったことが挙げられる。また、2つ目の理由としては事前研究における「課題設定」という作業は目的がはっきりしており、「現地調査」「事後研究」に比べて難度の低い課題であったため、充実した記述になりやすかったのだと考えられる。

④ ③で得た反省事項を改善するための今後の方策

実施の中で得た反省事項をふまえて今後は次のことを実施したいと考えている。まず、ルーブリックの活用方法について生徒により詳細かつ具体的に説明し、ルーブリックの意義を正しく認識する機会を設ける。その際、報告書フォームのどの項目にどのような内容を書くべきであるのかを明示するために今年度の報告書の中からサンプルとなる報告書を選定し、それを生徒に提示する。それによってどのようにルーブリックが報告書記事の作成に関連しているかが可視化されるとともに、どの項目にどのような内容を書くべきかが生徒に理解されやすくなると考えている。

⑤ 最後に

今回はルーブリックを用いた海外研修報告書の作成を試みた。これからの教育における諸活動においてますますルーブリックの活用の幅は広がっていくだろうことが予測される。だが、現在の段階では、ルーブリックの正しい活用についてはまだまだ認識されていないという実情があることが分かった。ルーブリックを効果的に活用するためには、まずは正しい認識を周知し、効果的な活用ができるようにする必要がある。これからルーブリックを活用される場合にはこの点について注意されたい。

資料 1 海外研修・課題研究報告書

海外研修・課題研究報告書【事前研究】H29・6・3提出	
研究者	高等部二学年 組 番 氏名
研究先名および対象	
研究期間	
A 探究テーマ	
B 探究目的	
C テーマに対する現時点での見通し（仮説）	
D 調査方法	

※フォントは明朝体・10.5point を使用すること。また、分量に応じて枠の幅は自由に調節可です。

※報告書フォームはすべて順天高校 HP からダウンロードできます。

HP 左下【SGH トップページ】→【実績・予定タブ】→【2017年4月6日予定 高2 海外研修・課題研究報告書説明会】→【報告書フォームはこちら】

アドレス：https://www.junten.ed.jp/contents/sgh/sgh_schedule/

海外研修・課題研究報告書【現地研究】H29・11・25 提出

研究者	高等部二学年 組 番 氏名
研究先名および対象	
研究期間	
E 現地調査における目的の達成度	
F 現地調査における手法の的確さ	
G 現地調査を通じた仮説の検証	

※フォントは明朝体・10.5point を使用すること。また、分量に応じて枠の幅は自由に調節可です。

研究者	高等部二学年 組 番 氏名
研究先名および対象	
研究期間	
HおよびI 考察	
J 先行研究、参考文献および資料	
アブストラクト（報告書概要）	120字以内で記述すること。

※フォントは明朝体・10.5point を使用すること。また、分量に応じて枠の幅は自由に調節可です。

資料2 海外研修・課題研究報告書作成のためのルーブリック

事前研究	A 研究テーマ	5	研究テーマの主題が独創的であり、研究の方向性も具体的にわかるように設定されている。
		4	研究テーマの主題が明確であり、研究の方向性が具体的にわかるように設定されている。
		3	研究テーマの主題は理解でき、研究の方向性がわかるように設定されている。
		2	研究テーマの主題は理解できるが、研究の方向性が具体的には分かりかねる。
		1	研究テーマの主題が曖昧であり、研究の方向性が具体的にわからない。
	B 課題の設定	5	テーマを探究する意義が具体的に打ち出されており、かつ探求する上で考察すべき項目が明確に示されている。
		4	テーマを探究する意義が読み取れ、かつ研究する上で考察すべき項目が示されている。
		3	テーマを探究する意義が設定できている。それによって研究にどう取り組むかの方向性がわかる。
		2	テーマを探究する意義がやや不明確であり、研究の意図がわかりにくい。
		1	テーマを探究する意義が不明であり、研究する意図が不明である。
	C テーマに対する 仮説(現時点での見 通し)	5	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを複数打ち出すことに成功している。
		4	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを一つ打ち出すことができている。
		3	現時点において見通しが立てられており、検証すべきポイントを見いだすことができる。
		2	現時点においては大まかにしか検証結果について見通しが立てられていない。
		1	現時点ではまったく検証の結果について見通しが立てられていない。
	D 調査方法	5	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が複数考案されており、かつ現地での実現が確実な手法が選択されている。
		4	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が考案されており、かつ調査する文献・資料が明確に示されている。
		3	現時点での見通し(仮説)に基づき、実現可能な調査方法が選択されている。
		2	現時点の見通し(仮説)から調査方法が考案されているが、現地での実現性が低い、または調査のしようなない手法が選択されている。
		1	現時点での見通し(仮説)とまったく関連が見いだせず、満足な調査結果が得られる見込みもない。

調査	E 調査における目的の達成度	5	設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それも探求することができた。
		4	設定した目的をほぼ達成した上で、新たな課題を発見することができた。
		3	設定した目的をほぼ達成することができた。
		2	設定した目的をあまり達成することができなかった。
		1	設定した目的をまったく達成することができず、探究に進展が見られなかった。
	F 調査における手法の達成度	5	目的達成のために行った調査方法が的確で十分な検証結果を得ることができた。また、試行錯誤の過程で新たな手法を提案、実行することができた。
		4	目的の達成のために行った調査方法が的確で必要な検証結果を十分に得ることができた。
		3	目的の達成のために行った調査方法により必要な検証結果を得ることができたが、まだ調査の余地が残されている。
		2	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証の成果が予想とは異なったものとなった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
		1	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証を行うことができなかった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
	G 調査を通した仮説の検証	5	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができ、加えて新たな発見を得ることに成功した。
		4	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができた。
		3	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象が得られたが、まだまだ検証の余地がある。
		2	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができなかったため、仮説が検証できなかった。
		1	仮説に基づき調査を行ったが、そもそも仮説の組み方が適切でなかったために検証自体を行うことが不可能だった。
事後研究	H 考察の達成度(根拠、論理的側面)	5	根拠にもとづきながら論理的に考察されており、正確で説得力のある結論を導くことができている。
		4	根拠にもとづきながらほぼ論理的に考察されており、説得力のある結論を導くことができている。
		3	根拠にもとづきながら論理的に考察されているが、説得力のある結論を導くことができていない。
		2	根拠は示されているがデータや文章の意味を取り違えているなど、根拠としてはそぐわないものが使用されている。よって説得力のある結論を導くことができていない。
		1	根拠が示されず客観性に乏しい。考察も論理的ではなく、情緒的な側面が強い。
	I 考察の達成度(論旨的側面)	5	事前の見通し(仮説)から独創的な考察への進展がうかがえる。また、十分な量の根拠と独自の思索に基づき結論を導いており、説得力がある。
		4	事前の見通し(仮説)から考察の深まりがうかがえるものとなっている。また、思索と根拠に基づきながら結論を導いている。
		3	事前の見通し(仮説)から考察の深まりはあるものの、より一層の深まりが期待される。また、結論もありふれたものに落ち着いている。
		2	事前の見通し(仮説)からの進展があまりない。また、先行研究などの引用が主で自分の意見があまり見られない。
		1	事前の見通し(仮説)からまったく進展がない。また、先行研究などの引用ばかりで自分の意見がまったく見られない。
	J 先行研究、参考文献および資料	5	課題解決に何が必要かを考えた上で複数のツールを用いながら情報を収集しており、またその運用の仕方も的確である。
		4	課題解決に何が必要かを考えた上で情報収集しており、またその運用の仕方も正確である。
		3	情報収集はされているが、やや場当たりので、必要な情報と不必要な情報が混在している。
		2	情報収集はされているが、考察には必要性のないものばかりである。
		1	情報収集がまったくされておらず、根拠に乏しい。

海外研修・課題研究報告書作成のためのルーブリック活用の仕方

【ルーブリックの意義について】

このルーブリックには二つの意味をもたせて作成しました。それは次の①②です。

② 告書の各項目を作成する前の到達指針とする。

② 報告書の各項目を作成した後の評価指針となる。

【ルーブリックの意義①について】

ルーブリックは報告書の各項目を作成する前の到達指針となります。次のような活用の仕方を心がけましょう。以下はA研究テーマを例にルーブリックの事前活用を説明したものです。

A 研究 テ マ	5	研究テーマの主題が独創的であり、研究の方向性も具体的にわかるように設定されている。
	4	研究テーマの主題が明確であり、研究の方向性が具体的にわかるように設定されている。
	3	研究テーマの主題は理解でき、研究の方向性がわかるように設定されている。
	2	研究テーマの主題は理解できるが、研究の方向性が具体的には分かりかねる。
	1	研究テーマの主題が曖昧であり、研究の方向性が具体的にわからない。

例えば、自分でA研究テーマを設定する際に自分自身がどの程度まで設定すれば良いか分からずに次のようなテーマを設定したとします。

例1) 貧困問題について

これは、ルーブリックを活用すると評価は「1」です。研究テーマの主題が曖昧で、具体的にそのテーマで何を追究するのがまったく不明です。では次のように変えてみたらどうでしょう。

例2) タイにおけるストリートチルドレンの貧困問題について

先ほどのテーマに比べて主題の明確性ができましたね。評価は「2」です。これを「3」に変えるためには【研究の方向性】を付加すれば良いことがわかります。

例3) タイのストリートチルドレンの貧困問題はなぜ起こるのか

研究の方向性はストリートチルドレンの貧困問題の【背景について】に絞られました。よって評価は「3」です。ここまですれば合格点！でももっと上の評価を意識してテーマを設定してみましょう。

その際、研究論文検索サイトC i N i iなどを検索することもおすすめです。先行研究について調べると同時に、先輩研究者のテーマの立て方を参考にすることができます。

例4) 北タイのストリートチルドレン支援施設の現状と課題について：NGO アーサー・パッターナー・デック財団「子どもの家」を訪問して (C i N i i : 大條 あこ 桜美林論考. 心理・教育学研究 4, 1-25, 2013-03)

ストリートチルドレン問題の中でも【支援施設のあり方】に焦点を絞り、具体性を増しています。また、【NGO アーサー・パッターナー・デック財団「子どもの家」】は研修旅行で訪れる施設ですので【研修旅行との関連性】もGOODですよね。評価は「4」です。

評価「5」のテーマは【独創性】が求められます。これもC i N i i から探してみましょう。

例5) ベトナムのストリートチルドレン問題から日本の子ども虐待問題へ：市民社会による問題解決の可能性を探る (C i N i i : 吉井 美知子, よしい みちこ, Yoshii Michiko, 沖縄大学人文学部)

(「ベトナム」の事例であることは目をつぶってもらってm(_)_m)「ストリートチルドレン」と「日本のこども虐待問題」を比較して論じようというテーマ設定が【独創性】として認められるポイントです。ただし、このようなテーマを設定するためにはある程度の見通し(仮説)が立っていないと無茶苦茶な(半ばこじつけで論が展開されるような)ものになりがちです。よって先行研究や文献にこの段階である程度当たっていないとこのようなテーマ設定は不可能です。例3)以降のテーマを立てるためには先行研究や文献にあたる事前研究が必須になります。よって自分が研修旅行において訪問する施設や場所についてきちんと調べておきましょう。

また、例5)はストリートチルドレン施設を訪問するタイ修学旅行では【検証の実現】は高いテーマ設定ともなっているので評価は「5」です。

このようにまずルーブリックは【①報告書の各項目を作成する前の到達指針】として活用ができます。ルーブリックの評価「5」が求めている達成度を理解した上で報告書の各項目を考えることによってより精度の高いテーマや目的を設定することができます。また、これは事前研究のみでなく、調査の項目でも現地や日本においてどのような目的意識をもって研究行動をするかの指針ともなりますし、事後研究において完成させるべき考察の達成の指針ともなります。事前に目を通して意義のある研修旅行を計画しましょう。

【ルーブリックの意義②について】

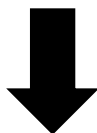
ルーブリックにはもう一つの意義があります。それは「報告書の各項目を作成した後の評価指針となる」というものです。これはさらに二つの種類の評価に大別されるものでi自己評価とii他者評価(指導者)に分けて考えます。今回の研修報告書の書式では事前研究および調査がi自己評価、事後研究がii他者評価(指導者)による評価となっています。

まずはi自己評価での活用方法を見てみましょう。

E 調査における目的の達成	5	設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それを探究することができた。
	4	設定した目的をほぼ達成した上で、新たな課題を発見することができた。
	3	設定した目的をほぼ達成することができた。
	2	設定した目的をあまり達成することができなかった。
	1	設定した目的をまったく達成することができず、研究に進展が見られなかった。

例えば、上記の「E現地研究における目的の達成度」において自己評価として「5」をつけたとしましょう。その場合の報告書の記述はルーブリックをもとに「①どのように設定した目的を十分に達成できたか」「②新たにどのような課題を発見したか」そして「③その新しく発見した課題をどのように探求したか」を具体的に文章化することによって的確な自己評価を書くことができます。

例) 事前研究「B研究目的」: タイにおけるストリートチルドレンの貧困問題について研究する上で、貧困問題の背景にある山岳少数民族を取り巻く諸問題について明らかにする。



ルーブリックをもとに具体的に文章化すると・・・

- ①山岳少数民族は従来、移動型の生活を送り焼き畑農業を主として生計を立てていたが、政府の介入により定住型の生活スタイルをとることを余儀なくされている。しかしながら、学歴や戸籍がないこと、タイ語が話せないことなどが障害となり、職を得ることがなかなか困難な状況にあることが分かった。
- ②また、職を得ることが困難であるために麻薬売買や売春によって生計を立てざるをえず、それがA I D Sの蔓延やそれに伴うA I D S孤児の増加につながっていることを新たに発見した。
- ③A I D S孤児の現状について詳しく知るためにバーンロムサイで代表を務める名取美和さんに質問をした。それによれば、タイでは依然としてA I D S孤児は増加しているとのことである。また、A I D S患者が苦しむのはもちろん病気に感染している事からくる死の恐怖もさることながら、社会からの偏見と差別であるとのことであった。A I D S患者への偏見と差別についても調べる必要があるそうである。

(以上の文章は例として創作したものです。)

次に ii 他者評価 (指導者) での活用方法を見てみましょう。

ii 他者評価 (指導者) により、評価されるのは 事後研究 についてです。

例えば事後研究H考察の達成度 (根拠、論理的側面) のルーブリックは次のようになっています。

H 考察の達成度（根拠、論理的側）	5	根拠にもとづきながら論理的に考察されており、正確で説得力のある結論を導くことができている。
	4	根拠にもとづきながらほぼ論理的に考察されており、説得力のある結論を導くことができている。
	3	根拠にもとづきながら論理的に考察されているが、説得力のある結論を導くことができていない。
	2	根拠は示されているがデータや文章の意味を取り違えているなど、根拠としてはすぐわかないものが使用されている。よって説得力のある結論を導くことができていない。
	1	根拠が示されず客観性に乏しい。考察も論理的ではなく、情緒的な側面が強い。

このルーブリックをもとに指導者は皆さんの考察を評価します。よって皆さんは【ルーブリックの意義①について】で活用したように、できるだけ「5」の評価になるような考察を心がけてください。そのためには「①根拠にもとづくこと」「②論理的であること」「③正確で説得力がある結論を導くこと」が求められます。どのようにしたらこの3点をみたく考察を書けるのでしょうか。

〈①根拠にもとづくこと〉

根拠にもとづいて論じるためには、まずはその根拠となる文献や参考資料の出典を明らかにしなくてはなりません。これはルーブリックの【J 先行研究、参考文献および資料】の項目に相当するものですが、きちんと調べたものはその出典をきちんと記しておきましょう。文献や論文であるならば【著者名・(出版年)・『書名、記事名、論文名』・出版社】を、Webであれば【著者名・ページタイトル・サイト名】・〈URL〉・(参照日)を書きます。また、文中に引用する場合には自分の意見と区別するために必ず「」を付して引用してくださいね。

〈②論理的であること〉〈③正確で説得力がある結論を導くこと〉

論理的に、かつ説得力のある論を導くためには型が必要です。「序論」「本論」「結論」の型にあてはめながら書くのが一般的ですが、今回のレポート形式は「序論」＝「事前研究」、「本論」＝「研究」、「結論」＝「事後研究」になるように構成されています。よって考察部分だけに限って言えば、以下の3つに気をつけて書くことが重要です。

- 【1】事実と意見を区別して書くこと。
- 【2】根拠に支えられた主張を行うこと。
- 【3】主張と主張のつながりに飛躍がないようにすること。

以上が【②報告書の各項目を作成した後の評価指針】としてのルーブリックの活用の仕方です。また、今回のレポートは研究論文を書く際の「序論」「本論」「結論」を意識したワークシートとなっています。論文まで仕上げたい場合には、担当者に相談してください。指導に応じます。

《海外研修事前レポート提出ガイド》

- ① インターネットを起動し、ドロップボックスを開く。
 ※URL (<https://www.dropbox.com/>) を入力するか、Google などで「ドロップボックス」と検索するとよいです。
- ② 下の表にある各コースのアドレスとパスワードを入力し、コース毎にログインする。



(メールアドレスとパスは削除してある)

コース名	New Zealand	Sydney 1-4 組	Sydney 5-7 組	Brisbane	Canada	Thai	Taiwan
メールアドレス							
パス							

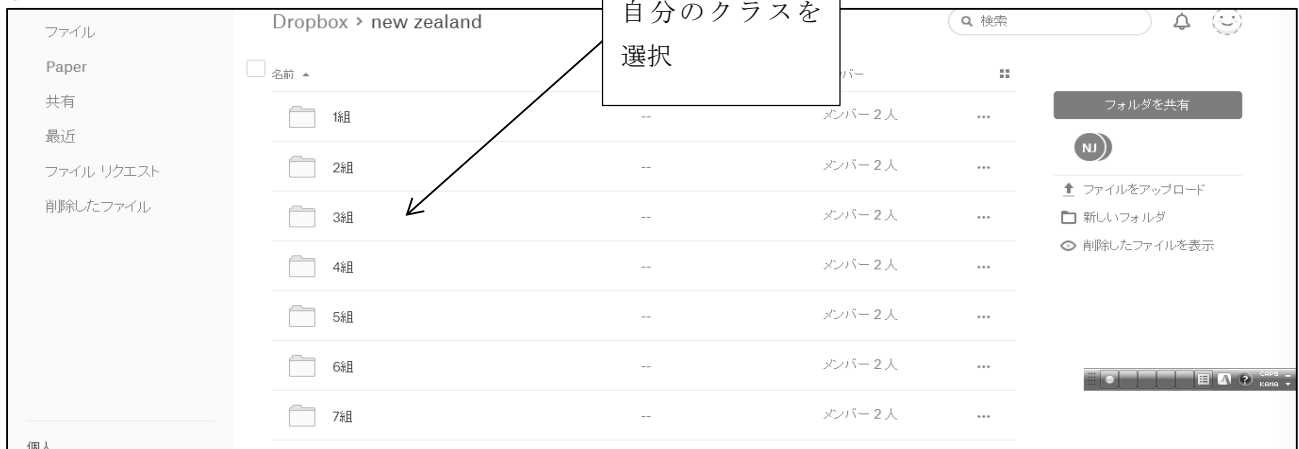
- ③ 共有ファイルを選択する。



④ 自分のコースであるかを確認し、コース名の書かれたフォルダをクリックする。



⑤ 自分のクラスのフォルダを選択する。



⑥ ファイルをドラッグアンドドロップしてアップロードする。(マウスの左クリック)



○ 提出期限 6月3日 23:59 まで

ドロップボックスに保存されたデータの記録が6月4日 00:00 を過ぎた物は期限切れとします。ネットワーク等のトラブルが起こる可能性もあるので、ギリギリに提出するのではなく必ず余裕をもって提出しましょう。なお、**ファイル名にはクラス番号・氏名を必ず書いてください。その際には数字は必ず半角を使用し次のように表記すること。**1組1番 順天太郎の場合にはファイル名を「101 順天太郎」とする。

○ PC 教室を火曜・金曜の 16:10~18:00 の時間で解放しますので、不明点等がある場合はそちらで質問してください。

資料4 海外研修事前研修報告書の自己評価について

①受験番号は学籍番号を記入してください。

選抜 510×0×× 特進 520×0×× (×には自分の組・番号を記入)

②氏名を記入してください。

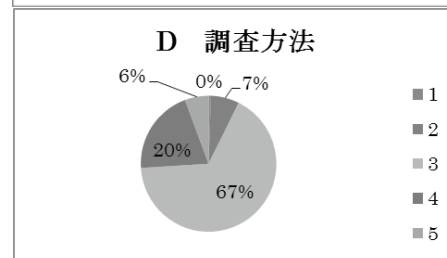
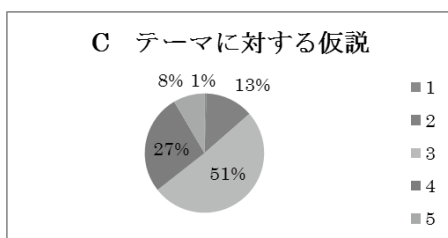
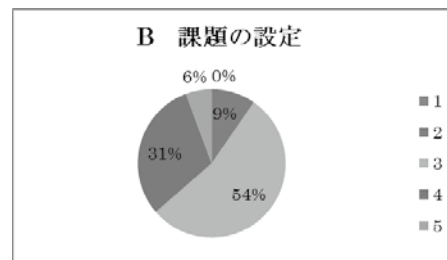
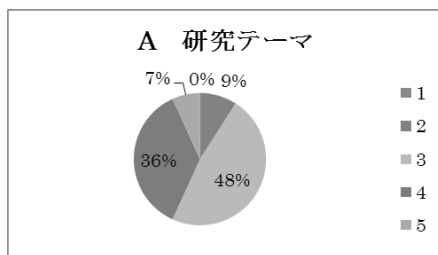
③科目名「海外研修事前報告書自己評価」と記入してください。

④問1=A「研究テーマ」、問2=B「課題の設定」、問3=C「テーマに対する仮説」、問4=D「調査方法」とし、それぞれの項目において自分の事前報告書はどの評価文が適切か判断して自己評価を行ってください。マークする数字はそれぞれ1から5までのいずれかの評価文です。

A 研究テーマ	5	研究テーマの主題が独創的であり、研究の方向性も具体的にわかるように設定されている。
	4	研究テーマの主題が明確であり、研究の方向性が具体的にわかるように設定されている。
	3	研究テーマの主題は理解でき、研究の方向性がわかるように設定されている。
	2	研究テーマの主題は理解できるが、研究の方向性が具体的には分かりかねる。
	1	研究テーマの主題が曖昧であり、研究の方向性が具体的にわからない。
B 課題の設定	5	テーマを探究する意義が具体的に打ち出されており、かつ探求する上で考察すべき項目が明確に示されている。
	4	テーマを探究する意義が読み取れ、かつ研究する上で考察すべき項目が示されている。
	3	テーマを探究する意義が設定できている。それによって研究にどう取り組むかの方向性がわかる。
	2	テーマを探究する意義がやや不明確であり、研究の意図がわかりにくい。
	1	テーマを探究する意義が不明であり、研究する意図が不明である。
C テーマに対する仮説	5	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを複数打ち出すことに成功している。
	4	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを一つ打ち出すことが出来ている。
	3	現時点において見通しが立てられており、検証すべきポイントを見いだすことができる。
	2	現時点においてはだまかにしか検証結果について見通しが立てられていない。
	1	現時点ではまったく検証の結果について見通しが立てられていない。
D 調査方法	5	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が複数考案されており、かつ現地での実現が確実な手法が選択されている。
	4	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が考案されており、かつ調査する文献・資料が明確に示されている。
	3	現時点での見通し(仮説)に基づき、実現可能な調査方法が選択されている。
	2	現時点の見通し(仮説)から調査方法が考案されているが、現地での実現性が低い、または調査のしようのない手法が選択されている。
	1	現時点での見通し(仮説)とまったく関連が見いだせず、満足な調査結果が得られる見込みもない。

資料5 「事前研究自己評価結果」

A 研究テーマ	5	研究テーマの主題が独創的であり、研究の方向性も具体的にわかるように設定されている。
	4	研究テーマの主題が明確であり、研究の方向性が具体的にわかるように設定されている。
	3	研究テーマの主題は理解でき、研究の方向性がわかるように設定されている。
	2	研究テーマの主題は理解できるが、研究の方向性が具体的には分かりかねる。
	1	研究テーマの主題が曖昧であり、研究の方向性が具体的にわからない。
B 課題の設定	5	テーマを探究する意義が具体的に打ち出されており、かつ探求する上で考察すべき項目が明確に示されている。
	4	テーマを探究する意義が読み取れ、かつ研究する上で考察すべき項目が示されている。
	3	テーマを探究する意義が設定できている。それによって研究にどう取り組むかの方向性がわかる。
	2	テーマを探究する意義がやや不明確であり、研究の意図がわかりにくい。
	1	テーマを探究する意義が不明であり、研究する意図が不明である。
C テーマに対する仮説 (現時点での見通し)	5	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを複数打ち出すことに成功している。
	4	現時点において具体的かつ詳細に見通しが立てられており、検証すべきポイントを一つ打ち出すことができている。
	3	現時点において見通しが立てられており、検証すべきポイントを見いだすことができる。
	2	現時点においてはだまかにしか検証結果について見通しが立てられていない。
	1	現時点ではまったく検証の結果について見通しが立てられていない。
D 調査方法	5	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が複数考案されており、かつ現地での実現が確実な手法が選択されている。
	4	現時点での見通し(仮説)に基づき、効果的な調査方法が考案されており、かつ調査する文献・資料が明確に示されている。
	3	現時点での見通し(仮説)に基づき、実現可能な調査方法が選択されている。
	2	現時点の見通し(仮説)から調査方法が考案されているが、現地での実現性が低い、または調査のしようのない手法が選択されている。
	1	現時点での見通し(仮説)とまったく関連が見いだせず、満足な調査結果が得られる見込みもない。



海外研修現地調査および事後研究報告書の提出について

二学期中間試験お疲れ様でした。今回は海外研修の報告書、現地調査および事後報告書の提出についてのお知らせです。4月にお話しさせていただいた通り海外研修の報告書は三種類あります。事前報告書は6/3に提出しましたね。今回は残っている現地調査、事後研究という二種類の報告書を提出することになります。提出方法は事前研究と同様にDROPOBOXに提出します。やり方を忘れてしまった人は添付してあるプリントを参考にしてくださいね。

今回の報告書は現地調査に関しては前回同様に提出後ルーブリックを用いた自己評価を行ってもらう予定です。また、事後研究報告書は教員がルーブリックを用いて評価します。この評価はどのように用いられるかというと、

- ①「総合的な学習の時間」という卒業に必要な単位の認定に用いられます。
- ②調査書「総合的な学習時間」の評価記載項目に評価が反映されます。

よってしっかりとした報告書を提出してください。

しっかりした報告書を作成するためには、ルーブリックの評価項目の「5」の評価文に添うような形で報告書を作ることを心がけてください。また、これからの大学入試（特にAO入試や推薦入試）において、ポートフォリオ（自分の活動実績）を評価する傾向にあります。この海外研修の報告書もその一つとして評価される材料にもなりえます。しっかりと海外研修の体験を振り返って、その意味を考察してみてください。

- 報告書フォームはすべて順天高校HPからダウンロードできます。
HP 左下【SGH トップページ】→【実績・予定タブ】→【2017年4月6日予定 高2 海外研修・課題研究報告書説明会】→【報告書フォームはこちら】
アドレス：https://www.junten.ed.jp/contents/sgh/sgh_schedule/
- 提出期限 11月25日 23:59 まで
ドロップボックスに保存されたデータの記録が11月25日00:00を過ぎた物は期限切れとします。ネットワーク等のトラブルが起こる可能性もあるので、ギリギリに提出するのではなく必ず余裕をもって提出しましょう。なお、ファイル名にはクラス番号・氏名を必ず書いてください。また、今回は現地調査と事後報告書が区別できるようにファイル名に「現地」「事後」を付けてください。その際には数字は必ず半角を使用し次のように表記すること。例えば1組1番順天太郎の場合にはファイル名を「101 順天太郎 現地」「101 順天太郎 事後」とする。

資料 7

【海外研修旅行：現地調査の達成度（自己評価）】

平成 29 年 12 月 15

日（金）

※SGH目標達成シート用アンケートのマークシートを使用します。

【問 23】ループリック E 「調査における目的の達成度」について

あなたが海外研修で行った現地調査の達成度として最も適当な番号を次の 1～5 から選び、その番号をマークしてください。

- 5 設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それも探求することができた。
- 4 設定した目的をほぼ達成した上で、新たな課題を発見することができた。
- 3 設定した目的をほぼ達成することができた。
- 2 設定した目的をあまり達成することができなかった。
- 1 設定した目的をまったく達成することができず、探究に進展が見られなかった。

【問 24】ループリック F 「調査における手法の達成度」について

あなたが海外研修で用いた現地調査の手法の達成度として最も適当な番号を次の 1～5 から選び、その番号をマークしてください。

- 5 目的達成のために行った調査方法が的確で十分な検証結果を得ることができた。また、試行錯誤の過程で新たな手法を提案、実行することができた。
- 4 目的の達成のために行った調査方法が的確に必要な検証結果を十分に得ることができた。
- 3 目的の達成のために行った調査方法により必要な検証結果を得ることができたが、まだ調査の余地が残されている。
- 2 目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証の成果が予想とは異なったものとなった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
- 1 目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証を行うことができなかった。また、適切な手法に切り替えて調査することもしなかった。

【問 25】ループリック G 「G 調査を通した仮説の検証」について

あなたが事前研修で設定した仮説に対して検証を行った結果として最も適当な番号を次の 1～5 から選び、その番号をマークしてください。

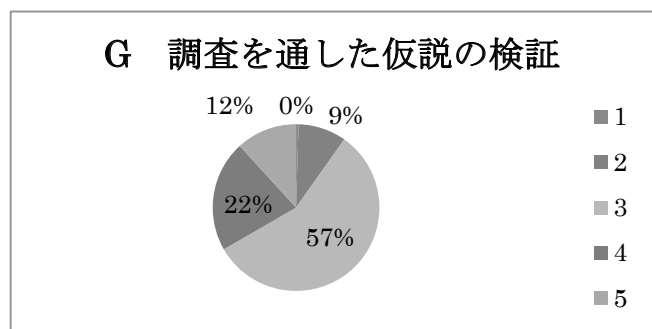
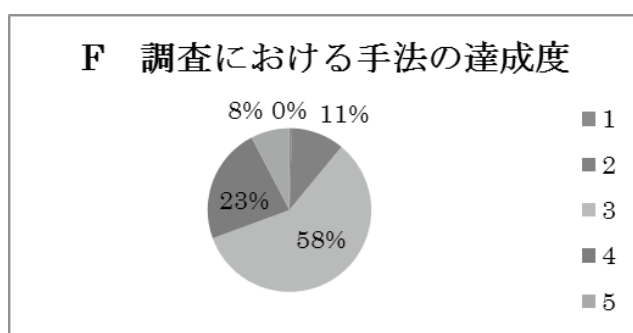
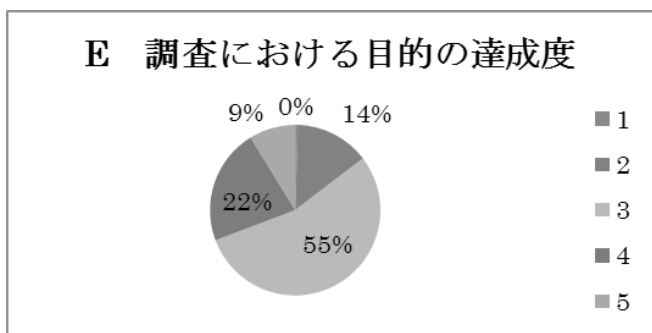
- 5 仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができ、加えて新たな発見を得ることに成功した。
- 4 仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができた。
- 3 仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象が得られたが、まだまだ検証の余地がある。
- 2 仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができなかったため、仮説が検証できなかった。
- 1 仮説に基づき調査を行ったが、そもそも仮説の組み方が適切でなかったために検証自体を行うことが不可能だった。

資料8 「現地調査自己評価結果」

E. 調査における目的の達成度	5	設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それも探求することができた。
	4	設定した目的をほぼ達成した上で、新たな課題を発見することができた。
	3	設定した目的をほぼ達成することができた。
	2	設定した目的をあまり達成することができなかった。
	1	設定した目的をまったく達成することができず、探究に進展が見られなかった。

F. 調査における手法の達成度	5	目的達成のために行った調査方法が的確で十分な検証結果を得ることができた。また、試行錯誤の過程で新たな手法を提案、実行することができた。
	4	目的の達成のために行った調査方法が的確で必要な検証結果を十分に得ることができた。
	3	目的の達成のために行った調査方法により必要な検証結果を得ることができたが、まだ調査の余地が残されている。
	2	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証の成果が予想とは異なったものとなった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
	1	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証を行うことができなかった。また、適切な手法に切り替えて調査することもしなかった。

G. 調査を通じた仮説の検証	5	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができ、加えて新たな発見を得ることに成功した。
	4	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができた。
	3	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象が得られたが、まだまだ検証の余地がある。
	2	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができなかったため、仮説が検証できなかった。
	1	仮説に基づき調査を行ったが、そもそも仮説の組み方が適切でなかったために検証自体を行うことが不可能だった。



資料 9

平成 30 年 2 月 17 日(土)

高校 2 年生徒各位

SGH 海外研修レポート担当 大河原

海外研修レポートの加筆期間の設定について

今回、提出されたレポートを評価するにあたり、つぎのような点に改善の余地がありますので加筆期間を設けます。加筆期間は平成 30 年 2 月 26 日（月）までとします。

【改善項目】

◎達成度のみが書かれており、どのようにそれらが達成されたかが書かれていない。
→それらがどのように達成されたのかを評価者にわかるように詳しく書いてください。

【加筆方法】

- ①D r o p B o xを開く。
- ②下記の ID でログインし、自分のレポートを探す。
- ③自分のレポートファイルをクリックし、Word 編集画面を開き、加筆する。

(メールアドレスとパスは削除してある)

コース名	New Zealand	Sydney 1・4組	Sydney 5・7組	Brisbane	Canada	Thai	Taiwan
メールアドレス							
パス							

★海外研修・課題研究報告書作成のためのルーブリック★

E 調査における目的の達成度	5	設定した目的を十分に達成した上で、新たな課題を発見し、それも探求することができた。
	4	設定した目的をほぼ達成した上で、新たな課題を発見することができた。
	3	設定した目的をほぼ達成することができた。
	2	設定した目的をあまり達成することができなかった。
	1	設定した目的をまったく達成することができず、探究に進展が見られなかった。
F 調査における手法の達成度	5	目的達成のために行った調査方法が的確で十分な検証結果を得ることができた。また、試行錯誤の過程で新たな手法を提案、実行することができた。
	4	目的の達成のために行った調査方法が的確に必要な検証結果を十分に得ることができた。
	3	目的の達成のために行った調査方法により必要な検証結果を得ることができたが、まだ調査の余地が残されている。
	2	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証の成果が予想とは異なったものとなった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
	1	目的達成のための調査方法が適切ではなかったために検証を行うことができなかった。また、適切な手法に切り替えて調査することもできなかった。
G 調査を通じた仮説の検証	5	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができ、加えて新たな発見を得ることに成功した。
	4	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができた。
	3	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象が得られたが、まだまだ検証の余地がある。
	2	仮説に基づき調査を行った結果として、仮説の裏付けとなる事象を十分に得ることができなかったため、仮説が検証できなかった。
	1	仮説に基づき調査を行ったが、そもそも仮説の組み方が適切でなかったために検証自体を行うことが不可能だった。

海外研修・課題研究報告書【現地研究】	
研究者	高等部二学年 ●組 ●●●●番 氏名 ●●●●●
研究先名および対象	カナダ研修旅行に参加した順天高校の生徒 セントマイケルズユニバーシティスクールの学生 チューデントヘルパー
研究期間	2017年7月25日から8月11日
E 現地調査における目的の達成度	<p>現地調査における目的は、現地校に所属している生徒に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の内容 ・学校の教育制度に賛成しているか ・学校の校則の厳しさ ・日本の校則を聞いてどう思ったか ・学校を選ぶ基準 ・進学先(大学進学に対する意志) <p>などをインタビューし、日本の学校との相違点を見つけることであった。 インタビューの結果、明確な違いやその違いから生まれるであろうと予想される影響が発見できたので目的の達成度は高いと思われる。</p> <p>※質問項目から得られた答えが書かれていないため、どのように目的が達成されたのか評価者には分からない。</p>
F 現地調査における手法の的確さ	<p>現地の生徒の生の声が聴きたかったので、直接インタビューして意見を伺うという手法は的確であったといえる。</p> <p>また、現地に向かう前にインターネットで調べたカナダの教育制度についての情報も、現地でインタビューするさいの質問の材料になったので的確であったと思う。</p> <p>※調査手法がどのようなものであったかが書かれておらず、評価者は的確であったかを判断することができない。</p>
G 現地調査を通じた仮説の検証	<p>日本にいる間に立てた仮説は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カナダの学校の校則は日本よりも緩く、宗教的な観点からもピアスや髪染めは個性の表現方法のひとつとして許されている ・自分の意見を他人と共有し、ディスカッションをする活動が日本よりも多く設けられている ・校則や学校教育の違いが引き起こす影響によって日本人が消極的になってしまう傾向にある <p>など、ほぼ現地調査を通して得られた結果と同様の内容になった。</p> <p>※仮説がどのように検証されたのか書かれていないため、どの程度仮説が裏付けられたかが分からない。</p>

※フォントは明朝体・10.5pointを使用すること。また、分量に応じて枠の幅は自由に調節可です。

海外研修・課題研究報告書【事後研究】

研究者	高等部二学年 ●組 ●●●番 氏名 ●●●●●
研究先名および対象	カナダ研修旅行に参加した順天高校の生徒 セントマイケルズユニバーシティースクール のスチューデントヘルパー
研究期間	2017年7月25日から8月11日
HおよびI 考察	<p>私たち1班は、どうして日本人が消極的なのかという問題についてカナダとの教育制度の違いを比較することで研究してきた。</p> <p>私たちは最初に学校の授業を比較してみた。日本では生徒が先生に教わるだけの授業が多く、自分の意見を伝えられるディスカッションの授業が少ない。そのため、自分の意見を表現する機会が十分に生徒に与えられず、日本の生徒は自信を持って発言することが苦手になってしまう傾向がある。一方カナダでは他人と意見を交換し合う授業が多いため、自分の意見を持つ力、そしてそれを他人に伝える力が身につく。そのため多くのカナダの生徒は自分の意見に自信を持って積極的に発言できるようになるのだ。</p> <p>次に校則について比較した。日本では多くの高校でピアスを開けることや髪を染めることは禁止されているが、カナダではそのようなルールのある学校は少ない。そのため日本の生徒は自分の個性を外見で表現することが不可能なのだ。だからこの“不可能”によって日本人の他人に同調し他人の意見に便乗しやすい性格が形成されていると言える。</p> <p>さらに学校の制度についてみてみると次のようなことが分かった。日本では難関大学に入るために毎日小テスト詰めなど知識を育てる教育カリキュラムが組まれているようだが、カナダでは想像力や問題解決力を向上させる教育カリキュラムが多く組まれている。この二か国間には“生徒が何に焦点を置かれているか”の違いがあるように思える。実際、順天高校の生徒にインタビューを行ったところ、テストが多くて大変という意見が多く見受けられカナダ研修旅行に行った生徒のうちの約七割が順天の学校教育に満足していなかった。その一方でカナダではスチューデントヘルパー全員が学校教育に満足しているという結果が得られた。このインタビューからもわかるように、日本とカナダでは根本的に教育するうえでの目指す場所が異なっているように思われる。これらのことより、日本人が外国人に比べて消極的なのはそれぞれ学校教育や校則の中で生徒が得られる力や受ける影響が異なっているからだと言える。</p>
J 先行研究、参考文献 および資料	manabinoba.com 中学生留学.com
アブストラクト(報告書 概要)	<p>カナダと日本における教育の違いとその違いによる人格形成について、現地でのインタビューや学んだこと・両者の学校教育制度や校則を比較してわかったこと。</p> <p><i>★どんばことも学んだが、わかったかを書く。</i></p>

※フォントは明朝体・10.5pointを使用すること。また、分量に応じて枠の幅は自由に調節可です。

海外研修・課題研究報告書【現地研究】	
研究者	高等部二学年 ●組 ●●●●番 氏名 ●●●●●
研究先名および対象	カナダ研修旅行に参加した順天高校の生徒 セントマイケルズユニバーシティスクールのスチューデントヘルパー
研究期間	2017年7月25日から8月11日
E 現地調査における目的の達成度	<p>現地調査における目的は、現地校に所属している生徒にインタビューし、日本とカナダの教育方法を現地校の生徒の本物の意見を基に比較し日本の学校との相違点を見つけることであった。</p> <p>実際のインタビュー：</p> <p>◎校則について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・制服はありますか？ <p>→あります。ただし、留学生や他の国から来た生徒は普通の私服を着ることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メイクは学校で許可されていますか？ <p>→はい。髪を染めることも自由です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・携帯電話を学校に持ってくることは許可されていますか？ <p>→はい。</p> <p>日本の校則(髪染め禁止・メイク禁止・ピアス禁止・携帯電話の持ち込み禁止)について聞いてみてどう思いましたか？</p> <p>→メイクやピアス、髪を染めることが禁止されていることには驚いたが、携帯電話の持ち込み禁止については学校での学業に集中できるため良い決まりだと思う。</p> <p>◎学校を選ぶ基準や進学について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうやって学校を選びましたか？ <p>→自分で選んだわけではなく、両親がカナダで評判の良い St. Michaels University School に私が4歳の時に入学させました。</p> <p>→スポーツの施設が充実していて、校舎が綺麗だから。</p> <p>→少人数クラスがあって先生との距離が近く、学問的レベルが高いから。</p> <p>◎高校卒業後の進学先は？</p> <p>→自分の好きな生物を学ぶために大学へ行きます。大学では自分の知りたい情報が沢山得られると思うから。</p> <p>→将来のためにビジネスや経済を学びに大学へ行きます。</p> <p>◎学校生活について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・掃除は自分たちで行いますか？ <p>→いいえ。業者に行ってもらいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期テストは？ <p>→一年に一回だけあります。</p> <p>登校時間、下校時間などは？</p> <p>→登校が8時10分 下校が3時25分 授業時間は65分です。</p> <p>最後に、学校生活に満足していますか？</p>

	<p>→はい。 (6人中6人がはいと答えました。)</p> <p>インタビューの結果、明確な違いやその違いから生まれるであろうと予想される影響が発見できた点、また、この結果を受けてインターネットで調べるだけではわからない意見を得ることができた点において達成度は高かった。</p>
<p>F 現地調査における手法の的確さ</p>	<p>調査対象：高校生～大学生の男子生徒4人、女子生徒2人 調査方法：日本で用意してきた質問を授業中やプレゼンの準備時間中に質問した。 調査意図：日本で予め調べて得た情報を元に、それが本当かどうか確かめる。</p> <p>調査対象の設定においては私たちと同じ高校生という目線から意見を聞いた点では的確であったと言えるが、インタビューした人数が6人と少なかったためそこに改善の余地がある。調査手法の設定においては日本で調べておいたカナダの様々な情報が正確かどうか確かめながらインタビューを進めることができた点では的確であったが、改善の余地としては今回は口頭での調査だったためメモを取るのが大変だったので紙での調査にするなど他に工夫できた点があったと思う。</p>
<p>G 現地調査を通した仮説の検証</p>	<p>日本にいる間に立てた仮説は、</p> <p>A. カナダの学校の校則は日本よりも緩く、宗教的な観点からもピアスや髪染めは個性の表現方法のひとつとして許されている B. 自分の意見を他人と共有し、ディスカッションをする活動が日本よりも多く設けられている C. 校則や学校教育の違いが引き起こす影響によって日本人が消極的になってしまう傾向にある</p> <p>A. 校則についてのインタビューを通して検証できた。 B. 現地よりカリキュラムを送って貰ったが検証できなかった。だが、授業形式は対話を中心としたもので、日本のような講義形式の授業ではなかった。 C. 日本人の消極的な側面はカナダの研修旅行中にも見られた。例えば先住民の方の話を聞いた後に現地校の生徒は活発に発言していたのに対し、日本人生徒は黙っていることが多かったことや、現地校の先生に質問されていてもなかなか応えが返せなかったりこの仮説を裏付ける行動が見受けられた。よってこの仮説はある程度検証できた。</p> <p>ほぼ現地調査を通して得られた結果と同様の内容になった。</p>

海外研修・課題研究報告書【事後研究】

研究者	高等部二学年 ●組 ●●●●番 氏名 ●●●●●
研究先名および対象	カナダ研修旅行に参加した順天高校の生徒 セントマイケルズユニバーシティースクールのスチューデントヘルパー
研究期間	2017年7月25日から8月11日
HおよびI 考察	<p>私たち1班は、どうして日本人が消極的なのかという問題についてカナダとの教育制度の違いを比較することで研究してきた。</p> <p>私たちは最初に学校の授業を比較してみた。日本では生徒が先生に教わるだけの授業が多く、自分の意見を伝えられるディスカッションの授業が少ない。そのため、自分の意見を表現する機会が十分に生徒に与えられず、日本の生徒は自信を持って発言することが苦手になってしまう傾向がある。一方カナダでは他人と意見を交換し合う授業が多いため、自分の意見を持つ力、そしてそれを他人に伝える力が身につく。そのため多くのカナダの生徒は自分の意見に自信を持って積極的に発言できるようになるのだ。</p> <p>次に校則について比較した。日本では多くの高校でピアスを開けることや髪を染めることは禁止されているが、カナダではそのようなルールのある学校は少ない。そのため日本の生徒は自分の個性を外見で表現することが不可能なのだ。だからこの“不可能”によって日本人の他人に同調し他人の意見に便乗しやすい性格が形成されていると言える。</p> <p>さらに学校の制度についてみてみると次のようなことが分かった。日本では難関大学に入るために毎日小テスト詰めなど知識を育てる教育カリキュラムが組まれているようだが、カナダでは想像力や問題解決力を向上させる教育カリキュラムが多く組まれている。この二か国間には“生徒が何に焦点を置かれているか”の違いがあるように思える。実際、順天高校の生徒にインタビューを行ったところ、テストが多くて大変という意見が多く見受けられカナダ研修旅行に行った生徒のうちの約七割が順天の学校教育に満足していなかった。その一方でカナダではスチューデントヘルパー全員が学校教育に満足しているという結果が得られた。このインタビューからもわかるように、日本とカナダでは根本的に教育するうえでの目指す場所が異なっているように思われる。日本ではただの単語や出来事の暗記をしてペーパーテストで良い結果を残すことを目指しているように見えるのに対し、カナダでは自分の考えを持ちそれを如何に伝えるかを学ぶこと、また、自分が出した答えが合っているかどうかではなくその答えにたどり着いたプロセスを重視する教育を目指しているように見える。これらのことより、日本人が外国人に比べて消極的なのはそれぞれ学校教育や校則の中で生徒が得られる力や受ける影響が異なっているからだということが言える。</p>
J 先行研究、参考文献および資料	manabinoba.com 中学生留学.com
アブストラクト(報告書概要)	カナダと日本の生徒の積極性の差は、自分の意見を表現する機会の頻度の差にある。カナダでは自分の意見を表現する機会が用意された授業が多いのに対し、日本では先生から生徒へ一方向に講義する授業が多い。また髪の色など外見的装いで自分を表現することが禁止されているため他人に同調してしまう傾向にある。この違いが日本人の自分の意見を真っ直ぐに伝えられない消極的な人格を形成している。

1 1. 1 SGH Global Awareness Survey

SGH ネットワークの活動として、海外研修先の生徒を対象としたグローバル意識に関する国際調査をする構想を立てている。第1回調査は2015年度の海外研修の際に生徒が持参した調査用紙に記入してもらった。調査用紙の形式等が、研修先によって異なり、集計に時間がかかり、2016年度末にようやく集計結果を報告することができた。(第3年次研究報告書 pp59-72)

この結果を受けて、次回の調査に関する検討を開始した。主な検討項目は次の二つである。

1. 派遣先によって、調査方法が異なってしまうことを避けるため、オンラインによる調査とする。
2. 自校で多数回の調査をすることが難しいことが判明したため、先行して実施されている調査と比較可能な調査を目指す。

グローバル意識調査として国内で複数回実施されている標準的なものとして、産業能率短大の調査があるが、海外にはそれに対応する調査はない。

産業能率短大新入社員のグローバル意識調査 (第7回: 2017)

<http://www.sanno.ac.jp/research/global2017.html>

は、「今年度の新入社員の海外志向などを尋ね、「新入社員のグローバル意識調査」としてまとめ」たもので、隔年で実施されている。しかし、題名からわかるとおり、調査対象は企業に就職した「新入社員」であり、学生を対象としていない。

学生を対象とした調査としては、「早大生のグローバル意識調査」(2012)

<http://global.waseda-icc.jp/report/enquete>

がある。

また、高等専門学校で実施された例として「沼津高専本科生のグローバル意識調査」(2014)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009891987>

がある。

比較検討の結果、次回の調査は沼津高専本科生の調査の調査項目を基本として加工することとし、著者に許諾を得た。

次に、オンライン調査フォームとして Google Forms を利用し、海外交流校向けに英語版、本校生徒向けに日本語版を作成した。(付属資料1: 英語版。日本語版は割愛した)

また、2017年度の海外研修先でアンケート協力を依頼することとし、依頼文を作成した。(付属資料2)

2017年9月末日を期限にアンケートを依頼したが、解答があったのは、カナダの連携校のみであった。多国籍比較にならないため、2018年度再度依頼し、データをそろえて集計することとした。

1. SGH Global Awareness Survey 2017

This survey is intended to measure global awareness among high schoolers around the world. The questions that have "*" (asterisk) are required questions to answer. Essentially you can choose only one answer, unless there is a note "please choose all that are applicable."

Reference: Kazuma Fujii & Mari Murakami. No. 49, 2015. "Students' Global Awareness at National Institute of Technology, Numazu College"

Basic Information (Please leave this blank)

Your School : _____

Q1. Age

Grade 1 / Year 10 (Two years before the graduation of High School)

Grade 2 / Year 11 (One year before the graduation of High School)

Grade 3 / Year 12 (The last year in High School)

Q2. Gender

Male

Female

Q3. What is your nationality?

Canada

Philippines

Thailand

USA

Japan

Australia

New Zealand

Q4. Have you been abroad, including traveling?

Yes (Go to Q. 5)

No (Go to Q. 6)

Q. 5. If you answered "Yes" to Q. 4, how many times have you been or traveled abroad?

1 to 2 times

3 to 4 times

5 to 6 times

Over 7 times

Q6. Have you ever lived abroad (including studying abroad?)

Yes (Go to Q. 7)

No (Go to Q. 8)

Q7. If answered " Yes" to Q. 6, how long have you resided/stayed?

Less than six months

Six months to less than one year

One year to less than three years

Over three years

Q8. Do you want to study abroad in the future? If you have already studied abroad, do you want to go again?

Yes (Go to Q.9)

No (Go to Q.10)

I don't know. (Go to Q.10)

Q9. If you answered "Yes" to Q8, where do you want to go? Please choose all that are applicable.

Europe

Asia (Except Japan)

Middle East

Africa

Pacific

North America

Latina American and the Carribean

Any countries of which the native languages is English

Japan

Q10. Do you want to work overseas when you have reached to working age?

Yes (Go to Q.11)

Yes, but depending on the country (Go to Q.11)

No (Go to Q.12)

I don't know (Go to Q.13)

Q11. If you answered "Yes" or "Yes, but depending on the country" to Q10, tell the reason. Please choose all that are applicable.

I would like to try living abroad.

I would like to improve my language skills.

I would like to broaden my views.

I would like to work with people from different countries.

Q12. If you answered "No" to Q10, tell us the reason. Please choose all that are applicable.

I am not confident in my own ability yet.

I am not attracted to foreign countries.

I feel nervous about working in a foreign country.

My living abroad will put a burden on my family.

Q13. If your boss were a foreign national, do you feel uncomfortable about that?

I'd feel very uncomfortable.

I'd feel uncomfortable.

I'd feel a little uncomfortable.

I wouldn't feel uncomfortable at all.

Q14. If you were ordered to relocate overseas for work, what would you do?

I'd readily accept the order.

I'd reluctantly accept the order.

I'd try my best to avoid the order.

I'd refuse the order, even if it means quitting my job.

I'm not sure now.

Q15. If you are going to study abroad or work abroad, what worries you? Please choose all that are applicable.

- I am worried about the language.
- I am worried about local food.
- I am worried about terrorism and public security.
- I am worried about resident environment.
- I am worried about adjusting to a different culture.
- I am worried about living apart from my family and lacking to communicate with them.
- I am worried about making friends.
- I am not worried about anything so much.

Q16. Do you think studying English (as a foreign language) now is necessary for your job in the future?

- Yes, I think so.
- No, I don't think so.
- I don't know.
- I am a native English speaker.

Q17. When your native language were the world common language, would you still study a foreign language?

- Yes
- No
- I don't know.
- I am a native English speaker and I will still study a foreign language.
- I am a native English speaker and I don't think I will study a foreign language.

Q18. Do you think it is important to study foreign language for your job in the future? Please choose one answer.

- No
- I don't know.

Q19. Do you have any foreign friends?

- Yes. I have friends that I hang out with in person.
- Yes. I have friends via social media sites, such as Facebook, Twitter, and Youtube.
- No.

Q20. How often do you eat foreign food?

- At least once a week
- At least once a month
- At least once a year
- I don't eat foreign food

付属資料 2

Dear friends of Junten High School

We hope that this letter finds you well. In our global research project, students are studying various social issues in communities around the world. Thanks to our friends like you, we have a network of high school students in many countries. We would like to make the most of this network by carrying out a project to help us understand views held by students in various countries on the social issues in the globalized world. We prepared an on-line survey named “The Global Awareness Survey” . Please ask your students to spare some time to answer the survey questions.

The period of the survey: From July 1st to September 30th.

The target of the survey: A group of students who meet the following conditions.

1. Students in secondary education
2. Students in a mainstream course. Those who are not in a specifically internationally oriented course.
3. A group of 20 to 60 students.

The method:

1. Please visit Junten English Website by typing “Junten High School” in the search engine.
2. On the bottom left of the page, you can find the button labeled “SGH Global Awareness Survey” . Please click it.

Alternatively you can go straight to

<https://www.junten.ed.jp/contents/sgh-global-awareness-survey-2/>

3. Please click the banner with “The Global Awareness Survey Here” to jump to the survey form.

We appreciate your cooperation.

Thank you

Atsuo Nagatsuka

Principal

12.1 順天高等学校グローバル意識調査（全校生徒対象）

順天高等学校ではSGHの取り組みを通じて生徒の主体性、国際的な関心が喚起される様子を追跡するため、全生徒を対象に毎年12月に意識調査を実施している。

以下、質問項目ごとに、全校回答数、学年別回答数、男女回答数、SGH対象生徒とSGH対象生徒以外、そして「類型」別で集計結果を掲載している。

本校では学年により一部の生徒をSGH対象としている。今年度のSGH対象生徒は①高等部1、2年全員、②高等部3年英語選抜類型、特進選抜類型サイエンスクラス、その他希望者である。（「類型」については、次の項目を参照）実施4年目になり、全生徒の約8割が対象生徒となった。

本校では「類型制」という制度があり、入学時から目的、特性別に別クラスを編成している。分類は以下のとおりである。

一貫選抜類型：中学から入学した生徒のうち、国立大学等を目指す生徒。（一貫）

特進選抜類型サイエンスクラス：理科系に興味を持ち、探究学習に取り組みつつ国立大学等を目指す生徒。（S）

英語選抜類型：英語を強化した学習をしながら、国際的な将来を目指す生徒。（E）

特進選抜類型：国公立大学、最難関私立大学等を目指す生徒。（選抜）

進類型：難関私立大学等を目指す生徒。（特進）

最後の項目は、昨年度までに実施した調査結果を加え、今年度との比較ができるように掲載した。

1 質問項目と集計結果

質問項目ごとに、全校回答数、学年別、男女別、SGH/SHG 以外、類型別の回答数を掲載する。（カッコ内の数字は有効回答数に対する割合：単位％）

● ボランティア活動

【問1】あなたは今年度（4月～現在の間）、学内・学外問わずボランティア活動に参加しましたか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
Yes	190	52	27	123	146	250	19	27	43	53	83	63	269 (36)	272 (36)	283 (36)	331 (44)
No	51	183	242	240	236	293	183	78	50	54	146	148	476 (64)	493 (64)	498 (64)	429 (56)

【問2】問1で①YESと答えた方、それは何回ですか？ 回数をマークして下さい。8回以上の場合は、⑨にマークして下さい。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1回	143	31	13	93	94	177	10	14	32	30	62	49	187	188	186	192
2回	32	17	9	20	38	54	4	7	8	18	15	10	58	54	61	79
3回	6	2	3	2	9	8	3	2	1	3	3	2	11	22	31	38
4回	4	0	0	2	2	4	0	1	1	1	1	0	4	7	8	17
5回 以上	5	2(1)	2(2)	3	6(3)	7(1)	2(2)	3	1(1)	0	2	3(2)	9(3)	15	6	14

5回以上の欄のカッコつきの数字は、8回以上参加した生徒の数（内数、本年度の新調査0）。

【問3】 問1で②NOと答えた方、それはなぜですか？ ①興味はあるが、忙しかった・行けなかった。
②興味はあるが、参加方法が分からなかった。 ③興味が無かった。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH外	一貫	S	E	選抜	特進	2017全体	2016	2015	2014
1	39	74	110	86	137	146	77	27	22	33	69	72	223	246	293	266
2	6	3	8	14	3	11	6	1	4	1	8	3	17	11	15	20
3	14	104	129	146	101	144	103	51	26	22	73	75	247	266	195	150

●自己研鑽活動

【問4】 あなたは今年度（4月～現在の間）、学校外での自己研鑽(けんさん)活動(語学研修やワークショップ等)に参加しましたか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH外	一貫	S	E	選抜	特進	2017全体	2016全体	2015	2014
Yes	34	24	7	31	34	61	4	5	18	19	9	14	65 (9)	78 (10)	56 (7)	53 (7)
No	205	205	261	326	345	475	196	98	74	86	219	194	671	697	717	697

【問5】 問4で①YESの方、何をどのくらいしましたか？マークシート用紙の裏面に記入して下さい。
(例) 英語のサマキャンプに1週間、化学実験ワークショップ2日間、映像で学ぶ〇〇な世界1日等。(データ省略)

【問6】 問4で②NOと答えた方、それはなぜですか？ ①興味はあるが忙しかった・行けなかった。
②興味はあるが、参加方法が分からなかった。 ③興味が無かった。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH外	一貫	S	E	選抜	特進	2017全体	2016	2015	2014
1	62	64	95	82	139	160	61	23	27	47	72	52	221	242	249	245
2	25	13	12	23	27	39	11	8	2	14	15	11	50	57	65	73
3	125	134	161	230	190	289	131	71	47	30	133	139	420	398	399	386

●海外研修

【問7】 あなたは今年度（4月～現在の間）、海外に短期・長期語学研修又は留学・派遣等に参加しましたか？(*学校の修学旅行や個人観光旅行を除く)

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017全体	2016	2015	2014
Yes	8	18	1	9	18	26	1	4	6	11	3	3	27 (4)	19 (2)	36 (5)	22 (3)
No	231	213	269	348	365	512	201	100	88	95	225	205	713	742	745	734

【問8】 問7で①YESと答えた方、それはどの国で期間はどのくらいでしたか？期間及び2カ国以上行った場合、下記以外の国に行った場合等は全てマークシート用紙の裏面に記入して下さい。

①アメリカ ②カナダ ③オーストラリア ④ニュージーランド ⑤その他の国(具体的なことをマークシート用紙裏面に記入)

*期間についてはマークシート用紙裏面に記入(例)①アメリカ 8月1日～15日 2週間等

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	2	2	1	2	3	5	0	1	1	2	1	0	5	4	8	11
2	4	3	3	4	6	7	3	1	1	5	1	2	10	6	11	5
3	1	7	0	5	3	8	0	1	5	0	1	1	8	7	8	2
4	0	3	0	2	1	3	0	1	0	2	0	0	3	0	3	3
5	2	3	1	0	6	5	1	1	0	2	2	1	6	2	10	5

●留学意欲の変化

○入学時の留学意欲

【問9】 あなたは1年生の4月(入学時点)で、将来留学したいと思っていましたか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
Yes	110	93	116	126	193	239	80	36	30	81	99	73	319 (43)	337 (44)	325 (42)	272 (36)
No	130	139	150	233	186	299	120	69	61	24	127	138	419	431	442	480

【問10】 問9で①YESの方、いつ頃に留学したいと考えていましたか？

①高校在学中 ②高校卒業後(海外の大学進学希望) ③国内大学在学中 ④国内大学卒業後

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	35	18	17	21	49	62	8	7	7	31	16	9	70	64	70	63
2	7	7	8	6	16	16	6	1	1	6	9	5	22	30	28	36
3	59	66	86	89	122	149	62	27	18	45	69	52	211	206	214	160
4	10	4	8	13	9	16	6	2	5	0	7	8	22	37	12	26

【問11】 問9で②NOと答えた方、それはなぜだったと思いますか？

①興味はあるが、勇気が無い。家族・友人と別れたくないと思っていた。 ②興味はあるが、経済的に難しいと思っていた。 ③興味はあるが、参加方法が分からなかった。 ④興味がなかった。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	39	32	28	49	50	79	20	15	14	7	31	32	99	103	89	116
2	22	16	22	28	32	45	15	6	11	6	20	17	60	63	68	91
3	1	4	10	9	6	6	9	2	1	1	7	4	15	23	17	23
4	72	91	102	158	107	181	84	47	38	15	77	88	265	257	261	268

○現在の留学意欲

【問12】 あなたは現在、将来留学したいと思いますか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016 全体	2015	2014
Yes	136	116	155	179	228	301	106	45	49	94	123	96	407 (55)	388 (51)	428 (55)	414 (55)
No	97	117	115	177	152	233	96	60	44	12	106	107	329	366	351	342

【問 13】 問 12 で①YES の方、いつ頃に留学したいですか？

① 校在学中 ②高校卒業後（海外の大学進学希望） ③国内大学在学中 ④国内大学卒業後

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	35	2	2	21	18	38	1	5	4	11	6	13	39	15	22	22
2	10	7	11	13	15	22	6	1	4	11	5	7	28	44	29	45
3	83	94	137	137	177	217	97	37	35	68	103	71	314	299	349	331
4	13	15	7	15	20	31	4	4	8	4	11	8	35	30	27	49

【問 14】 問 12 で②NO と答えた方、それはなぜですか？ ①興味はあるが、勇気が無い。家族・友人と別れたくない。 ②興味はあるが、経済的に難しい。 ③興味はあるが、参加方法が分からない。 ④興味が無い。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 合計	2016	2015 2014
1	26	27	20	30	43	55	18	11	10	2	24	26	73	72	データ 処理ミ スのた め省略
2	21	8	22	22	29	34	17	5	6	5	21	14	51	67	
3	1	5	5	6	5	6	5	1	0	1	6	3	11	11	
4	56	80	71	126	81	150	57	42	30	9	56	70	207	226	

●国際的活動への意欲の変化

○入学時の国際活動意欲

【問 15】 あなたは 1 年生の 4 月（入学時点）で「将来、仕事で国際的に活躍したい」と思っていましたか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
Yes	93	79	103	105	170	207	68	25	25	84	98	43	275 (37)	290 (38)	283 (36)	233 (31)
No	147	154	168	256	213	333	136	80	69	21	132	167	469	469	497	522

【問 16】 問 15 で①YES の方、それはどのような職業（内容）でしたか？ ① 国際的企業 ②大使館職員 ③国連職員 ④海外出張をする ⑤JICA/NPO 職員 ⑥その他（具体的なことをマークシート用紙裏面に記入）

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	43	46	51	57	83	109	31	15	14	44	47	20	140	138	147	118
2	4	2	6	7	5	7	5	0	2	3	4	3	12	17	6	16
3	2	4	8	6	8	11	3	0	1	6	5	2	14	11	19	18
4	27	17	20	25	39	50	14	5	4	18	29	8	64	65	67	39
5	4	2	10	3	13	7	9	0	2	4	6	4	16	13	9	12
6	16	7	10	11	22	25	8	5	4	8	8	8	33	23	29	37

○現在の国際活動意欲

【問 17】 あなたは現在、「将来、仕事で国際的に活躍したい」と思っていますか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
Yes	100	85	108	121	172	224	69	28	33	84	96	52	293 (40)	264 (35)	317 (41)	287 (38)
No	137	146	162	237	208	311	134	76	60	21	131	157	445	480	461	471

【問 18】 問 17 で①YES の方、それはどのような職業（内容）ですか？

①国際的企業 ②大使館職員 ③国連職員 ④海外出張をする ⑤JICA/NPO 職員 ⑥その他（具体的なことをマークシート用紙裏面に記入）

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	37	54	56	69	78	115	32	14	15	42	51	25	147	137	167	142
2	4	7	4	9	6	12	3	0	1	4	5	5	15	13	6	19
3	1	1	3	2	3	4	1	0	0	4	1	0	5	6	13	7
4	33	13	18	27	37	50	14	7	5	18	27	7	64	63	74	56
5	6	4	14	5	19	14	10	2	6	5	5	6	24	19	12	11
6	21	11	13	15	30	36	9	6	6	12	8	13	45	28	39	52

●表彰、大会参加

【問 19】 あなたは今年度（4月～現在の間）、学校以外の団体から表彰されたり、国内外の大会に参加しましたか？

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
Yes	9	23	9	15	26	38	3	3	6	11	9	12	41 (6)	53 (7)	46 (6)	38 (5)
No	229	208	260	344	353	498	199	102	87	94	219	195	697	702	727	719

【問 20】 問 19 で①YES の方、それはどのような団体からの表彰でしたか？また、どういう大会に参加しましたか？もし、そこで入賞していたら教えてください。（具体的なことをマークシート用紙裏面に記入）
（例）ユネスコ主催 模擬国連 入賞 / 高校生ボランティアフォーラム参加 等 （集計結果省略）

【問 21】 問 19 で②NO と答えた方は、次のどれに当てはまりますか？

① 興味はあるので、今後はチャレンジしてみたい。（希望する、または、希望していた大会名等があればマークシート用紙裏面に記入） ②興味はあるが、忙しかった・行けなかった。
③興味はあるが、参加方法が分からない。 ④興味が無い。

	1年	2年	3年	男	女	SGH	SGH 以外	一貫	S	E	選抜	特進	2017 全体	2016	2015	2014
1	44	19	43	36	70	74	32	10	11	35	28	22	106	87	109	93
2	39	35	34	54	54	88	20	9	16	15	38	30	108	128	109	132
3	23	12	12	23	24	38	9	6	6	9	15	11	47	62	61	58
4	119	142	167	229	199	294	134	75	51	35	132	135	428	402	414	406

2 集計結果の分析

2016年は世界の動向の潮目になった年として記憶されるであろう。急速に進むグローバル化に疑問を唱える勢力の発言力が増し、「グローバル」という言葉にネガティブなイメージが付きまとうようになった。昨年度はこのインパクトが調査に現れた。それから1年が経過した。反グローバルの流れはまだ根強いが、全校の合計を見る限り、生徒の回答状況は一昨年までの状況に戻りつつある。

日本国外での活動に対する意欲は、昨年度減退したが、今年度はある程度盛り返している。昨年の衝撃的であった反グローバル化の流れはある程度日常化し、グローバルへの抵抗が薄らいでいるようだ。

しかし後述するように、この結果は、単に1年がたって、生徒全体がやや国際活動に積極的になったという単純な解釈は許さないことが分かる。まず、全校生徒の合計の傾向を分析した後で、それ以外の特徴に触れる。

●全校生徒の合計の分析

●ボランティア活動

この項目の結果は2015年以来ほぼ変化がない。

本学園では高等部1年全員にボランティア体験を実質必修化しているため、12月の時点で約65%がすでに体験している。

●自己研鑽活動

自己研鑽活動に参加した生徒は全体の8.83%で、昨年(10.1%)より減少した。SGH対象生徒の参加率は11.4%で、対象外の生徒(2.00%)に比べて極めて高い。対象外の生徒がすべて3年生であり、受験準備をしていたことが理由である。

●海外研修

自主的な海外研修参加率は3.64%で昨年(2.50%)を上回ったが一昨年(4.57%)を下回った。昨年の衝撃が薄らぎ、生徒保護者が再び海外に目を向けるようになった。東京都私学財団支援金の定員4名も再び満たせるようになり、来年度自費留学を予定している生徒も二人いる。

●留学意欲の変化

入学時に留学したいと思っていた生徒は今年度43.2%で昨年度(43.9%)に比べて減少したが、現在留学したいと思っている生徒は今年度55.3%で昨年度(51.5%)を上回った。入学時に反グローバルの衝撃を受けた生徒が、順天高校の教育を通じて国際的な関心を高めているように見える。

●国際的活動への意欲の変化

この項目でも留学意欲と同様の傾向がみられる。入学時に国際的に活躍したいと思っていた生徒は減少し(38.2%→37.0%)、現在そう思っている生徒は増加した(35.5%→39.7%)。

●表彰、大会参加

大会に参加したり、表彰されたりした生徒は5.56%で昨年度(7.02%)より減少している。昨年度は一昨年度より増加しているの。昨年は、反グローバル化の衝撃で国際活動に消極的になった生徒が、国内での活動を活発化させたが、今年度になって、また、国際的活動にシフトしたため、国内活動がやや減少したと解釈できそうに見える。

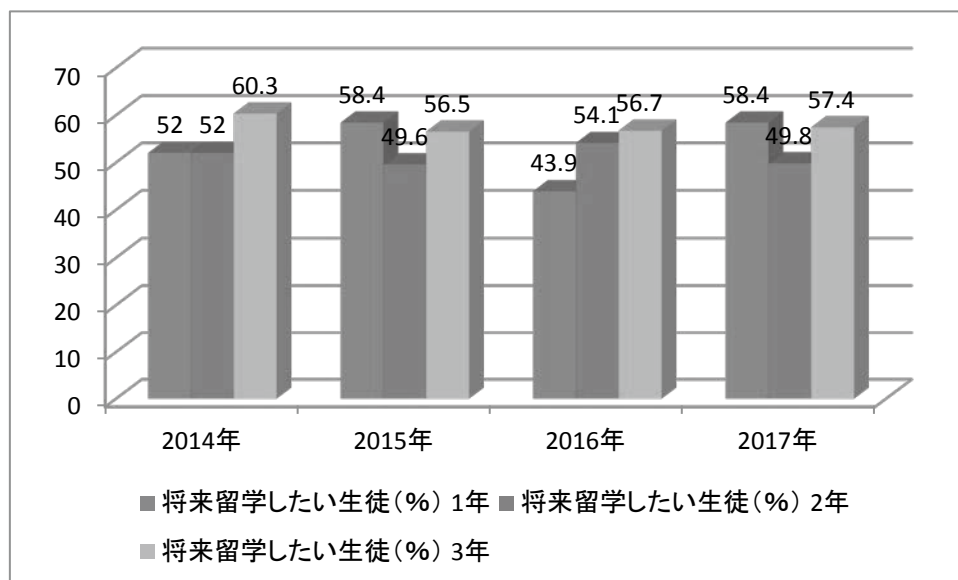
●その他の特徴

2016年の反グローバル化のうねりで衝撃を受けた生徒が、国際化には消極的になったものの、国内での各種コンテストには積極的に出場するようになったが、1年がたち衝撃の余波が弱まるにつれて、2015年以前の傾向に近づいている、という解釈は果たして正しいのだろうか。

国際的関心の指標例として、現在留学したい生徒の割合を、学年別に調べてみた。

昨年度の調査で、現在留学したいと考えている生徒の割合は1学年が43.9%、2学年が54.1%、3学年が56.7%であり、1学年の割合が明らかに低い。今年度の調査では、1学年が58.4%、2学年が49.8%、3学年が57.4%であり、2学年の割合が明らかに低い。つまり、昨年度入学した生徒はほかの学年に比べ

て留学に関する意欲が低く、今年になっても依然として低いままであると言える。つまり、2016 年度に留学に関する意欲が低下したように見えたのは、際立って留学意欲の低い学年が入学したからであって、全体の生徒の留学意欲が低下したわけではないと考えられる。しかし一方では各学年とも、今年度は昨年度よりは留学したい生徒の割合が増加している。2016 年入学生も含めて、この 1 年で留学への積極性は上昇している。この傾向は昨年度特有のものなのであろうか。SGH に指定された 2014 年度からこの調査は継続しているので、4 年分の傾向をグラフ化したものを示す。それぞれの年度で、各学年の中で、将来留学したい生徒の割合を表示した。



2016 年入学生は、1 年生として 4 年間で最も留学に消極的である。それも他のグループとの差は明確である。2 番目に消極的といえる 2014 年入学生と比べても 8.1%の差がある。ところが 2016 年入学生が 2 年になると、留学したい生徒の割合は記録上最低ではなくなる。2014 年入学生のほうが比率が低い。さらに、2014 年、2015 年の入学生は 1 年から 2 年に進級すると、留学意欲が低下しているのに対し、2016 年入学生だけが 1 年から 2 年にかけて、意欲が上昇している。

全般的な傾向に関しては、次のような解釈が成り立つ。1 年次の生徒は、高校在学中の交換留学やトビタテ留学への意欲を持っている。2 年次の 12 月時点では、これらの可能性はほぼ消滅し、1 年後に迫った大学入試が強く意識されている。したがって、意欲が低下したように見える。3 年次の 12 月になると、受験大学を調査する中で、大学在学中の留学の記述をよく目にするようになり、大学での留学を意識するようになるので、留学意欲が高まったように見える。2016 年度入学生以外は、この解釈どおりの推移をたどっている。

在校生が在学期間とともに留学意欲を上昇させるかどうかを年度ごとに調べてみよう。1 年、2 年が進級したときに留学したい生徒の割合の変化 (%) を合計したもので、その年度の留学意欲へのインパクトを測ることができる。これが正の値をとることは、在校生の留学意欲がこの 1 年間で上昇したことを示すので、順天高校のグローバル教育が生徒全体を平均して留学意欲に正の影響を与えていることを表す。15 年度のインパクトは+2.1%、16 年度は+2.8%であるのに対し、17 年度は+9.2%である。もう一つの解釈は、該当する 1 年間の社会情勢の変化が生徒の意欲にインパクトを与えているというものである。しかし、反グローバル化の衝撃があった 2016 年度のインパクトも正の値で、しかも 15 年度のインパクトよりも大きいことから、この解釈は必ずしも妥当でないと判断できる。

以上の結果を踏まえ、次のような解釈を提示する。2016 年度の入学生は際立って留学への関心が低い生徒が多かった。なぜそのような層が順天高校に入学したのかは不明である。しかし、17 年度の順天高校の取り組みが、生徒の留学意欲上昇に与えたインパクトは、過去に大きく大きかった。

今年で、この調査は 4 年目になるが、調査結果は、入学年度による生徒の質の変化や、国際情勢に敏感に反応することが分かる。

12.2 生徒変容調査（3学年 SGH 生徒対象）

2015 年度入学生は、英語選抜類型、特進選抜類型 S クラス全員と、そのほかの類型の希望者を合わせて 82 名の生徒を GLAP 1, 2 と称して SGH 活動の対象者とした。この調査は、2015 年度入学生が卒業する 2017 年度の 12 月に、3 年間の活動を振り返り、自らの成長を自己評価するために実施したものである。82 名の対象者のうち、79 名の回答を得た。

SGH 活動を通じて向上することを期待した 46 項目（表 1 参照）について、肯定する度合いを 5 段階で自己評価した。

- ①大いにそう思う
- ②どちらかというと思う
- ③どちらともいえない
- ④あまりそう思わない
- ⑤全くそう思わない

①②が肯定的評価、④⑤が否定的評価である。この調査では、中間的评价 ③どちらともいえない、を加えてあるので、質問項目に関して具体的イメージが乏しい場合には③が増加することが予想される。

1. 回答結果一覧と集計

1-1. 回答結果一覧

回答結果を表 1 と図 1 に提示する。

「肯定的評価の割合」と「相対的肯定度」について

「①大いにそう思う」と、「②どちらかというと思う」の回答数の和を全回答数 79 で割った割合を、「肯定的評価の割合」の列にパーセント表示した。

また、肯定的評価の総数は同じでも、強い肯定の割合が異なる場合もあり、否定的評価の割合も異なるので、「相対的肯定度」を測定する指標を設定する。

①大いにそう思う ②どちらかというと思う ③どちらともいえない ④あまりそう思わない ⑤全くそう思わない という選択に、それぞれ+2、+1、0、-1、-2のポイントを配当して合計したものを全回答数の2倍158で割って「相対的肯定度」の列に表示した。すべての回答が「①大いにそう思う」であった場合、相対的肯定度は+1に、すべての回答が「⑤全くそう思わない」であった場合、-1になる。

表 1 調査回答結果一覧

	①大いにそう思う	②どちらかというところそう思う	③どちらともいえない	④あまりそう思わない	⑤全くそう思わない	肯定的評価の割合	相対的肯定度	肯定的評価の割合(昨年)	相対的肯定度(昨年)
(1) 社会課題に関する関心が高まった。	37	27	9	4	2	81%	0.59	87%	0.66
(2) 社会課題に関する理解が深まった。	34	28	10	5	2	78%	0.55	82%	0.57
(3) 論理的に考えようとする気持ちが高まった。	34	28	11	2	4	78%	0.54	68%	0.43
(4) 論理的に考える力が付いた。	27	32	14	3	3	75%	0.49	66%	0.49
(5) 現象や他人の意見を客観的に比較して考よう(批判的思考)とする気持ちが高まった。	36	25	11	4	3	77%	0.55	82%	0.61
(6) 現象や他人の意見を客観的に比較して考える力(批判的思考力)が付いた。	32	28	14	1	4	76%	0.53	87%	0.61
(7) 自分の考えを発表しようとする気持ちが高まった。	33	18	21	3	4	65%	0.46	71%	0.47
(8) 自分の考えを発表する力が付いた。	32	21	18	4	4	67%	0.46	71%	0.47
(9) 他人の考えを理解しようとする気持ちが高まった。	45	23	5	2	4	86%	0.65	82%	0.62
(10) 他人の考えを理解する力が付いた。	37	27	10	2	3	81%	0.59	79%	0.59
(11) 他人と話し合い意見を交換しようとする気持ちが高まったが付いた。	45	22	9	1	2	85%	0.68	82%	0.63
(12) 他人と話し合い意見を交換する力が付いた。	34	25	15	2	3	75%	0.54	82%	0.57
(13) 他人と協力して活動しようとする気持ちが高まった。	37	26	10	3	3	80%	0.58	79%	0.59
(14) 他人と協力して活動する力が付いた。	37	22	14	2	4	75%	0.54	84%	0.66
(15) 問題を発見しようとする気持ちが高まった。	32	27	13	2	5	75%	0.50	79%	0.55
(16) 問題を発見する力が付いた。	32	24	15	4	4	71%	0.48	68%	0.45
(17) 問題を解決しようとする気持ちが高まった。	38	21	14	3	3	75%	0.56	71%	0.51
(18) 問題を解決する力が付いた。	27	24	19	5	4	70%	0.41	68%	0.39
(19) 自分から行動しようとする気持ちが高まった。	44	16	14	2	3	76%	0.61	76%	0.59
(20) 自分から行動する力が付いた。	33	23	19	0	4	71%	0.51	74%	0.54
(21) 他者に寄り添う気持ちが高まった。	40	13	21	2	3	67%	0.54	76%	0.54
(22) 他者に寄り添う力が付いた。	33	19	21	2	4	66%	0.47	74%	0.46
(23) 専門家に自分の考えを伝える力が付いた。	17	15	29	11	7	41%	0.15	53%	0.07
(24) 専門家と話し合い意見を交換する力が付いた。	17	17	25	14	6	43%	0.16	47%	0.07

(25) 専門家の意見を参考に自分の考えを修正する力が付いた。	26	19	22	6	6	57%	0.34	68%	0.32
(26) 専門家と協力して活動する力が付いた。	22	15	25	10	7	47%	0.22	50%	0.13
(27) 外国人に自分の考えを発表する力が付いた。	31	16	19	10	3	59%	0.39	76%	0.50
(28) 外国人の考えを理解する力が付いた。	30	21	21	4	3	65%	0.45	74%	0.46
(29) 外国人と話し合い意見を交換する力が付いた。	33	13	22	7	4	58%	0.41	66%	0.41
(30) 外国人と協力して活動する力が付いた。	31	15	22	6	5	58%	0.39	74%	0.49
(31) 課題研究のテーマを設定する力が付いた。	28	28	17	2	4	71%	0.47	58%	0.28
(32) 文献（書籍）を用いて課題研究の調査をする力が付いた。	32	25	16	3	3	76%	0.51	61%	0.28
(33) ネットを用いて課題研究の調査をする力が付いた。	38	27	12	1	1	82%	0.63	79%	0.50
(34) 英語を用いて課題研究の調査をする力が付いた。	26	22	21	5	5	61%	0.37	58%	0.24
(35) 調査したことをまとめたり分析したりする力が付いた。	35	23	14	5	2	73%	0.53	68%	0.42
(36) 調査したことをもとに自分の考えをまとめる力が付いた。	36	18	20	4	1	68%	0.53	82%	0.55
(37) 研究をポスターにまとめる力が付いた。	35	25	14	3	2	76%	0.56	89%	0.55
(38) 研究をプレゼンテーション（口頭発表）にまとめる力が付いた。	36	25	14	2	2	77%	0.58	63%	0.42
(39) 研究をレポートや論文にまとめる力が付いた。	25	26	23	4	1	65%	0.44	63%	0.34
(40) 研究成果を英語で発表する力が付いた。	23	21	22	9	4	56%	0.32	63%	0.32
(41) 研究成果をもとに社会に働きかける活動をする力が付いた。	24	15	25	7	8	49%	0.25	50%	0.18
(42) SGH の課題研究において研究成果がでた。	22	12	26	12	7	43%	0.19	53%	0.16
(43) SGH に関連して、学校が設定したもの以外に自主的に活動し実績を上げた。	15	9	20	15	20	30%	-0.10	45%	0.08
(44) 活動が大学、学部、学科選択に影響した。	25	6	12	15	21	39%	-0.01	53%	0.13
(45) 活動の影響で、将来留学したいという気持ちが高まった。	29	13	16	7	14	53%	0.23	66%	0.28
(46) 活動が将来就きたい職業に影響した。	23	10	12	13	21	42%	0.01	53%	0.16

昨年度と比較して肯定的評価が増加した結果（肯定的評価の割合では5%以上、相対的肯定度では0.1以上の増加）は下線を引き、減少（肯定的評価の割合では5%以上、相対的肯定度では0.1以上の減少）したものは斜体で表した。

回答結果を積み上げ横棒グラフにしたものを図1に提示する。

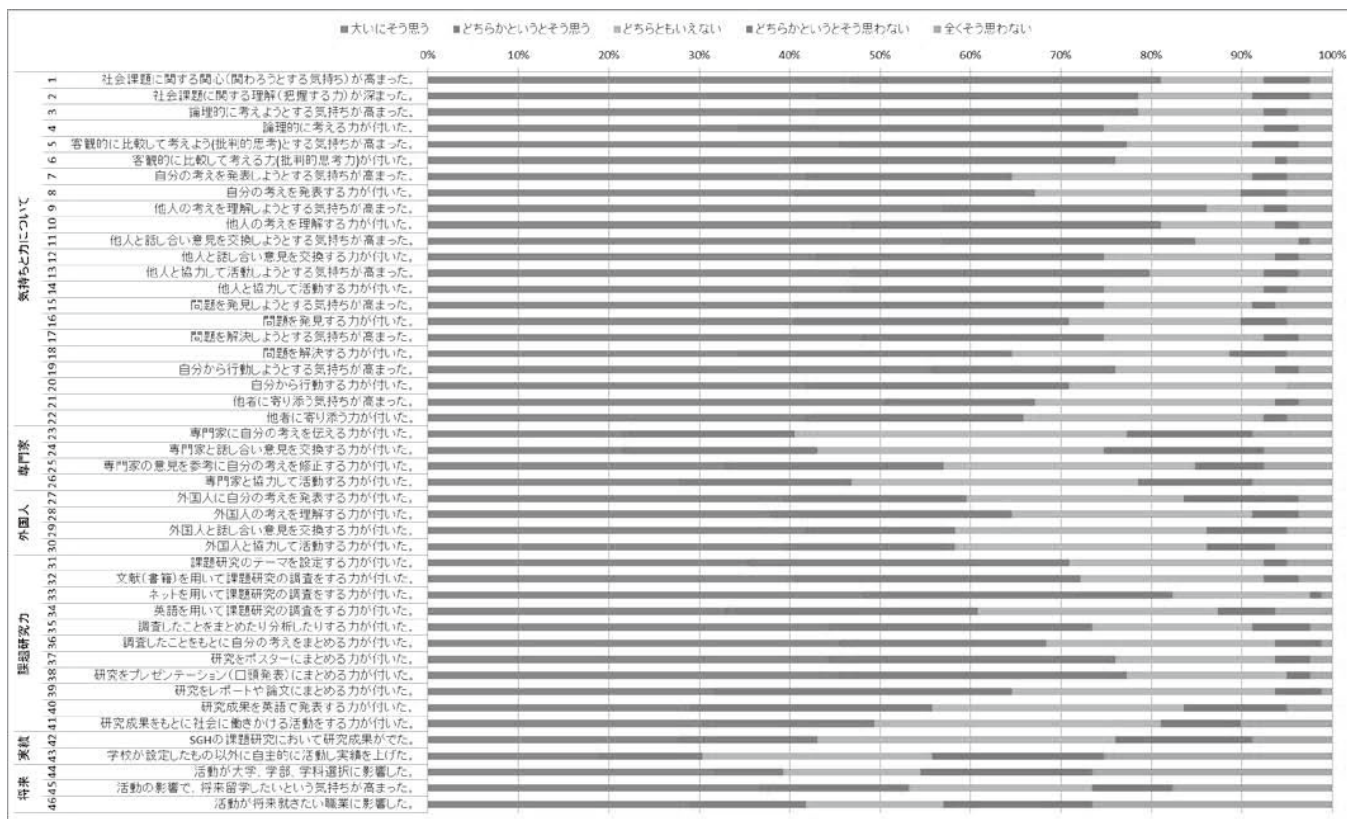


図 1、回答結果一覧

積み上げグラフ(図 1)で左側に来る 2 項目が肯定的評価、中間の白い部分が「どちらともいえない」右側の 2 項目が否定的評価にあたる。

1-2. 回答結果の集計

1-2-1. 全体の傾向

項目の性質が異なるため、項目別解答を平均することの意味は限定的であるが、平均することにより、対象生徒が SGH 活動を自分の成長にとって肯定的であるととらえたかどうかの指標となる。

全回答数(無回答も含む)3634(100%)に対し、以下のようなになった。肯定的評価の合計(①+②)は 65.9%(昨年度との差 -3.6%)であった。また、全体の相対的肯定度は 0.43(昨年度との差+0.01)であった。肯定的評価の合計は昨年度に比べはっきり低下傾向が認められる一方、相対的肯定度は昨年度とほぼ同じである。

①大いにそう思う	1438 (39.5%)	昨年度の差	+7.1%
②どちらかというと思う	955 (26.3%)	同	-10.8%
③どちらともいえない	776 (21.4%)	同	+3.4%
④あまりそう思わない	233 (6.4%)	同	-0.4%
⑤全くそう思わない	232 (6.4%)	同	+0.9%

1-2-2. 肯定的評価の少ない項目と多い項目

肯定的評価が半数を下回った項目は以下の8項目である。

- (43) SGH に関連して、学校が設定したもの以外に自主的に活動し実績を上げた。(30%)
- (44) 活動が大学、学部、学科選択に影響した。(39%)
- (23) 専門家に自分の考えを伝える力が付いた。(41%)
- (46) 活動が将来就きたい職業に影響した。(42%)
- (24) 専門家と話し合い意見を交換する力が付いた。(43%)
- (42) SGH の課題研究において研究成果がでた。(43%)
- (26) 専門家と協力して活動する力が付いた。(47%)
- (41) 研究成果をもとに社会に働きかける活動をする力が付いた。(49%)

昨年度は(43)(24)の2項目のみが、該当していた。

2. 回答結果の分析と検討

2-1. 全体の傾向

全項目平均で肯定的評価が3分の2を占めていることから、2015年度のSGH対象生徒はSGH活動が資質・能力の向上に効果的に働いたと考えているようだ。しかし、肯定的評価の割合は昨年より減少し、肯定的評価の割合が半数を下回った項目も大きく増加した。

昨年度の対象者は英語選抜類型全員と希望者であった。今年度の対象者はそれに加えて特進選抜類型サイエンスクラス(Sクラス)全員である。Sクラスは理数探究を目的としたクラスであり、入学時から理数系への進学志向が定まっている。また、SGH研究と理数研究を並行して進めたため、SGH単体に関する関与度が低かったことが影響していると考えられる。

一方で、相対的肯定度を見ると昨年度より上昇している。つまり、全体として肯定する項目の割合は減ったものの、肯定された項目はより強く肯定されているということが分かる。

2-2. その他の特徴

2-2-1 マインドとスキル

項目(1)～(22)は奇数番の「・・・気持ちが高まった。」で終わる項目と偶数番の「・・・力が付いた。」で終わる項目が対になっている。(1)社会問題に関する関心が高まった。と、(2)社会問題に関する理解が深まった。に限っては、文尾を変えている。)前者はマインド・意欲といわれる資質、態度であり、後者はスキル・コンピテンシーといわれる力である。この二つは本来は別の次元をなすものである。(表2)

表2 マインドとスキル

	スキル	高い	低い
マインド			
高い		とてもやりたいし、よくできる	とてもやりたいが、うまくできない
低い		別にやりたくないが、やればよくできる	やりたくないし、よくできない

日本の子供は理数のスキル・コンピテンシーは高いもののマインドが低いということはPISAをはじめとする国際調査で再三指摘されているところである。

昨年の調査では、この二つの区別を前文で解説した。

<気持ちと力について>

(1)～(22)の項目は、同じ分野における「気持ち」と「力」を聞いています。どこが違うのでしょうか。

「気持ち」はあなたの心の中の問題で、他人にはわかりません。「力」はあなたが外と関わる時に発揮されるものなので、他人にもある程度判断できます。

「勉強をしようと思うようになった」ら、「勉強なんてしなくてもいいと思っていた」ときよりも、「勉強をしようと思う気持ち」は高まりました。しかし、「どうやって勉強したらよいかわからない」状態や、「ちゃんとできるかどうか自信がない」のでは、「力が付いた」とは言えません。「力が付いた」というためには、行動に表れていたり、行動に移る準備ができている必要があります。

この解説には問題点がある。例としてマインドは高いがスキルが低いものを上げた一方、マインドが低くスキルが高い例をあげなかったために、マインドがスキルの下位評価であるような印象を与えた恐れがある。生徒が、この調査を「変化」の調査ではなく「現状」の調査ととらえ、かつマインドをスキルの下位評価と考えた場合、スキルの肯定度はマインドの肯定度を下回るはずであり、前回の分析ではそのような結果が見て取れる。

今年の解説には、次のような文を付け加えた上で、表2を掲載した。

一方、「勉強はしようと思えばできる」「勉強したことがある」が、「勉強したいと思わない」人は、「力はある」が、「気持ちがない」人です。

2-2-2 マインドとスキルの肯定度比較

マインドとスキルが組になっている項目は11対ある。肯定的評価の割合でマインドがスキルより高かったものは9対、スキルのほうが高かったものが2対であった。昨年度はマインドが高かったものが7対、同じだったものが2対、スキルが高かったものが2対であったので、質問文の修正はマインドとスキルの自己評価に影響していなかったと考えられる。相対的肯定度ではマインドのほうが高いものが10対、同じものが1対で、これも昨年よりマインド優勢になっている。

2-2-3 対象生徒の変化の影響

報告の冒頭でも述べたように、今年の調査対象生徒にはSクラスの生徒が含まれている。したがって、二つの調査を単純に比較することはできない。

今年度と昨年度を比較すると、肯定的評価の割合が5%以上上がった項目（表1で割合表記が斜体になっているもの）が23項目ある。また、相対的肯定度が0.1以上上がった項目（表1で肯定度表記が斜体になっているもの）は6項目あった。これを5%以上、0.1以上上がった項目数（それぞれ6項目、7項目）

と比較してみると、肯定的評価の割合では低下した項目数が大幅に増加しているのに対し、相対的肯定度では変化はまちまちだという結果となる。

これらの変化が S クラスが調査対象になったこととどれだけの相関があるのかを検討した。各項目について S クラスの平均値（肯定的評価の割合、および、相対的肯定度）と全体の平均値を変位を系列 A とし、昨年の全体平均と今年の前平均値の変位を系列 B として、両系列の相関係数を算出した。

肯定的評価の割合の変位における系列 A と系列 B の相関係数は+0.42 であった。両系列には明確に正の相関があると言える。一方、相対的肯定度の変位においては、相関係数は+0.24 であり、かなり弱い正の相関がある。全体の集計で述べたように、肯定的評価の割合は、昨年に比べて今年が低下しているというはっきりとした傾向がある。一方相対的肯定度は昨年度とほとんど変わっていない。昨年度から今年度にかけての変位は S クラスが調査対象に加わったという要因でほぼ説明できる。

昨年度と同じカテゴリの集団（英語選抜類型全員と希望者）における調査結果の昨年度との比較を表 3 として掲載する。

表 3 「英語選抜類型全員と希望者」の肯定的評価、相対的肯定度の年度比較

	肯定的評価の割合	相対的肯定度	肯定的評価の割合（昨年）	相対的肯定度（昨年）
(1) 社会課題に関する関心が高まった。	93%	0.68	87%	0.66
(2) 社会課題に関する理解が深まった。	90%	0.69	82%	0.57
(3) 論理的に考えようとする気持ちが高まった。	81%	0.56	68%	0.43
(4) 論理的に考える力が付いた。	81%	0.54	66%	0.49
(5) 現象や他人の意見を客観的に比較して考よう(批判的思考)とする気持ちが高まった。	88%	0.64	82%	0.61
(6) 現象や他人の意見を客観的に比較して考える力(批判的思考力)が付いた。	86%	0.62	87%	0.61
(7) 自分の考えを發表しようとする気持ちが高まった。	79%	0.56	71%	0.47
(8) 自分の考えを發表する力が付いた。	76%	0.57	71%	0.47
(9) 他人の考えを理解しようとする気持ちが高まった。	95%	0.75	82%	0.62
(10) 他人の考えを理解する力が付いた。	95%	0.73	79%	0.59
(11) 他人と話し合い意見を交換しようとする気持ちが高まったが付いた。	93%	0.79	82%	0.63
(12) 他人と話し合い意見を交換する力が付いた。	88%	0.65	82%	0.57
(13) 他人と協力して活動しようとする気持ちが高まった。	93%	0.69	79%	0.59

(14) 他人と協力して活動する力が付いた。	<u>93%</u>	0.73	84%	0.66
(15) 問題を発見しようとする気持ちが高まった。	<u>90%</u>	<u>0.65</u>	79%	0.55
(16) 問題を発見する力が付いた。	<u>83%</u>	<u>0.57</u>	68%	0.45
(17) 問題を解決しようとする気持ちが高まった。	<u>86%</u>	<u>0.65</u>	71%	0.51
(18) 問題を解決する力が付いた。	<u>76%</u>	0.48	68%	0.39
(19) 自分から行動しようとする気持ちが高まった。	<u>93%</u>	<u>0.76</u>	76%	0.59
(20) 自分から行動する力が付いた。	<u>95%</u>	<u>0.75</u>	74%	0.54
(21) 他者に寄り添う気持ちが高まった。	<u>86%</u>	<u>0.67</u>	76%	0.54
(22) 他者に寄り添う力が付いた。	<u>81%</u>	<u>0.58</u>	74%	0.46
(23) 専門家に自分の考えを伝える力が付いた。	55%	<u>0.23</u>	53%	0.07
(24) 専門家と話し合い意見を交換する力が付いた。	<u>57%</u>	<u>0.26</u>	47%	0.07
(25) 専門家の意見を参考に自分の考えを修正する力が付いた。	67%	<u>0.42</u>	68%	0.32
(26) 専門家と協力して活動する力が付いた。	<u>62%</u>	<u>0.36</u>	50%	0.13
(27) 外国人に自分の考えを発表する力が付いた。	<u>81%</u>	<u>0.60</u>	76%	0.50
(28) 外国人の考えを理解する力が付いた。	<u>86%</u>	<u>0.64</u>	74%	0.46
(29) 外国人と話し合い意見を交換する力が付いた。	<u>81%</u>	<u>0.62</u>	66%	0.41
(30) 外国人と協力して活動する力が付いた。	<u>81%</u>	0.58	74%	0.49
(31) 課題研究のテーマを設定する力が付いた。	<u>86%</u>	<u>0.62</u>	58%	0.28
(32) 文献（書籍）を用いて課題研究の調査をする力が付いた。	<u>81%</u>	<u>0.61</u>	61%	0.28
(33) ネットを用いて課題研究の調査をする力が付いた。	<u>93%</u>	<u>0.73</u>	79%	0.50
(34) 英語を用いて課題研究の調査をする力が付いた。	<u>76%</u>	<u>0.56</u>	58%	0.24
(35) 調査したことをまとめたり分析したりする力が付いた。	<u>86%</u>	<u>0.68</u>	68%	0.42
(36) 調査したことをもとに自分の考えをまとめる力が付いた。	83%	<u>0.69</u>	82%	0.55
(37) 研究をポスターにまとめる力が付いた。	79%	0.62	89%	0.55
(38) 研究をプレゼンテーション（口頭発表）にまとめる力が付いた。	<u>86%</u>	<u>0.65</u>	63%	0.42
(39) 研究をレポートや論文にまとめる力が付いた。	<u>81%</u>	<u>0.60</u>	63%	0.34
(40) 研究成果を英語で発表する力が付いた。	<u>71%</u>	<u>0.49</u>	63%	0.32
(41) 研究成果をもとに社会に働きかける活動をする力が付いた。	<u>67%</u>	<u>0.42</u>	50%	0.18
(42) SGH の課題研究において研究成果がでた。	55%	<u>0.29</u>	53%	0.16
(43) SGH に関連して、学校が設定したもの以外に自主的に活動し実績を上げた。	45%	0.00	45%	0.08
(44) 活動が大学、学部、学科選択に影響した。	50%	0.08	53%	0.13
(45) 活動の影響で、将来留学したいという気持ちが高まった。	69%	<u>0.40</u>	66%	0.28
(46) 活動が将来就きたい職業に影響した。	55%	0.11	53%	0.16

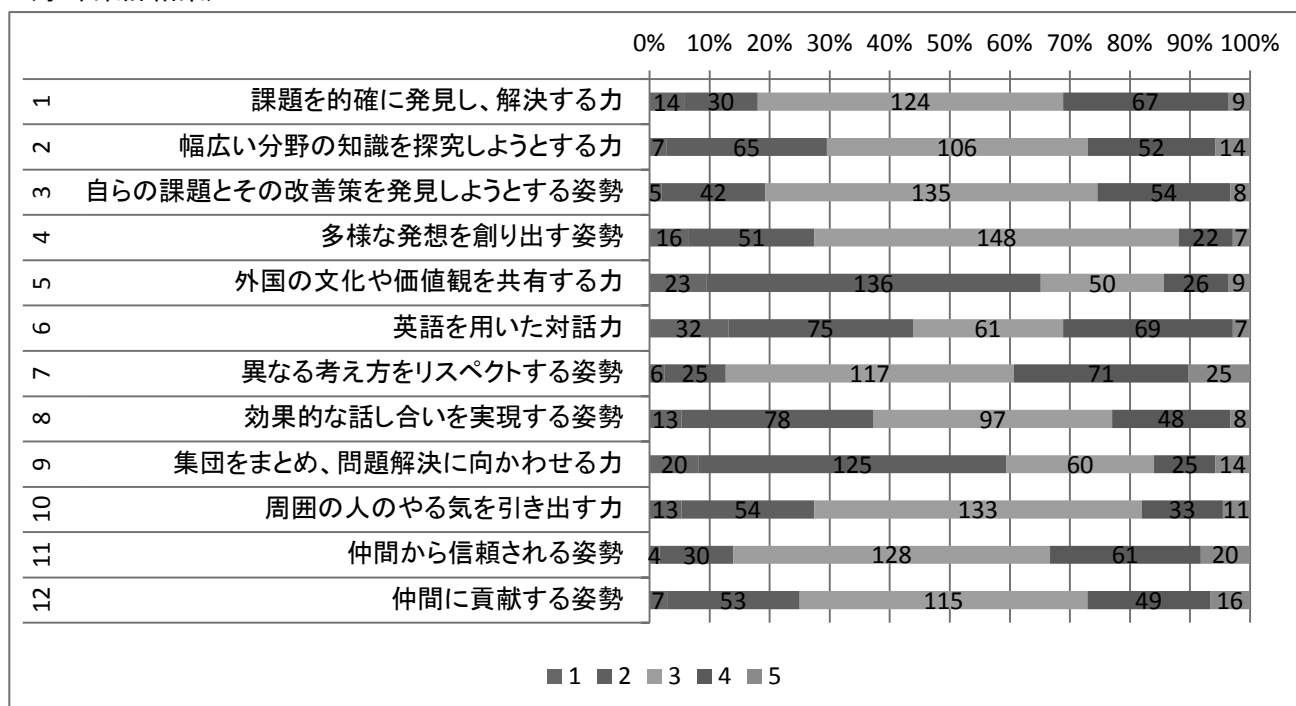
下線と斜体は表 1 と同様である。一見して明らかなように、この比較ではほぼすべての項目において今年度の肯定度は前年度を（時に大きく）上回っている。全体を平均した肯定的評価の割合は 74.1% で昨年より 4.6% の上昇、相対的肯定度は 0.52 で前年度より 0.10 の上昇であった。

12.3 SGH 基準ルーブリックアンケート集計結果

1. 実施日 : 平成 29 年 4 月 15 日 (土)
2. 対象 : 高校 1 年生
3. 概要 : 順天高校 SGH 概念図で提示している三つのスキル (創造的学力、国際対話力、人間関係力) と三つのマインド (主体性、多様性、協働性) を生徒に自己評価させたものである。

	創造的学力		主体性		国際対話力		多様性		人間関係力		協働性	
	1. 課題を的確に発見し、解決する力	2. 幅広い分野の知識を探究しようとする力	3. 自らの課題とその改善策を発見しようとする姿勢	4. 多様な発想を創り出す姿勢	5. 外国の文化や価値観を共有する力	6. 英語を用いた対話力	7. 異なる考え方をリスペクトする姿勢	8. 効果的な話し合いを実現する姿勢	9. 集団をまとめ、問題解決に向かわせる力	10. 周囲の人のやる気を引き出す力	11. 仲間から信頼される姿勢	12. 仲間へ貢献する姿勢
1	14	7	5	16	23	32	6	13	20	13	4	7
2	30	65	42	51	136	75	25	78	125	54	30	53
3	124	106	135	148	50	61	117	97	60	133	128	115
4	67	52	54	22	26	69	71	48	25	33	61	49
5	9	14	8	7	9	7	25	8	14	11	20	16
計	244	244	244	244	244	244	244	244	244	244	243	240

(学年集計結果)



4. 指標の妥当性について : ルーブリックを策定するとき最も難しい部分の一つが、評価文の作成である。評価文のスケールが生徒の実態に合っていないと、生徒が一部の指標に固まってしまう、スケールの意義が失われる。育てたい生徒像にこだわりすぎると、現状評価は1, 2だけに固まってしまうし、生徒を過小評価すると初めから4, 5の評価ばかりで目標指標としてのルーブリックの意義が失われる。

また、生徒に自己評価させる場合、生徒が自らを見つめる目の確かさによって、指標の分布は変化する。活動経験を積んで、自己改革が進むにつれて、自己評価が厳しくなる例もある。

基準ルーブリックは、基本的資質能力の評価の標準として、順天高校卒業時に少なくとも3の指標となるような設定を目指した。

4月に1学年を対象にルーブリック自己評価をさせた理由の一つは、この指標の妥当性を検証することであった。

結果は、指標1から指標5まで、生徒が分布していることが分かり、評価指標として判別力を持つ者であることが立証された。卒業時の最低目標としての指標3以上の割合は、最も低い項目5で35%、最も高い項目11で86%である。結果が80%を超えている4項目は3の評価文を見直す必要があるかもしれない。

5. 今後の見通し : 基準ルーブリックは、今後毎年自己評価させ、推移を記録していく予定である。また、全体平均ではなく、個別の変化についても追跡の必要がある。

基準ルーブリックは、順天高校の教育目標の達成度を全般的に測るものであり、特定の分野の活動の効果を測定する個別ルーブルックが、下位指標として接続する予定である。

平成29年度 順天高等学校 新教育課程表

平成29年4月1日

教科	科目	標準 単位	1年			2年						3年					
			特進選抜	特進	英語選抜	特進選抜		特進		英語選抜		特進選抜		特進		英語選抜	
						文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系
国語	国語総合	4	5	5	5												
	現代文B	4				2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	古典A	2					2										
	古典B	4				4		4		4							
	古文演習											□2		□2			
	国語演習											2		2		2	
	古典演習											4		4		4	
地歴	日本史A	2	2	2	2												
	世界史A	2	2	2	2												
	日本史B	4				*4	*3	*4	*3	*4	*3	*4		*4		*4	
	世界史B	4				*4	*3	*4	*3	*4	*3	*4		*4		*4	
	地理A	2				◎2	*3		*3		*3						
	社会演習											2	○2	2	○2	2	○2
公民	現代社会	2				2	2	2	2	2	2						
	政治・経済	2										*2]		*2]		*2]	
	倫理	2				◎2						*2]		*2]		*2]	
数学	数学Ⅰ	3	3	3	3												
	数学Ⅱ	4				4	4	4	4	△4]		4					
	数学Ⅲ	5											7		7		7
	数学A	2	3	3	3												
	数学B	2				3	4	3	4	△3]		4					
	数学演習											△2		△2		△2	
理科	物理基礎	2					3		3		3						
	化学基礎	2	2	2	2												
	生物基礎	2	2	2	2												
	地学基礎	2				2	2	2	2	2	2						
	物理	4										◎4		◎4		◎4	
	化学	4					2		2			4		4		4	
	生物	4										◎4		◎4		◎4	
	理科演習											□2		□2		□2	
体育	体育	7	2	2	2	3	3	4	4	3	3	2	2	2	2	2	2
	保健	2	2	2	2												
芸術	美術Ⅰ	2	2	2	2												
	選択音楽		※1	※1	※1												
	選択書道		※1	※1	※1												
家庭	家庭基礎	2				2	2	2	2	2	2						
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4	4	4												
	コミュニケーション英語Ⅱ	4				4	4	4	4	4	4						
	コミュニケーション英語Ⅲ	4										4	4	4	4	4	4
	英文購読									△4							
	英語表現Ⅰ	2	2	2	2												
	英語表現Ⅱ	4				2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	時事英語	2														□2	2
	英会話																
	外国事情									1	1						
	TOEIC/TOEFL									2	2					2	2
	英文講読									4							
	英語演習Ⅰ											2	2	2	2		
	英語演習Ⅱ											△2		△2		△2	
情報	社会と情報	2	2	2	2												
	総合的学習の時間	3~6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	単位合計		35	35	35	35	36	34	35	33~36	37	29	28~30	29	28~30	29	30~32
	特別活動		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

注1 * ※ ◎はその中で1科目選択
 注2 △は数学演習もしくは英語演習Ⅱ、□は古文演習もしくは理科演習のどちらか選択 ○は自由選択(2単位まで)
 注3 高3文系の日本史B(4単位)世界史B(4単位)および政経・倫理(合わせて4単位)より4単位選択

- 特進選抜類型 ◎卒業に必要な履修単位数 **99~103** 単位以上
 (うち学校設定科目の単位数) **14** 単位以下
- 特進類型 ◎卒業に必要な履修単位数 **98~102** 単位以上
 (うち学校設定科目の単位数) **14** 単位以下
- 英語選抜類型 ◎卒業に必要な履修単位数 **97~104** 単位以上
 (うち学校設定科目の単位数) **23** 単位以下